川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

昭和廿五年十一月一日第三種郵便物認可
昭和廿五年十一月一日発行（毎月一回一日発行）創刊大正十三年・通巻四〇二号

十一月号

No. 402

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社文化の夕

文化の秋です。
読むもよし、作るによし
文学する者のシーズンです
一句のこさんかな、いのちある句を。

日時　十一月七日（月）午後六時
場所　大阪観光ホテル　㊱三五〇八番
市電道頓堀電停東へすぐ
（日本橋北詰東入る）

兼題　「義　員」（三句）麻生路郎選
（部数の入選発表は十二月句会の会場でいたします。〆切後の投句は無効となります。（句箋の裏へ住所記入）
「乗り遅れ」（三句）黒川柴香選
「生き写し」（三句）川村好郎選
「石　段」（三句）後藤梅志選

席題　三　題（当日発表）　清水白柳
句評
呈賞　☆各題天位　☆路郎選天位に不朽洞賞
会費　百円
幹事　柴香・淡舟・いさむ・潮花・女秋・庸佑・狂二・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・水断・舟遊・柳芝子・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切毎月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・住吉㊲六〇八一

—12月本社句会—
"兼題"
煙り
才能
祝儀
舌打ち

日本盛酒坊

灘の清酒
ニホンサカリ

和やかに　まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻生路郎

暴力もヌマさん一人減っただけ

追悼演説ビクビクしながらやってのけ

選挙

血を売る男一票も売り

二三票売りたしあすの米代に

殺し屋もやめねばならぬ年が来る

紙幣(さつ)積んで積んで殺し屋うなずかせ

殺されるぐらいのことは常に云い

代議士も腰にピストル欲しからん

川柳雑誌十一月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
川柳作家と勧進帳……速水真珠洞……(17)
大仙陵を拝して川柳を憶う……八木摩天郎……(32)
川柳名句と難句……麻生路郎……(4)
唖の子の喧嘩……川村好郎……(15)
特集労働は神聖なり……白柳・花村・一瓢・与呂志・ひか平……(25)
輝やく巨歩……(36)
前田雀郎自選川柳三十五句……R・H・ブライス訳……(14)
★子供の読経……七面山(33)
★編集余話……一三夫……(13)

句評リレー……香林・烏雀・すゝむ・亜鈍……(18)

★川柳書架……(34)
不快な季節……東野大八……(20)
方正逝く……麻生路郎……(12)
孝明皇后と孝謙女帝……冨士野鞍馬……(16)
入院つれづれ記……西村梨里……(40)
特集灯火親しむ秋……文庫・文秋・晃……(30)
大阪市民文化祭川柳大会……(28)
絵と川柳で表現する歴史……戸田古方……(28)

★現代柳人録
川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(11)
近作柳樽……麻生路郎選……(20)
金泥集……北川春巣選……(40)
各地柳壇……麻生葭乃選……(41)
柳界展望……(38)

★不朽洞会から……(39)
入門講座……清水白柳……(34)
「寝台」……武部香林選……(36)
一路集「靴」……黒川紫香選……(37)
「内助」……田中烏雀選……(46)
★路郎メモ……

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘

川柳

名句と難句

麻生路郎

〔八九〕

キャッシュ　キャッシュ　キャッシュとネオンいいたそう　（麦　彦）

夜空にまたたくネオン、それはパチンコかキャバレーか。

現金を持っていらっしゃいといいたそうに受けとれたのである。キャッシュ、キャッシュ、キャッシュと大胆な表現技巧もいいし、ネオンの擬人法も面白い。

〔九〇〕

だれにでも嫁くウインキー多情もの　（風船堂）

ウインキーは大たい幼い子どものおもちゃだが、それがハイティーンの女の子などのアクセサリーになってしまったようだ。彼女から彼女へと、誰れの腕にも抱かれるので斯うした句が生れたのである。誰れにでも嫁くとは巧みな表現だ。

次にウインキーについて少しく解説しておこう。

ウインキーは東京浅草桂町十一番地ツクダ屋玩具店から売り出されたウインクする黒ん坊人形のこと。（カット参照）三、四才の子どもが寝ながら抱いて遊べるところから、ダッコする黒ん坊という名前であったが、四月に、デパートへ進出、ハイティーンの女の子がダッコちゃんを腕にからませて銀座通りをかっぽしたのでウインキーブームとなったもの。

デパートではウインキーを買う人たちが行列をなしたので整理券を出す騒ぎまでおこした。ダッコちゃんは腕でもどこへでもからみつくのが魅力となって、ローティーンやハイティーンの女の子から、若い奥さんまでが愛玩した。フラフープ以後のブームだ。

〔九一〕

高島田スプンレースに似た歩み　（東　岸）

日本髪の丸髷や桃割れは年越しのお化け以外には全然見られなくなったと云ってもいいだろう。それほど日本髪はすたれてしまった。高島田は年頃の娘の結う髪であったが、近頃では結婚式の花嫁姿以外には見られなくなった。それもかつらの高島田で女自身の髪ではない。その外には祝日や宴会などで芸者の高島田を見かけるが、これとでもかつらである。

この句は高島田の女性が首を据えて、しずしずと歩を運んでいる情景をスケッチしたものだが、運動会で首を据えてソロソロと歩いてゆくスプーンレースに見立てたところに何んとも云えぬユーモア味があって面白い。比喩法の句として確かに成功していると思う。

〔九二〕

俺も痴漢の素質があると思う宵　（多久志）

黄昏れの街を別嬪が行く。フラフラとそれについて行く。暗がりに来て女との距離はだんだん狭ばめられた。女の白い横顔に魅力を感じた。ここで抱きつけば、自分も一人の痴漢にすぎないと、作者は考えたのだ。大ていの男性が持ち合せている恋情を一人称で正直に告白。

〔九三〕

一点の目にも表情あるこけし　（旅　風）

コケシはごく単純で素朴な木製の人形である。顔なども、大雑把で、目もチョンチョンと点を打ってあるに過ぎないが、それでいて何んとなく可愛らしく出来ている。「一点の目にも表情」のあることをつかみとったことは作者の手腕だと云えよう。

こけし（木形子）は土俗玩具の一種で、円筒形の胴体に這い子風の首を添えた木製の人形である。彩色の稚拙美がその特徴で、もともと東北地方の特産であるが、全国いたるところの玩具店や趣味の店で売るようになってから、こけしまがいのものがはんらんしている。

〔九四〕

蒸黨の方がいきいきして暮し　（晃　）

法の金縛ばりにあい、義理人情にいためつ

けられて、かろうじて生きていることを思うと善人ほど弱いものはない。その点悪党のハツラツとして思う存分に生きているのを見ると、「オヤッ、これでいいのだろうか」と思うのはインテリばかりではなかろう。

〔九五〕

ですよですよで首相つっぱる気

（草　右）

ですよ、ですよは、失政をした当時の首相が、何んとしてでも居据わるために、他人をせっとくしようとする時の語尾であった。その口癖をとらえてその人物をはおふつとさせたところはなかなか面白いが、時事吟式な短命な句であることは否めないと思う。この句の首相の名は岸信介（きしのぶすけ）である。衆議院議員で自民党所属。明治二十九年山口県に生れ、旧姓佐藤で岸信政の養子となった人。

〔九六〕

停電は予期してなんだ電気釜

（文　秋）

住宅が当ったので若い彼氏と彼女の共稼ぎが始まった。スイッチ一つでご飯が炊けると朗らかな電化生活へと踏み切ったものの、一週間も経たぬまに、予期もしなかった停電だ。二人は電気釜を狭んで朝ッぱらからの悲鳴をあげた。そして人生行路のむずかしさは、停電と電気釜の躓跌に限らないことを学ばされた。

〔九七〕

今だから話す赤紙にはあわて

（甲　吉）

「今だから話す」という言葉が一時流行した。そんな本も幾冊か出たように思う。この句も戦後十幾年経った今日、赤紙の来た当時を回想して正直に告白したのである。

こうした経験は云うか、云わぬかだけの違いで多くの人達がみなそうだった。ここに穿ち句としてのいのちがある。

〔九八〕

私だけの鯨尺にて着物縫う

（若　菜）

敗戦後、十幾年も経った今日から見ると、あらゆるものが変革していることに気づく。

市場へ行っても、老婦人までがキロやグラムやと云って買物をしている。この裂れは一メートル幾らですかと、それもおばあさんの声だ。だが、この句では、どこまでもしきたりのままに生きて行こうとする女性が詠まれてある。この年になって今更何メートルだの何センチだのと覚えることもいらない私だけは私の鯨尺で着物が立派に縫えると云うのである。

この句は作者の個性をそのまま打ち出した句で、いいとか悪いとかいう問題ではないが、時代に後ろ向きの生活には時に不便なこと、不愉快なことがあるものだ。

〔九九〕

名刺要る職をどうにかあたえられ

（季　貧）

労働は神聖だと云うが、明けても暮れても、出前持ちや荷物運びでは何年やっても浮ぶ瀬がない。しかし永年の努力が遂にむくいられて、どうにか名刺の要る職が与えられたのである。自分の名刺を穴のあくほど眺めたに違いない。大きな喜びに手をふるわせながら……。この句の「名刺要る職」という句語は一つの発見であると思う。

〔一〇〇〕

顔にケチつけて仔犬を捨てさせる

（日　満）

「なんだ、こいつ、くっしゃみをしてるような顔やないか。」

と、顔にケチをつけて、

「オイ、北出夫、広ッパへでも捨てておいで」

と云う。同じ捨てるのなら、ケチなんかつけないで捨てた方がいいだろうのに。

この飼主が顔にケチをつけたのはこの仔犬が捨てられるには捨てられるだけの理由のあること自分に云い聞かせるためにこさえあげたのに外ならなかったのである。斯ういうことは仔犬の場合に限った訳ではない。人間の場合にも適用されると思うと良心のうずく話である。

〔一〇一〕

始めからあぐらで聽いているお經

（圭井堂）

既成宗教は堕力の宗教である。家の行事の宗教であって人の信仰による宗教でなくなったことを加実に物語っている句だ。

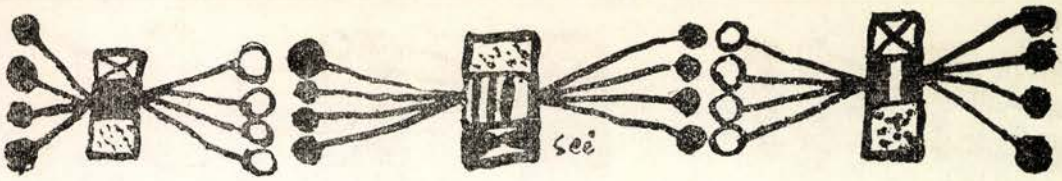
坊さんに頼まなくてもお経のマイクを仏さんの方へ向けておけばいいという人種がだんだん殖えるのも最な話だ。作者は滅びゆく宗教を唖然として見送っているところにこの句の優秀さがある。

結婚式場
長生殿

神殿(2)控室(16)宴会場(和洋9)御待合室・更衣室・美容室・写真室のほか　貸衣裳一切を完備しております　6階

金曜定休

松坂屋
大阪日本橋三



川柳塔

豊中市　戸田古方

五体そろってて人物がちがい

大阪市　市場没食子

平和主義それも左右のボスが居て

右左白と黒とに世は分れ

下手な字であの人らしい返事が来

西宮市　若本多久志

霧の夜港神戸は唄になり

気にいらぬ柄へ娘は軽くすね

秋の夜を別れた女想う酒

大阪市　正本水客

お世辞のない三行広告が好き

蚊を叩くことも嬉しい仲であり

大阪市　丸尾潮花

あすにでも捨てられそうに化粧する

酒逃げて窓を流れる灯を見つめ

大阪市　西　いわを

お社(やしろ)の右も左もホテルの灯

としよりの日にとしよりに励まされ

岡山市　武部香林

こころ（四句）

喜びが犬の所作ほどあらわせず

母ちゃんを甘くみているドレミファソ

彼には動物的反能しかなかった

交番で子を思い出すのんだくれ

大阪市　北川春巣

冷房完備女給うっかりくしゃみする

観光ブーム山もお城も金になり

まだ新米かバス嬢の細い脚

大阪市　須崎豆秋

なつかしく電車やバスを見てる試歩

売店へ立寄り試歩は何か買い

ホノルル　羽佐間柳葉

処世術社長の犬まで褒めちぎる

都市開発環境無視したビルが建ち

戦前派やっぱり義理に囚われる

堺市　吉田圭井堂

何もかも戦後ですわと嫁のこと

真剣なラブをおっちょこちょいにされ

山口県　国弘半休

婦人服座りたまえとも言えず

家柄の琴床の間で退屈し

扇風機少しほこりを着て残暑

純潔を守れと本当の母が言い

防府市　長野井蛙

愛情に生きんがための死を選び

颱風は先手先手と立回り

岡山県　直原七面山

窓という窓みな開けて肺ですの

夢一つずつ消えて定年間近なり

大屋根から日曜大工落ちて死に

平凡を愛して生きろと恩師云う

気の強い後妻が一家盛り返えし

蝉が鳴く君と別れた日のように

人を焼く煙を画家は青く塗り

鳥取市　河村日満

颯爽と和尚単車で来て念じ

やくざまで団結をしてゆすりに来

愛情が空滾むような人にする

おばはんの腕もかかえてウインキー

豊中市　足立春雄

万才の種になり相な帰朝談
夜の部ははぶいておいた復命書
人類にも白黒のある不公平
どぶ臭い羽田について幕が下り
たまさかに揃って出れば雨となり

倉敷市　木村千容

気のゆるみよく知っている灰こぼし
もちまえの気質納得してくれず

加賀市　野村味平

川雑四百号記念大会に出席

いつまでも心の奥にきざむ人
親ほどに齢も違って飲み仲間

大阪市　木村水堂

お目出度い席で不肖の弟子も酔い

祝川柳雑誌四百号

風雪に耐えてわが道ゆく夫妻

高槻市　福田丁路

当て込んだ株が下って秋深し
ピアノでも買うたろかと豊作に酔い
下積のままで銀婚式を挙げ
継母の誠意近所に認められず

大阪市　真鍋一瓢

銚子一本二本暮色に溶けこまん
移り気の女ページを繰るばかり

大阪市　後藤梅志

いつからか畳の上で死ぬる気に
秋の蚊が逃げのびて行くズボン吊り
這い廻る蔦へポツンと椅子を出し

米子市　小西雄々

夕立が止むまで飲めと酒屋の灯
矣すえて明日の勤めに初老耐え

大阪市　山川阿茶

低姿勢扨と出そうで気味わるし
観衆が投手交代叫び出し
友党よそこのけそこのけ遊説通る

大阪市　金井文秋

いつまでも達者ですなが気にさわり
成上り金をバックによくしゃべり
自動車がさしずめ当っても困り
ほら吹いた報いが寄附でいじめられ

加賀市　那谷光郎

ゴムバンド二度目の役を待つ手首
出しゃばりがうちの寿司迄まきにくる
枕元に入歯を置いて病む哀れ

岡山市　浜田久米雄

初孫が蚊にくわれたですこしもめ
じいちゃんの寝巻むつきでひるがえり
晩酌の方へ初孫向かせとき

岡山市　逸見灯竿

無為徒食ではない植木へも水をやり
切捨て御免そんな時世もあったけど

二女嫁す

荒浪を越える二人の櫓が揃い

出雲市　尼　緑之助

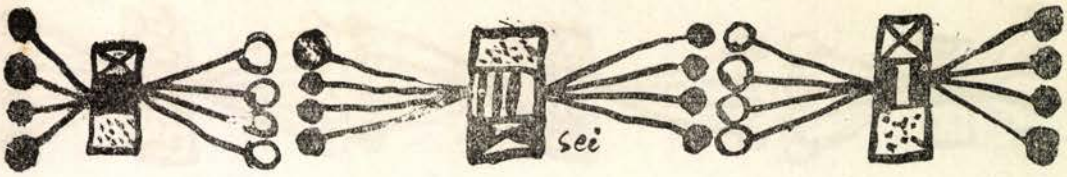
死んだ人みななつかしくなって秋
お茶に行く着物未婚を盛り上げる

鳥取市　杉谷湖山

溜息をつかせて海女のまだ浮かず
健忘症も暑い暑いを忘れず居
招待をした方へ妓いっちまい
旧友のポッテリしてるのを連れて

京都市　大鶴喜由

今東光なめくじも食い人も食い
嫁にする口説きにかくももろき娘の
組む腕のあながち恋に候わず



大阪市　冨岡淡舟

水だけで済む植木鉢買うて来る
マルクスを祟拝してる乱れ髪

奈良県　飯降白香

老醜を露骨にみせて嫁いびり
キス・ペッチィングもしらず青春悔もなく

岡山県　福島鉄児

役得は主婦の不在に見るテレビ
善いことが続いて年寄り不安がり
かけ持ちの講師仇名も二つ持ち

尼崎市　長谷川三司

明治の郷愁三亀松にもうあきる
スリーA喫ったら詩でもうかぶかい

西宮市　若林草右

アルバイトすめば角帽しまいこみ
邪魔な土運んで坪が万になり
どうやら女らしいボタン左前

高知市　大西迷窓

型だけでいいから抵抗してほしし
母ちゃんとたまに歩けば妓に逢うて
若いこと言いなさんなと妻は老け

岡山県　田村藤波

家計簿を見透かしておる八百屋
人生観の相違で爪に灯をともし
兄貴兄貴と呼ばれてつらい尻拭い

児島市　本田恵二朗

黒幕が死んで実力ガタと落ち

京都市　松川杜的

〃十、下でよかったわ〃と鏡へ妻(おんな)
フラフープの運命も知らずにだっこちゃん

倉敷市　松村万古

米を召し上がれ首相の低姿勢
骨の有る男で出世また遅れ

岡山市　津田麦太楼

洋蘭の御趣味社長は子に譲り
エエ焦れったい抱っこちゃん放り投げ
賑やかな養老院の井戸浚らえ

堺市　高崎雄声

満員な後を待てない若さもち
女子大出あたら家庭でくすぶって

島根県　藤井明朗

婚約の裏素っ破抜く週刊誌
婚約をしておとなしい娘にかえり
デートする日は抱っこちゃんほっとかれ

岡山県　永松東岸

恐ろしや柔道初段嫁に行き
保険屋のねばりがあれば出世せん
人の子に靴磨かせる気にならず
こんな世に呆けているのは倖か
愛人の嘘にほほえむ程に惚れ

倉敷市　野田素身郎

視界から去ってもデッキをまだ去らず
初恋の人の子供を抱いてみる
哲学書ばかり読んで頼りないお人

大阪市　伊達堰子

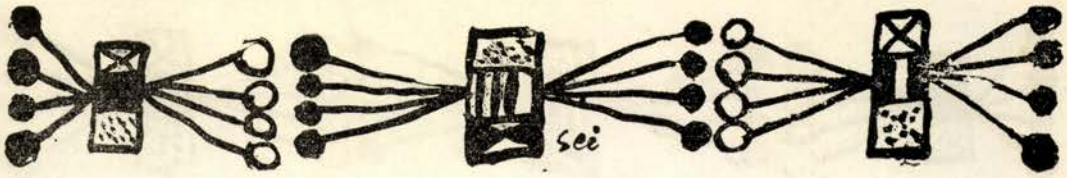
問い合わせ裏を悟らず日が決まり
月の道おまえ黙って歩けんか
朗らかな便りの誤字に味があり

大阪市　不二田一三夫

三流館ときどき画面オシになり
目のほこり吹いてもろうて冷やかされ
この程度で力士は美男と騒がれる

兵庫県　酒井ひか平

せめて月でも見ましょ半分落ちた橋
父の意地パンツのゴムが気に入らず



宇部市　津　秋　六　花

先生だった頃程ちやほやして呉れず
定年のあせり後添又孕み
四十と見せぬ化粧へ待たされる

神戸市　丸　川　初　甫

家族連れハイクの様にデモ参加
団地だけで売れる見込の荷をおろし
酔うてはる固い握手へ笑っとき
本日休診二階の窓の笑い声

岡山県　池　田　古　心

革新を叫べど家柄捨て切れず
老夫婦デッカイ家を持て余し

大阪府　早　川　清　生

キリストに英語で祈る留学地
隣り合うて食べても都会他人なり
連れ込んでみればあかぬけせぬ女優
自分描き終えて結局作家死ぬ

岡山市　武　部　若　菜

主権在民でとお役所の都合
よくわかってくれて公僕力なし
絵本だと思ったらみんな教科書

堺市　辻　圭　水

受話機をばさかさに持ったあわてかた
電話にも最敬礼の儲け口
次点にはマスコミ見向きもしてくれず
次点だと決まって疲れどっと出る

岡山県　野々口美舟

お悔みがはっきり言える年になり
お見合の結果娘は泣いてみせ

西宮市　小　浜　牧　人

打明けてともに悲しき二人なり
水うまやカットグラスは透きとおり
秋バラへ二百十日も無事に過ぎ

大阪市　菱　田　満　秋

やけくそで飲もうと女給に誘われる
秋深しわたしはひとりぼっちです

兵庫県　前　川　左　文　字

スクーター養子は行儀よく走り
三人の君も父かいしんどかろ
新学期忘れ物した子が走り

大阪市　橘　高　薫　風　子

湯上りの機嫌狙うて来しごとし
誕生石生まれながらに貧富の差
金貯める主義には少し若過ぎる

大阪市　桝　本　蕗　児

美人ですこの暑いのに和服きて

大阪市　西　川　晃

ころっと俺が死んだらと妻をいやがらす
ガム噛みながら人殺すはなし
頼りない郵便局をたよりにし

釜ヶ崎風景

パンパンに税金を取る黒メガネ
ダンゴ汁あしたはあしたの風が吹く

神戸市　仲　どんたく

にやにやと笑う長女へ口止め料
勝て勝てと選手のうしろ髪をひき

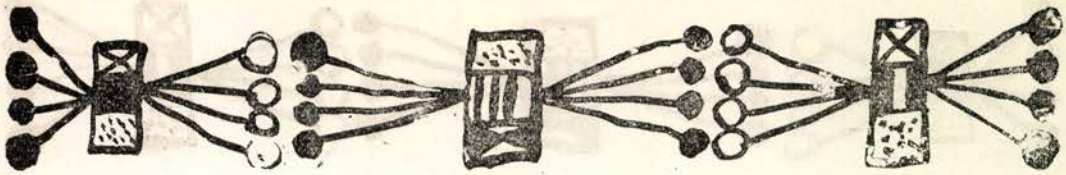
平田市　久家代仕男

槍さびをほんの座興と盲縞
敬老会野球へ欠伸して帰り

大阪市　本　多　柳　志

回顧十五年

火たたきを立てかけといて乳をやり
みことのりへ泣くゲートルが辷り落ち
小ッぽけな怒りを月に笑われる
戦は終れりヒマは実りけり
大本営日本一の嘘がばれ



焼け跡へ田舎言葉の子が戻り
二百円瑞穂の国の米の味
出雲市　原　独仙

子のませた事をテレビのせいにする
旅一人トリス舐め舐め週刊誌
かまきりに似たマスターで栄養士
大阪市　大谷月都

足下の新聞さえも取らぬ人
岡山市　江国幽谷

甘い話になるころ妓座をはずし
波立てて泳いで魚見つけられ
岡山市　光好陽子

働けば直る病気で貧乏症
セックスの前科良縁取り逃がし
西宮市　河相すゝむ

曼珠沙華久しく訪わぬ墓のこと
大東京宮城邪魔になり始め
西宮市　野呂鵜汀

御主人を褒めたら褒めて返えされる
西宮市　樋口舟遊

有名無名女のえらさはたかがしれ
新潟県　高野むじな

社説読んだ知識とわかる受売りし
バスガールに自殺の名所教えられ
大阪市　欄蘭

舞台度胸満点ですと煽てられ
がめつして残した金を誰にやる
大阪市　石倉旅風

うなずいて知ったか振りで軸を見る
もう一度来る気にさせた島の雨
大阪市　魚住満潤

続西成界わい（七句）

陽なたぼこ夫婦（みょと）が縄の帯をしめ
たこ焼の車照る日も曇る日も
金語楼に似た顔でいて高利貸
差押えの外ありませんとハガキ来る
釜ヶ崎に住んで俳句の号も持ち
心臓マヒ女の惚ろけ言いながら
黙否権吃に便利な法があり
大阪府　林昌男

自家用で見舞ってくれた秘書の風邪
女事務まだ冗談を気にしてる
愛媛県　村上旭童

憲法がどうあろうとも頑固もの
倉吉市　大前鳴恍

靴べらも仲居はとってくれもせず
食欲のもどらぬままの秋の風
新政策妻も社説を読みはじめ
鳥取市　北村三歩

彼奴にはなにはともあれ反対し
ラジオにも妻にもそむき濡れねずみ
計量器もう一呼吸すって見る
神戸市　傍島静馬

珍らしいうちだけ赤ん坊写される
颯爽と法衣風切るスクーター
岡山市　宗高矢寸志

ガムを噛みながら気を引く目付きをし
農繁を選んで死んだのではなし
見渡せば通夜に似ている通勤車
大阪市　河井庸佑

東京で勉強してると信じこみ
ほってまんねと言いつつのぞく親心
大阪府　谷沢好祐

飲める時飲まなと焼香して悟り
カンフルへ他人（ひと）は暦を繰って見る
泉大津市　高津徹也

秋風を横丁に折れてかわしけり
朽ちるもの朽ちて旧家を母まもる
愛媛県　槇　柴光

彼女から電話歯痛もちと忘れ
無抵抗主義で布団をひっかぶり
山勘が当って次の慾を出し
売名の花輪フランと見て通り
青森市　工藤甲吉

ひッこんだ腹へ近所もほッとする
お言葉に甘え役人召しあがり
口端にものらなくなりぬ前首相
また秋が来て母の手は編んでいる
死んでしまえばそれまでの柩行く
西宮市　門永三舟

夕立の小駅に濡れた競馬ファン
ベースアップ金銭は無いよと社長云う
お女中の恋は花火に似て消える
玉野市　伊原明林

子の出世喜ぶ父は平巡査
非常持出と書いて一番奥に置き
お便所で出来たアイデァとも言えず
神戸市　室田千尋

露ほども口車とは思わせず
考えることの自由のすばらしさ
恋たのし指のすき間を砂がもる
長生きをしてねと嫁のいじらしや
豊中市　林夢虹

縄飛の少女の髪の重たくて
秋風は人恋う風ぞ人を恋
二十三で死ぬ気の女名はリカ子
西宮市　山本一傘

どん底で妻は女が嫌になり
酔うて来た訳を出戻りいいたがり
大阪でした極道を自慢する
大阪市　今西生菫

日本間敷居の隅へへり下り
差向い二号が縫うた浴衣着て
京都市　室井八九寸

時刻だけ空けて死を待つ新聞社
弔電は肩書へ声張りあげる
竹原市　杉原愛鳩

次の客来てから鋏早くなり
年よりへとうとう席をたちそびれ
黒ん坊の人形ごときにさわぐ国
大阪市　橋本緑雨

同舟近詠

風鈴も時たま鳴って静かな夜
空財布男でございと云えもせず
バスの疲れにどの辺が宿かいな
須坂市　高峰柳児

定年へ持病めっきり募って来
通話料払って恋を燃やしてい
あきらめた通りになって慌てたり
ビールなら飲める女のあなどれず
敦賀市　船木夢考

恋人にされたを拗ねた眼で見られ
もう少し上手に書けぬかプラカード
告別式内心安堵の顔も居り
双方の説にうろうろ小市民
馬鹿な真似墓石へ名刺おいてあり
大方は全然言わず会議済み
和歌山市　秋月宏方

台風台風つまり宇宙のしゃぼん玉
思い出は飯場の飯を食った頃
白髪まだ第一線で働く気

不快な季節

東野大八

口取り解消

「おい口取りがまだ来ねえゾ」

「アラすみません、今日からサービスの口取りはやめにしました」

「そりゃまた薄情な」

「お酒の自由販売が原因です！」

女将に話をきくとこうである。十月一日から丸公撤廃となり、地酒で十円、灘、伏見のメーカーもので二十円、青びん毎に値が上ったのだそうで、店先のサービスは随ってヤメ。ワクが外れて自由になったトタン、口取りのサービスがなしなんて不自由な話だ。こうなると仕方がない、指をなめなめ酒ものめないので、最低の小鉢物の一つでもとらざるを得ない。かくて五十円のコップ酒に二十円の味気ない煮〆、約四十%の出費と相成っては酔いの回りも悪くなる。大体がのんべという奴は意地が汚い。ウケ皿にこぼれた酒の方がコップの中味より味がいいなんていう。当地の盛り場なんぞ、そのウケ皿をとりあげた店まである。その上、御焼香のおつまみほどの口とりが廃止とあっては、日本酒恋しい秋というのにカックンである。皿が逃げ出し口取りゃ消えるタコのおかずで足が出た、こいつはあんまりいいドイツではない。

コナ屋の娘

酒の値上りで晩酌の代りにラムネでも出そうな雲行きとなった昨今、中華そばも三十五円から四十円になり、五十円がとこまで値上りした。なんでもその原因は、中味になる焼ブタの値上りによるものだとある。トンだ話である。一方パンも一山いくらとこれまた上った。今様シンデレラ、コナ屋の娘がプリンス夫人に、とあちらのマスコミが書いた正田美智子のお嫁入りにこれは関係がありそうだ。つまり正田さんの家は日新製粉でこの方ではA級メーカー品である。嫁入りときまったとたんに株価が五十円も上ったのは有名な話だ。こうなると下手から上手への御結納の儀は今後よくよく考えてもらわなければわれわれは困る。ついでに散髪料金も上った。洗髪して油をつけてハイなんぼというむかしのサービスと技術の一体料金が各個独立して定料金になった。胸くそが悪いので頭だけ刈らせて家で安全カミソリを使った人がいたが、その日一日中背中がカユくて仕方がなかったそうである。この分でいくといまにお米が自由販売になったら、軍隊にあったような食器袋に箸箱もって近くのめしやへでかけねばならなくなりそうだ。

三十センチの兇刃

ここまで書いたら、私の好きなヌマさんこと浅沼稲次郎さんが暴漢に刺殺された。ヒドイことをしやがる、テレビの青いガラスの映像をニラミつけて、私は思わずこぶしをにぎって叫び声をあげてしまった。一点差の大洋—大毎戦などこうなるとクソ喰えだ。ヌマさんは本当にいい人だった。政治家の中でこれほど純粋に大衆とともに心を交わせて生きてきた情熱家はいなかった。岐阜へある事件で来られたとき、野外で簡単なパーティが催された。二合瓶をとって手近な人たちにお酒をつぐイナさ

ありし日の方正医博

方正逝く

方正・尾崎朋晴医博が十月十一日午後四時十三分、胃ガンのため鳥ヶ辻の大阪逓信病院で永眠された。六十二才。牌名、全提院医王智耀居士。告別式は十月十九日午後二時から、四天王寺本坊で大阪逓信病院葬（院長福島寛四医博）の下に執行された。

氏は明治三十一年七月七日、奈良県高田市（当時高田市外）に生まれ、大正十四年大阪大学医学部を卒業、耳鼻咽喉教室に入局、昭和十六年九月大阪逓信病院創設の準備委員を嘱託され、昭和十七年一月十日、耳鼻咽喉科部長に任官され、終焉の日まで十有八年の長きにわたって其の職に尽瘁せられた。その間、昭和三十二年四月には米国に於ける第六回国際耳鼻咽喉科学会に出席され、学会終って欧洲各地を視察された。氏は資性快活、物質に恬淡、多くの人たちから親しまれた。晩年に結婚されたので嗣子はなく遺族としては都喜子夫人おひとりである。

氏の趣味としては山登りに川柳の作句、時に絵も描かれた。あの肥満な体軀で朝鮮の金剛山などにも登られたほどの山好きで、暇さえあれば山へ登られたようである。川柳は昭和六年七月二十五日に創立された阪大川柳会当初からの会員であり、大阪逓信病院へ就職されてから間のない昭和十七年六月二十五日には大阪逓信病院川柳会を創立された。阪大、逓信を通じ三十年間、麻生路郎先生に師事され毎月の句会には殆んど欠かすことなく出席されていただけに多くの名吟佳句を遺された。句会ではよく冗談を云われたが、自己の作品に対しては至って謙虚で、病院句会の選者をされた場合にも選者吟は必ず路郎師に目を通してもらうことを忘れなかった人である。病院に於ける功績の大きかったことは一部長に病院葬の待遇をもってせられたことからでもうなずき得られるであろうし、病院川柳会が昭和十七年以来今日まで多

んの太い指に小っちゃいサカズキがはずかしがって消えそうだった。そこには人の温味がイヤというほどみちあふれていた。

「その腕、戦争ですか」

例のしわがれ声でイナさんは低く私にそう声をかけ、うなずいた私に、何んにもいわず眼をしょぼつかせた。

やった暴漢は十七歳の少年刺客で、長さ三十センチの刃物を柄まで通れと三カ所もやったという。小僧っ子のくせに本当にバカなことをやってのけたものだ。私は以来今まで、好きなすし屋へは一切立寄らない。イヤでもそこでは、三十センチのさしみ包丁が眼につくからである。

「おれは手前が好きだが、殺さにゃならねえ義理がある」

くわえタバコのその男は、ニヤリとそういって笑うと、ユックリ黒い手袋をはく。これが映画その他でおなじみの〝殺し屋スタイル〟である。こんな変てこな風潮がここ数年来にわかに流行しはじめた。非情なサスペンスドラマのこの主役は、考えてみると残酷物語何々という〝新らしい波〟のしわぶきを運んできた。だが考えてみるとこうした風潮は、そのかみの粗暴な軍国主義的殺リクのハチマキ精神につながってでもいるようだ。

兵隊時代のわれわれは、よく一弾一敵の敢斗精神をたたきこまれ、戦局の深刻さにつれそれは一機一艦の特攻精神にすりかわった。体当りだの斬り込み作戦の本土決戦の気構えは、明治維新から今日におよぶ超国家的な神道惟神の反共立国以来の伝統だ。〝誠〟の旗をかかげ京洛をカッポした新選組のテロ精神にそれはうけつがれ、二・二六事件となりミリタリズムとなり戦争となった。平時の殺傷は由々しき刑罰が待っているけれども、聖戦と名のつく下の軍帽は、神の意にそむくあらゆるハレンチな行為も武勲の一つとして許された。この殺ばつな非良識さに培かわれた人間の奇妙な意識は牢固たる斗争精神を今の世にまで伝えた。国民の最高の良識の場である乱斗国会が、議長席を敵陣と見たて殺到怒号しカーキ色の軍服にかえたくなり〝われらの敵〟のこの観念的な解釈や行為がやがて、岸さんや河上さんや鈴木茂三さんをもネライついに浅沼さんを刺殺した。三池争議にも一人が血にまみれて殺され、職場斗争の場にさえテロがいたのだ。

〝人民による人民のための人民の政治〟を叫んだリンカーンも劇場の桟目の中で殺されたが、この叫びを血でかき消すテロの暴リツは決してわれわれにとっては他人事ではない。

★★ 編集余話 ★★

昨年の九月号に、「わが愛妻の句」を特集したとき、ぼくはドエライ失敗をやらかした。というのは、

中共から連れたワイフは下駄が好き

の作者である野村味平氏にも、ご執筆をねがったところ、

——いまだ妻帯の経験なく——との返信に、これはわるいことをお願いしたものと、パッのわるいお詫び状を送ったものである。

そこでその翌々月の十一月号に、「わが独身の句」を特集して、味平氏にもご登場願い、

四十処女きたならしきたならし

と詠まれた故尾崎方正医博と、

男皆阿呆に見えて売れ残り

の山川阿茶氏にも執筆していただいたのだが、こんどは方正氏から、

——近く結婚する——というお便りだ。なすことすること反目反目と出る。しかし事実上はまだ結婚をしていないから、

——執筆OK——となり、どうやらボロを出さずにはすんだが、本になるまでには、いろんなことがあるものだ。その方正医博、いまは亡し、ああ——合掌。

（一三夫）

年永続され職員間の潤滑油となったのも、実に氏の偉大なる功績でなくて何んであろう。病院にとっても、川柳会にとって寔に惜しい人を喪ったと云わねばならない。茲に謹しんで英霊の冥福を祈る。

合掌

方正句抄

薬瓶ごちゃごちゃ並べ蒼う居る
窓ぎはの女の腕は蛸に似て
一号もないのに二号すすめられ
無理すなと云われた方が生き残り
袖口を気にせぬ方が美人なり
喋り散らして診断聴かず去に
タバコ一本女の電話まだ続き
観劇へニキビ一つで取り消す娘
流行っ妓かづらを取ればアプレにて
腕時計戴くように視る薄暮
あだ花が散ったと思え世継なし
悠々と流れる水の恐しさ
こんな奴が軍にいたのか敗ける筈
数の子で一杯出しておっ払う
断わりの手紙を追うて娘の電話
馬鹿正直と云われた俺が長く生き
席捜す眼には五寸が広く見え
独り旅菜の花たんぽぽ蓮華草
枕元捜しているは入歯なり
それ程の髭でないけど刃を研がん
相性がどうであろうと晩婚の
憂しと見し身も優曇華の晩婚の
夜でなくてよろしかったと他人の死の
里帰りもう一晩の電話受け
年齢の差新妻へ逆らわず

前田雀郎自選川柳三十五句 (3)

アール・エッチ・ブライス訳

Thirty five senryu (Witty Japanese Verses of the shortest type)
self-selected by Maeda Jakuro Translated by R. H. Blyth

垂乳根(たらちね)や　寝返りの手に　子をさぐる
Tarachine ya negaeri no te ni ko o saguru

The mother
As she turns over in bed,
She feels for the child.

置時計　柱時計を　追ひ越す気
Okidokei hashiradokei o oikosu ki

The table-clock
Is trying to catch up with
The wall-clock.

病人に　夜長の　膝を頼られる
Byōnin ni yonaga no hiza o tayorareru

Relying on the other's lap,
The sick person
Through the long night.

これぎりの　書物枕に　夜の汽車
Koregiri no shomotsu makura ni yoru no kisha

The only book he has
Is his pillow:
The night train.

子の手紙　前田雀郎様　とあり
Kono tegami Maeda jakurō sama to ari

A letter from my child,
It says,
"Mr. Jakurō' Maeda.

娘もう　男臭さを　父に知り
Musume mō otoko kusasa o chichi ni shiri

The daughter
Already knows a man's smell
By her father.

今日の日の　ために男の　子を育て
Kyō no hi no tame ni otoko no ko o sodate

Bringing up the boy
To feel every day
Is a special day.

遙かなる　昨日を思ふ　焼場道
Haruka naru kinō o omou yakiba michi

The way back from the crematorium:
Thinking of yesterday,
How far away it is!

一生を　一間足りない　家に住み
Isshō o hitoma tarinai iye ni sumi

All his life
Living in a house
One room too few.

遠足の　土産に父の　分はなし
Yensoku no miyage ni chichi no bun wa nashi

Souvenirs of the excursion,
None
For father.

唖の子の喧嘩

川村好郎

一ヵ月程前、南海線天下茶屋駅のホームで聾唖学校の男生徒二人の喧嘩しているのに出会った。十二三歳の生徒で学校帰りらしく、ランドセルを背負い実に物すごいつかみ合いの喧嘩である。普通の子供の喧嘩はよく見るが聾唖の子供の喧嘩は初めてであるが、とてもその比でない。無言の中に蹴るなぐる持物を投げるそれはすさまじい、大人が止めようとしても言葉が通じず却ってより激しくなる遂に居合せた人々が二人をもぎ取るように引き離してやっと喧嘩が終った。悲愴というより可哀想な気持を感じせしめた。

何故こんなむごい喧嘩になるのであろうか。それはものが言えないからだ。普通の子供が或は泣き声を出し或はわめき罵るのは、一には周囲の人に応援を求め、一には喧嘩の相手に対し己の強さを表現し、痛さをうったえて同情を求めるためなので、唖にはそれが出来ない、それがますます喧嘩を大きくするので血でも見たら或は早く治るかも知れない。

人には「云わんとする心」がある、無言でおるということ程苦しいことはない。兼好法師も「ものの云わざるは腹ふくるるわざ……」とか云っているが我々は喜怒哀楽を口に出したい心がある。

私が東京に居った時に豊多摩刑務所を見学したことがある。その時受刑の人等がそんなに大きくない石を作業として数人が運んでいるのにその石を持ち上げる時にさも岩でも持ち上げるように各々大きな声をはり上げている。それでその理由を案内して下さった方に聞くと「刑務所内では受刑者は大きな声を出すことを禁ぜられているのでこういう石を運ぶ時は許されるので強いて大きな声を出すのです。祝日には受刑者にも君が代の歌を合唱させますがその時は一同思い切り大きな声でたのしそうに歌います。声が出したいのです。」と云われた。

愚痴をこぼす人はたとえそのことが解決つかずともすっかり聞いてもらえばスッとしましたと喜ぶ。一日の勤めを終えて我家へ帰ると妻は今日一日あったことをとり上げることでない些事もくどくど話す。これも云わんとする心の発露である。疲れて帰るものには迷惑千万だがこの妻の云わんとする心をくみ取ってやらねばならない。

唖の子はこの言わんとする心がありながらわずかに手振りによって満たしているのである。何故唖はこの大切な云わんとする心を口に出せないのだろうか。

唖は聞こえないからものが云えないのである。声帯が悪いのでなく耳が先天的に、聴覚が失っているのである。私は英語なら曲りなりにも喋れるが若し西蔵語を話してみよと言われたら全く口にすることが出来ない。強いて喋ればウーウーと言うより外はない。

即ち聞いたことがないから唖なのである。唖の子は鳥の声も親の愛の音楽である子守唄を聞きながらうとうと眠ったことがない。

往々にしてひがみ易い、さびしい心を持つのは一にこの聞こえないことが原因になるのである。

我々はもっと聞かねばならない。もっとほんとうの人生を見なければならない。心眼というか、心耳というか。最近よく人間関係に於て、話し合いということを云われるがただ此方の考えを口にするだけでなく相手の考えを聞かねばならない。

山陽線の某駅の待合室で観光ポスターを見ていた時、そのポスターに混って「現代の人間」というポスターを発見した。それは一人の人間で両手は針金程細く足腰は突けばすぐ倒れるほど弱々しく。胸と腹とは小さく力なく痩せ弱った姿で頭はものすごく大きく福助さんそのもので、耳は殆んど無きが如く両眼は黒い眼鏡を掛けただ大きいのは口で顔中口という程で大きく開けて舌は実に三枚ペラペラ出しているのである。実に化物のような人間姿でそして「現代の人間」と書いてある。なかなかうまい諷刺ポスターだと感心した。

川柳は決して文字の遊戯であってはならない。うまく作ろう、佳句を得ようとする前にもっと聞かねばならない。もっと人生を見なければならない。そこからそれが言葉になり文字になり句になるのである。

色眼鏡ではほんとうの姿は見えない。

今でこそ私の頭の禿げつつあることは余り苦にせずむしろ禿げるまで如何に人生と戦ってきたか貴重なものように思っているが、そろそろ薄くなりかけた四十五六歳時分には非常に苦にしどれだけ卑下したかわからず。人を見てもただ髪毛を批較して喜び悲憾したもので、富士山を見ても富士も裾野には毛があるが頂上は禿げている俺と同じだナーと見るようになった。富士を美しいとも崇高とも見えず、他人が私の顔を見て笑っても頭を見て笑っているのではないのかとほんとうに聞えない。当時私は禿頭の句が自然に作れた。

散髪屋痛々しそうに分けてくれ

も共の当時に生れた句である。

「生命ある句を作るためには天地を人生をもっと見なければならない。もっと聞かねばならない。しかもそれは我々の生活、心の置き所がどうなっているかということから発生してそのままこの天地が見え、聞えてくるのである。最近私はどうも句が出ない、懸命に考えても一夜漬けの句であってしかもほんとうのものが見えず駄句でおわり没になっている。

それは私の最近の生活、心の動きがほんとうでない。公私共に多忙ではあるが余りに乱雑であり心はいつも浮雲のようで落ちつかずそのことが川柳にもひびき句が出来ないのである。もっと生活の整理をせなければならない。精神の整理をしなければならないと痛切に感じているので、「川柳は人生陶冶の詩」と教えられていることを今更ほんとうだと味っている。

魂の真の叫び、陶冶されつつある我々の生活からほとばしり出る情熱の目、耳を以て天地万物、人生のあらゆる姿をとらえ、そこから句になり生命ある句が生れ出ずるものでなければならない。

（本社十月句会の柳話から）

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ
近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢ゆき特急運転
座席指定 特急券
ご求めは ご乗車の5日前から
近畿日本鉄道

光明皇后と孝謙女帝

冨士野鞍馬

光明皇后

光明皇后は、大政大臣藤原不比等の三女で、名は光明子「藤三女」といった。十六才の時、皇太子だった聖武天皇の妃となり、その翌年、孝謙天皇を産んだ。天平期の代表的な美女で、衣通姫、道綱の母と共に、本朝三美婦と称えられている。

神亀元年（七二四）聖武天皇即位、天平元年（七二九）正式に皇后となり、その翌年には、施薬院と悲田院とを置き、諸国から薬草を集めて、病人の施療と貧者の扶養をした。これは、わが国社会事業のはじまりである。また天皇とともに、深く仏教に帰依して、東大寺を建立し、大仏を造ったことはよいが、僧玄昉との情交はおかしいことである。それでか、娘の孝謙帝も僧道鏡と恋愛して、話題を多く残している。

玄昉

その玄昉は、奈良興福寺の僧で、霊亀二年（七一六）唐に留学して、天平七年（七三五）吉備真備と一緒に帰朝した、当時のハイカラ坊主であった。

それが、聖武天皇の御母の病気を癒したので、それから天皇の信用を得て宮中に出入するうちに、光明皇后と通じた。「醜声外に聞ゆ」と古書に書かれてあるから、相当猛烈な恋愛であったようである。それは皇后三十才前と推定できる。玄昉は、僧正になったが、貴族ににくまれ、天平十七年に筑紫へ流され、翌十八年（七四六）配所で死んだ。

施行風呂

皇后は、社会事業の一つとして、施行風呂を設けて、千人の垢を流したということが、川柳にも作られている。

垢を流して光明をかがやかせ　（タル七一）

千人の垢は留湯のはじめなり　（〃九一）

「留湯」というのは、江戸時代、銭湯で何程かの鳥目を前に渡しておいて、入浴の時、湯番に背中を洗わせるのをいったのである。

千人目鼻をつまんで湯をあびせ　（タル三六）

千人目にもなれば、垢で湯がひどく汚れたことであろうと、川柳はうがっている。

そうして皇后は、天平宝字四年（七六〇）六十才で崩御になった。

孝謙女帝

孝謙天皇は、わが国女帝の七代目で、聖武天皇が皇太子時代に、十七才の光明皇后との間に、養老元年丁己（七一七）御産の皇女である。そして天平勝宝元年（七四九）三十三才で即位された。華やかな王朝期、天平時代をうけついだ独身女帝である。

恵美押勝

天平勝宝四年（七五二）に東大寺の大仏開眼式に臨席しての帰途、従兄の藤原仲麻呂の邸に立ち寄り、そのもてなしが気に入って、それから仲麻呂とねんごろになった。その仲麻呂に恵美押勝という姓名を与えたのである。

押勝は、正一位に進み、娘真従（まより）を、天武天皇の孫大炊王の妃とし、その大炊王を淳仁天皇とした。

位を譲った女帝は太上皇となって出家したが、まもなく近江の保良の宮で病気になり、その病気平癒の祈祷に招かれたのが道鏡であった。そこでまた道鏡との情交がはじまった。

それでは押勝が道鏡をにくむのは当然で、ついに兵をあげたが、天平宝字八年（七六四）押勝は近江で殺され、淳仁帝は廃せられて淡路へ流された。そして孝謙上皇がカムバックして、称徳天皇と重祚されたのである。その時押勝は五十九才であった。

押勝の男はすたりきったなり　（タル一三三）

恵美の押勝俗名はぐずろ兵衛　（末四）

道鏡はいたし押勝ではかゆし　（万安元）

などと川柳によまれ、女帝は広陰という俗説があり、「水鏡」という本に、

「その淫欲強盛の御時分には、様々の不思議なる御振舞のありし中に、諸卿大臣の中には、この仲麻呂一人、たぐひなき大物の大臣にて、太上天皇の御覚へひまなかりし也。天平宝字七年の八月の始めの頃より、彼の道鏡に御愛着の叡慮深く成らせられ給いては、仲麻呂をば側に召るるに及ばざりけり。」

とある。

弓削道鏡

女帝の広陰説は、天皇を人の上に置くという思想から、超人的に仮想した俗説とも思われる。

女帝は九十六ひだでおわします　（末三）

普通は四十八ひだというのである。

大物が称徳好きな女帝なり　（タル八七）

両の手で孝謙帝は御にぎり　（〃四六）

筋隈の大太刀女帝うけたまい　（〃一一一）

馬に似て非なるを女帝めでたまい　（〃　九四）

等々川柳は遠慮なく詠んでいる。

これに対し、道鏡の巨根説は、あらゆる説話、伝説になっており、川柳にもまた興味をもって、非常に多く詠吟されている。

従一位に昇進したる道具なり　（タル四四）

古今稀なる珍宝と御寵愛　（〃　五九）

大きな利生女帝まで済度する　（〃　九二）

道鏡は富士で女帝は琵琶の海　（〃　八八）

道鏡はすわると膝が三つ出来　（万宝十三）

あればあるものだと女帝御満悦　（タル六八）

広大に女帝と弓削は名を残し　（〃一二八）

などと、巨根をおもしろく誇張している。

史書によると、道鏡が少僧都になったのが天平宝字四年（七六三）で、その時女帝は四十三才、その三年後には押勝が追討されて、道鏡はたちまち大臣禅師に立身、そしてその翌年は太政大臣にまで進んでいる。神護景雲四年（七七〇）に、女帝は五十三才で崩御になっているから、道鏡との交渉は、約十年間ということになる。崩御の前年に和気清麿が出現して、女帝のなき後の道鏡は、下野の国、薬師寺へ追放され、二年後に死んだのである。いち早く道鏡を処分したのは、天智天皇の孫白璧王（光仁天皇）と藤原百川とであった。

川柳作家と勧進帳

速水真珠洞

八月廿日から病後保養の為め五人の女連れで大分県で全国第一と称えられる胃腸専門の湯治場、湯の平湯泉に十日間の予定で出かけて見た。茲は一般の温泉と違って極めて素朴な療養地帯で、温泉宿は然し四五軒建てられて九州でも名代の温泉境である。明治時代には福岡市から途中二泊して汽車電車馬車で岡かけて四十五年前は僅か三四軒の宿屋にしかすぎなかった。

然し霊泉の効力は大したもので、京阪芳田、四国中国其名だたる温泉を此奥山の渓谷へ杖を曳く人々が相当ある。私も毎年必ず来たくなる温泉で入湯する事もあるが、此所の温泉は呑む事が主になり、一日一升二升は楽に呑めて胃腸を洗滌するのが特徴になっている。

渓流急斜に滝の加く流れ、大石小石の合間を白い飛沫をあげて物凄い音で流れている、轟々たる其滝川に添うて温泉宿も急坂に建て並べられて、面白い風景画になって見られる。四つの橋の上の橋はコンクリートの橋で其附近には山のもの、魚や野菜が列べられて売られ湯治客が浴衣のまま好きな物を漁って居る。

十日間というと相当に長い空閑な日がつづくのである。其徒然に芸者も四五人いるらしいが、田舎芸者でたかをくくって了って宿に依頼して三味線の糸が聞きたくなったので、探して貰ったら、長唄の師匠をして居る老母がいる事がわかったので、無理に相談して宿に来て貰った。

宿に来た其御婆さんはお米さんというて今年七十六才になる人であるが、未だ若々しい顔附きであった、朝顔日記ではないが其身の上話を聞くと三味線の糸を弾き乍ら一くさり物語るのを聞くと、広島市の人で原爆の折は其前日長崎へ旅行して居て助かった事や其夫なる人は広島の爆音にやられて原爆病に苦悩して、それから十年後吐血して死んだとかで、此米さんは身一つになり三四万円もかけた三味線も夫の病気の為め売払って漂泊の身となり此湯治場に身一つで暮して居るとかで長唄は杵屋六左ェ門に習ったと云っているが当てにはしていられなかった。

お米さんが三味線を取って、撥を当て出すと私は驚いた、其音しめのよさはさすがと頷かれた。

それで私もツイ釣り出されて久し振りに勧進帳を弾かせて唄って見た。然し三味線はさえた撥音をたてたのに、私の声はもう長期間唄わないので、糸とともなわなかった。それでも四分の一ぐらい唄ってやっと糸から逃がれてほっとした。

川柳作家で勧進帳を唄ったのは、坂井久良伎師がよく唄っていられた事を聞かされていたが、又甲府の篠原春雨翁もたしなまれいた事を私は耳にしている。

それは統制時代に、繊維関係で私はよく東京での会合に九州代表者の一員として、毎月上京していたのであるが、其頃私と同商の之も県の代表として甲府の某繊維商の問屋の主人が出席して、私と席を同じうした折に春雨先生の話が出た。

春雨翁は其頃よく此問屋の主人の所に遊びに来られて、少し御酒を呑ませるといつも直ぐ此勧進帳をうなり出されて、無上の楽しみにして喜ばれていたと云う話を総会ごとに私へ話されていた事が思い出された。

西原柳雨著の「川柳江戸歌舞伎」には勧進帳の句は一つしか見えない。

入れぬものあたかもさがす笈の内

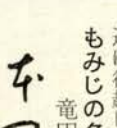
弁慶が笈の中から、勧進帳を持たないので他の巻物を出す、それを安宅にかけた狂句めいた句であるが、勧進帳は七代目団十郎から漸く息吹き出した狂言で、其頃は道成寺などが大衆にうけていたらしいのである。

行楽の秋

趣味の集りに、吟行に、御宴会に、御家族連れの御清遊に御越し下さい。

もみじの名所

竜田大橋下車



電話竜田一六二

料理は一流値は三流

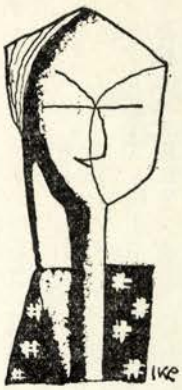
酌は有芸仲居揃い

予約申込み受付

大阪連絡所（天王寺九六五六㉗）

竹荘、竹青へ

句評リレー



武部香林　岡山市
田中烏雀　京都市
河相すゝむ　西宮市
高鷲亜鈍　大阪市

奥さんをなかなか見せてくれぬ人　明林

香林＝句会の席上で読み上げれば笑いが起りそうな句で軽いユーモアがある。素材の単純さの中に、ちょっと微妙な人間味を発散させている。

烏雀＝先ずいい。登場人物は、奥さんを箱入りにしている、変った人の様であるが、そんな気持は実は、誰の心裡にも巣くっている。

それを誇張して出しているのだ。

作者自身にもその気持が潜在しているので、敏感に興味を覚えたのだ。見せないものを見たがる、（なぜ？かは触れまいが）その心もあるようだ。

すゝむ＝句として何か中途半端なものを感じる。下五の「くれぬ人」がそう感じさせるのかも分らない。

亜鈍＝名詞止の句としては、アレで良いのではないか。然しこの句意から判断して敢て〈人〉と名詞止にしなければならないか、どうかとなると疑問が残る。〈見せてくれません〉と否定の動詞止にしたとて句意を損ずるとは思えないが、どうか。ということは―ここで一寸休戦、作者の意向を伺いながら申しあげる―〈人〉で止めたために、句意を投げつけてしまった感じ。〈ません〉とすれば、まだ句意が手元に残って、感情のやり場を誇たせている。原則として川柳に話し言葉を用いることを建前とする私の立場から提言して、当然私への反論も期待されよう。

香林＝「くれぬ人」は先輩か上役などに対しての敬称とみた、ただの同僚又はそれ以下だと「くれぬ人」では語感にそぐわぬものがあり、上の人と見る事によって名詞止めも意味をなすのではあるまいか。

奥さんを大事にしまっている男が実は大変な嫉きもちで、妻はうっかり異性に眼づかいも出来ぬという事実もある。それに又人の奥さんを見たがる心裡等々、さまざまに思いめぐらせて笑いをかもす句である。

次にこの句の事では無いが話し言葉を用いる事は流行と看做すべきものではない。庶民の詩である川柳にとり入れられたのは、当然であり話し言葉の妙味を適切に生かす事は今後とも作句する上に課せられてよいと思う。ただ無やみやたらの猿真似式では困る。

烏雀＝名詞止めにしたので、句が完結せぬように響くが、「人」をクローズアップするにはこれでよさそうですネ。名詞止法は仲々すたらない。香林氏の人の上下を区別する細かい心使いも尤もなので「奴」として見た。すると意識が変って来た。

亜鈍氏の「ません」と話し言葉にすることは、悲しみに勝っての句と異って、この場合は句に新味感が出、軽くとぼけた表現となって句としてはぐんとよくなると思うが、作者の意図がそんな「人」を踊らしたかったのだろうとすると「人」の映像が弱まりはしませんか。

すゝむ＝亜鈍さんの提言については烏雀さんと同意見です。香林さんの解説の通り敬称的な人とすることによって此の句に味があることをうなずかされました。川柳の一つの手法としての話し言葉のむつかしさは一つの課題だと思います。題詠の場合に、よりその妙味を発揮するのではないでしょうか。

亜鈍＝途いにくい、一寸電話でというても、距離的に臆劫な気が先にたつ岡山へ去った香林さんへ。聴えませんぞ。「くれぬ人」。

くれぬ人と言ったからとて目上の人に対する敬称とばかり思えませんが。「ません」でも敬称の言葉です。この句は奥さんという他人行儀な言葉から始まっている故句全体から考えても、先輩とか上役とかいった他々しさが出ているというものです。

しかし、すゝむさんのように「敬称的な人とすることによって此の句に味がある」と手放しで香林説を受け容れるわけには参りません。何故かと言えば、そういう他々しい他人行儀を粧う目上の人を想定しないで、同僚であろうと、後輩であろうと、平常礼儀抜きで打解けあえる男をまず想定したら、どうであろう。女房のことになったら俄然他人行儀になって安々と紹介もしないということであれば、「くれぬ人」が却って極立ち、人で突放した効果（烏雀説）が出るというものだろう。

烏雀氏が奴と少し柄の悪いところを云らされたが、私だったら奥さんを先輩であろうと上役であろうと、同僚、後輩は勿論のこと、女房、レコ、山の神、に置きかえて、例えば

女房をなかなか見せてくれぬ奴

と出しますネ。しかし原句とは句品が随分落ちて、お下劣ですがこれは句主明林さんや香林さんと較べて私の育ちが悪いせいかも知れません。大体句主に申すわけではありませんが、自分の女を人前に出したがらない男は僕の軽蔑する人間タイプだし、それをみたがる奴もシンニューをかけて嫌い。話言葉に就て皆さんの御意見は一応参考になりました。話言葉は流行でない。為念。

○

留守頼まれた手前物音たてておく　月都

香林＝誰に聞かせるための物音であろうか。留守番にはとかく漫画的人物が多く従って古川柳的色調を帯び易いが、この句にはその難点はない。だが句中の人物と同じく、簡単に出来上った作品というにおいがする。

烏雀＝「手前」を表現したかったのだから、「手前」の字を句中に入れては味がない。「落ち」を聞いてから落語を初めて聞く様なものである。感情を表現するのに喜怒、哀、楽の文字を挿入しては損をするのと同じと思う。「手前」の二字を捨ててそれでよくはないか。

すゝむ＝上・七・の破調を句全

体として割にすらっと詠ってはあるが、内容の軽みに対して今少し句として面白みがあっても好い様な気がする。

亜鈍＝七・七・五の破調が出た。中七の〈物音〉を音にしてもよし、〈頼まれた留守を物音たててておく〉でも句意に変りなく、いわば原句の破調に必然性がない。〈手前〉はこの句の盲腸。切って捨てる可きものだ。

香林＝破調の故に散文化してしまった。これを救うにはやはり必要性の稀薄な文字を削るに如かず、亜鈍氏の訂正句に賛成、だがみんなで努力推敲してみた甲斐の果して、どれ丈あったかは疑問のようだ。

烏雀＝亜鈍氏の「原句の破調に必然性がない」には同感である。又香林氏が訂正句に賛成されたのもわかる。そして結果として推敲の甲斐があったかを疑われる点も共鳴を感じた。しかし

留守頼まれた音たててておく

と云う句が出たら私は抜く、古い内容が破調によって救われているからである。

推敲をおろそかにして、漫然と破調にするのもよくないが、内容が古いからと云って、表現が面白ければ直ちに捨てられもせぬ。

すゝむ＝話し言葉の問題に続いて破調の問題句、の提出者の一瓢さんの狙いもここらにあったのではないかと思ったりもします。亜鈍さんの云われる様に破調の句には当然その必然性がなくてはなりません。さりとて此の句の場合、「手前」を抜いて破調をやめただけでは句が死んで了うようにも思われます。

留守頼まれた手前物音たててておく　（一九字）　**原句**

留守頼まれた手前音たててておく　（一七字）　**亜鈍**

頼まれた留守を物音たててておく　（一七字）　**亜鈍・香林**

留守頼まれた音たててておく　（一四字）　**烏雀**

こう並べて見ると原句に推敲の余地があったことがはっきりします。

亜鈍＝「誰に聞かせるための物音であろうか」これが最初に香林氏の抱いた疑問であるが、「だがみんなで努力推敲してみた甲斐の果して、どれだけあったかは疑問のようだ。」とあった。全くその通りで、如何に破調を整調にしても推敲しても、原句自体に難点がある。ではその難点はとなると、〈留守番〉がもともと漫画的（古川柳的）な主題だから、簡単に出来上った作品（香林説）。〈手前〉〈物〉を除いて古い内容を破調（しかし武玉川形式の七七調である）によって救われるという説（烏雀説）。私の整調説では〈物〉を除くか、或は原句の物音にする代りに〈手前〉を除くかして一広十七字でも句意はそこなわぬ。（亜鈍説）。内容の軽みに対して句として面白みがあっても好いが〈手前〉を抜くのは句が死ぬ。推敲句では烏雀説に賛成（すゝむ説）となり、主として表現、技巧上に於ける破調の推敲に論点が向けられ、結論として烏雀氏の推敲句をすゝむ氏は是とし、香林氏の求められた句としての面白み（私は表現とみる。）一応全うされたと考えてよい。

成程この句の性格は香林氏の漫画的、古川柳的（氏はこの句の場合咎めていないが）であり、そのまま烏雀氏は内容の古さとみた。そして破調は破調でも、原句の字余りを、字足らずの破調（実は武玉川調）にして、表現の新味（これは原句と比較した場合）を出した為にこの句は救われたことは香林氏も認めるだろうと思うし、私も確に、烏雀、すゝむ両氏に賛成だが、内容の軽み、古さ以外に私は疑問をもつ。

ここで再び、香林氏の最初に投げた疑問へ戻ろう。香林氏は、初めにこの句の〈手前〉にひっかかったのである。それは表現とか技巧の問題でなかったように思う。留守を頼まれたので何故物音をたてておかねばならぬか、という句意（内容）の不審が、「一体誰に聞かせるために」という次の言葉になって出たのである。手前はこの句の場合、接続詞で、「から」「故に」の他「己を得ず」「たてまえ」といった言外の含みもあるが、下五の動詞止「おく」ことによって物音を無理に立てなくてはならぬ不自然を、頼まれた留守番、だからといって（手前）、しなければならない理由がない。換言すれば留守を頼まれたからといって殊更物音をたてる必要がどこにあるかと、問いたいのである。「おく」は物音をたてる、だけでなしに無理に、とか殊更にとかの、たてるを強めた意味をもたしているが……の手前と関連して不自然である。何故不自然かといえば、頼まれた留守番という具体的な人物を配するに、物音という概念的な言葉が入り、その上おくと強調するから余計に不自然が開いてくるのである。物音を具体的に表現すれば不自然さも解消するのではないか。例えば、テレビ（ラジオ）鳴しとく。とか棚を直すとか、戸車を修理しとくとか、洗濯、炊事、なんでも構わない。次に物音たてておくという概念的な行為を生すのであれば、頼まれた留守という具体的な人間存在を、概念的な言葉、一人になって、とか、一人にされて、とかにしても作者の着想にさして狂いは無いと考えるが、どうだろう。

本来の句意は、留守番を頼まれたんだから、空家じゃない、人が居るぞという、泥棒、掻払いなどに早代りする門ツケへのゼスチャで物音をたてたのだろうが、結局、平凡。

（担当　真鍋一瓢）

短詩文学　秋の作品展

（第四回）

会場　大阪梅田阪神百貨店二階　丸善画廊（電話㊱二七八七番）

会期　11月24日（木）——29日（火）六日間　午前十一時から午後八時まで。

作品　詩・短歌・俳句・川柳作家新揮毫作品（半折・横物・色紙・短冊陶器その他）

頒価　売約に応じます。会場係に御申し出ください。

（作品搬入は十一月二十二日午後五時から会場で取り扱い致します。なお出品数、品名は十一月十日までに連盟事務局までお知らせ願います。軸は本表装のこと、色紙、短冊は色紙掛、短冊掛をご用意願います。

催主　関西短詩文学連盟　大阪市教育委員会　川柳雑誌社　後援

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

貧しさは邪教にすがる金もいり　小松市　関戸宗太郎　同
みな指名手配に見えて釜ケ崎　同
録音で飛び切り下手なのも聞かせ　同
女房のさとの出資で廻り椅子　同
とっときの茶壺がポンといい話　同
一流をすべった友がもう課長　同
レジスタンスと称し千円札が消え　熊本市　田口麦彦　同
人間の鉢植に似てつとめ人　同
ペンだこもわたしと共に年をとり　同
芸域をひろげるための愛欲史　同
タイムリーエラーたのゝ社の野球　同
だっこちゃんへ男一匹ならばされ　同
虫の音を又も追いやる杭が立ち　岸和田市　内藤きさ子　同
ダッコちゃん枯木を抱いて売れ残り　同
決心が決まり茶漬を食べなおし　同
下痢をしながら枝豆の礼を云い　同
話好きの按摩へ重い返事する　同
たまさかのデートへ一番星が出る　大阪市　坂東千代美　同
撥だこで女ひとりがささえられ　同
病床へ来てビジネスの話する　同
鉢植がみんな枯れてる退院日　同
台所改善祖母の位置がなし　兵庫県　辻文平　同
親しさが口説くチャンスを作らない　同
どん底へ来れば女房の知恵に負け　同
君が代の良さつくづくとローマより　同
仁術の筈が家計も打診する　美祢市　安平次弘道　同
宿題へ取組む父へ蚊やりたく　同
豊作を保証し農具屋置いて行き　同
秋来ぬと目には見えねど腹が減り　同
食欲の秋病院も出前箱　岡山県　横山一声　同
食欲の秋新薬をためして見　同
商魂は売約済みの札をはり　同
コンパクト心の崩れまで写り　刑部野市　板倉天悟空　同
血を吐いた窓から鳩の恋が見え　同
ペンだこがいつか消えてる長病　同

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（24）伊志田孝三郎

（一）石田孝三郎（二）孝三郎（三）待人居（四）名古屋市昭和区幸楽町二の一八（五）明治二十九年三月十六日生（六）東京都（七）無（八）73二九五七（九）**美しくかなしき夢はまた見たし**（一〇）無（一一）有（一二）大正二年春頃紅倶楽部同人となる。

（25）山上千太郎

（一）山上仙太郎（二）千太郎（三）一今洞（四）石川県小松市須天町甲四一（五）明治二十九年二月十日生（六）小松市八日市町一〇（七）火災保険代理店（八）事務所四九四（九）**咲きほこる花をそだてて土獣す**（一〇）書画・植木・読書（一一）有（一二）大正五年秋

社会復帰へ先ず煙草から始め 愛媛県 大垣たもつ
面会の妻の身なりにホッとする 同
医療費を裸で弟からもらい 同
バッジ見てから楓の間御案内 岡山県 太田 蓑流
裏話聞けばきく程あほらしく 同
民俗学いもが主食の島へ着き 同
恋さめりゃ乳の垂れたも気に入らず 高知市 須藤 俊江
ボロかくすカーテンまでもボロになり 同
推理小説好きな女と見合する 同
金は仇夫婦別居もせにゃならず 鳥取県 鈴木村諷子
街にビル変り栄えせぬわが暮らし 同
生きのいい方の豆腐をすくてくれ 同
来世などどうなろうとも治りたく 貝塚市 杉本 一鶴
妹まで赤い毛にして見舞いに来 同
鼻柱つよい女将の泣き上戸 同
コケシ趣味ぶっつけ後妻覚悟で居 青森県 木村 涼人
ポケットに瓶ハイキングを唄い 同
俺も亦チルチルミチル世を泳ぐ 同
貝になろうかいっそ抱っこちゃんになろか 伊丹市 小川静観堂
鳴く虫をきけば金なんか要りません 同
指定席右も左もおばあさま 同

靴磨きまでが大阪恐くする 大阪市 福井 竜昭
鉢巻をとってデモ隊昼とする 同
犬小屋も出来て別荘落成す 同
値切ってる母へ娘の遠く居る 布施市 坂東 若芽
中年の魅力だなんておだてられ 同
君が代もききオリンピックほっする 同
つき出しは南京豆で娘のビール 貝塚市 護川 梢月
トランジスター持って息子は草を 同
安静へツクツク法師来て唄い 同
負けても勝っても後はビールの草野球 兵庫県 遠山 可住
北浜で修養してきた薄情さ 同
結婚を伸ばして山にとりつかれ 同
絶望の視界を包む霧が降り 西宮市 末沢 花美
ラヴハンター空しゅう去？秋の海 同
親の威光私へすぎた世辞を聞く 同
助け合う夫婦で世間様がほめ 京都府 塚脇 笑太
喰うことに追われるなんてかなしすぎ 同
多事多難娘三人共育ち 同
テレビ買う噂の中に牛を売り 宇部市 平田 実男
現金の客へクーポンちと待たし 同
十代のショック育ての親と知り 同

(26) **月原宵明**
(一) 月原勝明(二) 宵明(三) なし(四) 愛媛県新居浜市宮西町一一〇六(五) 明治四十三年三月二十八日生(六) 今治市桜井甲一三六九(七) 銀行員(八) 新居浜四二六九(九) いまだ無し(一〇) スポーツ(特に野球)、小唄(一一) 妻有三男二女(一二) 昭和七年頃

(27) **若本多久志**
(一) 若本真彦(二) 多久志(三) なし(四)西宮市津門町五〇(五) 明治三十五年六月十五日生(六) 広島県呉市(七) 会社役員(八) 西宮②四一四三(九) **袈裟ころも脱げば毛脛の凡夫なり**(一〇) 園芸・カメラ(一一) 有(一二) 大正十五年六月

(28) **大坂けいすい**

心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

寝るだけが高い家賃で残業し　西尾市　樋口　寿栄
白靴を脱ぎたいような満員車　同　同
恋人が出来て女にすきがなく　同　同
老夫婦結局極楽行と決め　ホノルル市　並木東田楼
川雑四百号船ののろさに腹が立ち　同　同
臨月へ同情の目と好奇の目　鳥取市　近藤　昭夫
甲斐性はないが色気はありあまり　同　同
長いのにまかれた会の味けなさ　和歌山県　寺柚　花車
台風予報我が子はどこかへ行ったきり　同　同
惜しまれていて停年は用捨せず　玉野市　小谷　仙山
此の愛が永遠であれ富士を背に　同　同
コロッケも下手な女房の口達者　宇部市　神田　豊年
子宝を理由にテレビまだ買えず　同　同
バスガイド名残り惜しそな顔でな　笠岡市　出原　真奇
秋日和スプンレースに出た疲れ　同　同
ウインキー抱けば幾分白く見え　布施市　久米奈良子
ママママと呼ばせてママの河内弁　同　同
台風の浮気に困る気象台　大阪市　本多　清人
8ミリへ動いて欲しい菊人形　同　同

巨人の働き信念の人なればこそ　奈良市　内藤　敬太
図書館へ新聞見に行くくせがつき　同　同
紙屑もお金になると子に教え　岡山県　杉本たつよ
見どころがあり反抗期の子を育て　同　同
新薬へ悪口を言い灸をすえ　愛媛県　河本南牛史
忙しいとは釣竿の手入れ中　同　同
長生きをして神経痛の灸をすえ　宮崎県　野口卯之助
蜂の巣のようにアパート窓が開き　同　同
名月を飲む人詠む人拝む人　京都市　大久保　和三郎
それぞれの団地の窓に今日がある　同　同
恋もした失恋もした療養詩　貝塚市　辰己忠太朗
戦争に行ったと思え療養所　同　同
骨拾う他人は遺骨を合せて見　竹原市　山内　静水
こうるさい男で手帳にすぐひかえ　同　同

父の死　一句

香奠の重さ異る娘の暮らし　香川県　三井　酔夢

高松桟橋駅にて　一句

縁のない顔にも別れの曲佗し　同　同
説教が生きてる説教師の過去　岡山県　楢原　万女
道楽のように新薬買いあさり　同　同

創刊四百号の路郎主幹へ　一句

（一）大坂正一郎（二）けいすい（三）形水（四）大阪市東区糸屋町二の三四（五）明治四十一年六月六日生（六）兵庫県津名郡津名町（七）既製服却商（八）㊋七〇六八（九）**車窓嗅かチルチルミチル顔並べ**（一〇）ゴルフ（一一）有（一二）昭和八年

（29）**伊藤入仙**

（一）伊藤宇一（二）入仙（三）玄武洞（四）京都市東山区綱手通り新橋上る（五）明治四十二年一月十七日生（六）京都市伏見区南浜（七）料理飲食店（八）⑥三四九四（九）**祇園町に育ち気品のある素足**（一〇）なし（一一）有（一二）昭和三年四月

（30）**直江武骨**

（一）直江清次（二）武骨（三）なし（四）小樽市色内町二丁目八（五）明治三十二年四月十三日生（六）小樽市（七）薬局（八）②九八一七（九）**金屏風今日は酔ってはならぬ酒**（一〇）スポーツ（一一）有（一二）大正八年十二月

（31）**阿部佐保蘭**

（一）阿部潔俊（二）佐保蘭（三）桜花洞・鶯谷（四）東京都中野区鷺宮一丁目八四（五）明治三十九

野心的な企画はだかにさしただけ　大阪市　叶岡　史風
ICBMの誤差が支えている平和　同
うちあけたどん底のそこかくし　兵庫県　河原みのる
所得倍増小売物価が先へいき　同
応接間花活けかえて客がなし　滋賀県　土守　蜻蛉
ハネムーン帰路は合議の三等車　同
ゴルフ球拾うて食える村になり　芦屋市　里田一ン十
工場を誘致し鰯もよりつかず　同
婚約が決まり学資の紐がつき　大阪市　藤冨　淀月
頭数見て焼海苔の缶をあけ　同
掃く塵ものうて淋しい夫婦きり　和歌山県　木下　一休
総室の笑いを個室へ持ち帰り　同
C・Mが目にさわらない程いいドラマ　京都市　都倉　求女
温泉のタオル事務所へ派手にかけ　同
芸術に生きて墨にも色があり　愛媛県　竹田　青園
そろばんの競技機械の音がする　同
子に夫にみかんむく指しあわせな　櫻井市　野中　稔一
捨てる気の傘は忘れず持ち帰り　同
よその子かりてまで子なし淋しかり　小松市　月田北海坊
生活に苦なし金魚の子を育て　同

けだものがまた眼を覚ます夜が来る　松江市　田中　妖人
やけ酒と知って独りにしてくれる　同
金策が出来ず暑さが身を細め　奈良県　木村よしを
がめつい奴と云われる程にもうけてず　同
宇宙犬の夢を追うてるひるねの子　大阪市　堀　風船堂
行水のあふれるもよし肉体美　同
求人をあせる景気と云うに病み　羽曳野市　見本　泉洋
個性までゆがめ流行についてゆき　同
自殺する勇気もないと生きている　西宮市　鵜飼　鮎子
てれくさい涙かくしてテレビ見る　同
長生きにあやかりたいと受ける酒　玉島市　井上　旭峯
家柄を云うて頭脳には触れず　同
味を褒め器もほめて食べ過ごし　倉敷市　小倉美音子
低姿勢にも商魂をみなぎらせ　同
背の灸四国生れを見破られ　愛媛県　菊池喜与史
ワイシャツの白が染みそに陽にやけて　同
空箱で射止めた旅行にも行けず　石川県　高山　清勝
娘の死顔母泣く横で化粧され　同
食堂は空きそうもないこども連れ　芦屋市　三上　芙路
門戸開け夢とすごした一世紀　ハワイ　宮政　周防

年十一月十二日生（六）京都市油小路出水上ル（七）染と縁の店主（八）〔385〕五六二二（九）**鶴の姿の明方になっている**（一〇）将棋・観劇（一一）有（一二）昭和二年八月

（32）**川崎銀甲**

（一）川崎恒太郎（二）銀甲（三）吸日亭（四）福井市毛矢町六〇（五）明治二十八年三月二十五日生（六）和歌山市本町三丁目九（七）捺染銅ローラ彫刻（八）③一〇二〇（九）**塗りつぶす黒は挿絵の緋縮緬**（一〇）絵画・釣魚（一一）有（一二）昭和二年頃

（33）**梶川蘇堂**

（一）梶川戦吉（二）蘇堂（三）竜野陸伯（四）西宮市池田町一七

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

旅へ来て見る大空の広いこと　大阪市　三栗　夜城

ウィンキーのぞき二人のまぶた目　泉大津市　高津　紡毛

小説も書いて見たいと恋をする　大阪市　西本　保夫

気を兼ねて誘惑断るもおんな　八尾市　吉田　博一

角かくし好いた同志も一寸てれ　布施市　片山　光福

先代のむかわり待たず店をしめ　兵庫県　斉藤たけお

見栄すてた女心の強さ知る　和泉市　末田　晃康

窓ガラス拭いて始まる新学期　笠岡市　守屋衣里子

産声が父ちゃんしっかりたのみます　布施市　坂上山椒坊

さわる丈けの孫の按摩で喜ばれ　河内長野市　森本黒天子

和服着て今日はPTAとしゃれ　松江市　岡崎　雪美

百姓が農家と呼ばれ選挙来る　笠岡市　谷本鈍愚坊

要領のよいのが先に写される　山形県　菊地　白葩

人はみな上手に恋愛してるなり　松江市　岡崎　祥月

どん底の笑顔へ記者のねばること　滋賀県　久保　和友

瓦斯風呂に替えて屑木は邪魔がられ　豊中市　土井　北桐

横文字が読めて飯場で見直され　笠岡市　高木　桃里

オートバイ死神をのせるほどに酔い　鈴鹿市　吉田　俊和

女秘書あくびの出来ぬ椅子におり　羽曳野市　坂東よしあき

縁の下の力いい汁だけ吸われ　笠岡市　松本　忠三

観光バス一升ビンは一番乗り　大阪府　佐々木章子

人みしりする子へ団地気を使い　岸和田市　田端くにお

恋なのか化粧もかえて娘の無口　大阪府　橋本　裕邦

食べるだけ食べて痩せたい無理を云い　宇部市　鎮浪　翠月

信用はないが象牙の印を持ち　須崎市　高橋　蟠蛇

パチンコも子供の為と口達者　徳山市　渡辺伊津志

義理で来た講座へ殺す生あくび　児島市　伊丹柳瓢子

子は学士親は耕地で共稼ぎ　ホノルル市　蓮池　風草

新妻のコックレコードまでも掛け　桑港市　児玉　不村

もう少し若けりゃなあと帰化市民　マカベル　上田　紅溪

子煩悩駄賃に小銭ためて置き　松江市　持田二三子

小銭みなはたき故郷へ乗る夜汽車　松江市　高橋とし子

立候補マニア選管もてあまし　出雲市　佐藤　泰之

声だけを褒められているのど自慢　大阪市　山田　蛙水

小遣のいらぬ子野球上手なり　兵庫県　常岡　孝風

三味線を逆さに抱いて食い詰める　東京都　豊田　稔坊

一時停車ただそれだけですむものを　出雲市　森山　壮

好きでする舞台稽古を労基法　大阪市　山田松太朗

風鈴の音も乱れる焦慮の日　岡山県　若柳花乃子

大胆な女体をかばうすり硝子　山口県　藤本　星二

コーヒの味

モダン川柳

心斉橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㉗ 6684

御集会には階上御利用下さい

（五）明治三十八年三月二十五日生（六）福井県坂井郡長畝村（現在丸岡町（七）社団法人職員（八）――（九）**勝負とはかくもきびしき絹の袴**（一〇）謡曲（観世流）ハイキング・カメラ（一一）有（一二）昭和七年春

（34）**丹波太路**

（一）丹波泰二（たんばたいじ）（二）太路（たいじ）（三）――（四）大阪市東住吉区田辺東之町五丁目一八（五）明治二十三年九月二十八日生（六）大阪市（七）安田火災保険代理店（八）――（九）**カンと鳴りそうな漁師の肌の色**（一〇）旅行・読書（一一）無（一二）大正十二年頃

（担当　西川　晃）

★勤労感謝の日にちなんで★

労働は神聖なり

それは認めているが「勤労感謝の日」には不服の人もあるようです。サテ、川柳人が見た「勤労」と「感謝の日」をご紹介いたしましょう。
―編集局

中途半端

清水白柳

何事によらず物事に徹底するということは仲々至難な業であって、それが職業であっても趣味であっても、徹底しているという人は一寸見当らないものである、路郎先生のように斯道に徹底して居られる方は偉人と言わねばならないと思う。私のように職業の上で中途半端な道をたどったものから見ると殊更にそう感じられてならない。

鋸を持てば長男らしくなり
一寸した血はなめておく大工の手

剃刀を帰り支度の大工とぐ

加賀の大工の家に生れて小学校を出るとすぐ大工を見習わされ、手や足を切傷だらけにし乍ら、叱られ通しでやらされたものである。

川柳を知ったのもその頃であったと思う、建築講義録を取って勉強していると、同じ発行所から出ていた「平民建築」という月刊雑誌があって、文芸欄に川柳があった、今でも〃角帽の対角線に女の瞳〃という句があったのを忘れないで居る、よっぽどひかれたものに見える、作者は○坊であったか鯛坊であったかは忘れたが、それは大正九年か十年の事である、私も投句したが落語をもじった句を出したので没になったのは言う迄もない。

仕事のことでは大正十二年だったと思うが、亡父と二人で小松市の蛭川神社の拝殿をけやき造りで建てたのが今でも残っている筈である。

初午の祝詞電車を遠く聞く
雨の日も出来る居職を羨まれ

三十四五才から建築をはなれて商売をしていたが、それが今となっては中途半端の原因になっているのである。戦争がなかったら続けていただろうと思うのだが、戦災で裸になってしまったから、商売をするにも敗戦で神も仏もないという世相の時だったから、神具の販売というような事では食ってゆけそうもないので、つい手ッ取り早い大工仕事を始めたのだが、商売に徹底することが出来ない弱さを持っていたというのも、手に職があったからである、私の中途半端は手に職があるということらしい。

電車なくなり大工の夜業こだまする
打ちにくいとこはぎっちょで打つ大工
ベル押せば大工が留守を言いに出る

十年程以前から神社建築に復職したのだが去年ある神社建築の見積り入札で最後まで有力だったが三十四五才から十年程の間商売をしていたことが、建築技術を捨てていたという意味になってしまったのであって、それが致命的なことになったのであった。アパートや建売りをやりたいと思っても、宮大工をしていたということを知って居る工務店関係からは敬遠される結果になって、ここにも中途半端が災いしてくるのである。

茶を出したところで大工めしにする
スリッパを大工に貸せばはきつぶし
落ちそうなとこで昼寝をする大工

今ではただ何でもいいから働けることが有難いと思って居るのだが、そろそろ身体の方が何くそと思っても段々息がつづかなくなってきて、泌々とここにも悲哀を感じさせられている、それが秋ともなれば尚更である。

道具箱持ってみのりの道を行く
儲けなど言わず職人目出度がり
仕事ズボン生活の匂い持ってくる

ところで川柳の方も、作家でもなければ、批評家でもないというようになるのを極度に怖れている、川柳実作家としていい句を残したいと努力しているのだが雑用にまぎれて句が出来ず、批評をするにも素養がなく、一体どうなるのか一番おそれているのが川柳への中途半端である。

ふるさとを出て半生の流転なり

勤労感謝

西森花村

四百号祝賀大念の節、私は一三夫さんに十一月の勤労感謝の日にちなんで何か書けと言われました。勤労感謝の日は何日やったかいなーと考えているうちに承知したような恰好になりました。帰ってカレンダーを見てから、昔の新嘗祭やと気が附きました。新嘗祭は子供の時からの附合いですが、勤労感謝の日は国民の祝日が制定されてからの事で、馴染みが薄いわけです。神祇令によるとお祭りに、大祀、中祀、小祀の別あり大祀は大嘗祭のみ、新嘗祭は天皇が天祖を始め天神地祇を、新穀を以て祭る行事ですが、即位の年行われる新嘗祭が即ち大嘗祭であります。

この天皇の祭りが、国民の祝日では勤労感謝の日となりました。だが誰が誰に誰の勤労を感謝せよと言うのでしょうか。あるいは、政府が国民に感謝する日でしょうか。よく働らいて沢山税金納めてくれました、此れで政府も政商も助かります。選挙資金も集まりますと言う意味でしょうか。三悪内閣が、物凄い暴力で幕となり、文出倍増内閣となっては、ただもう働けると言う事、勤労そのものを喜びとする外なく一層この日の意義が深いわけです。本当に所得思えばうらめしやであります。

傍島静馬さんの句に
わたくしの趣味は仕事と大きく出

と言うのがあります。趣味だから人の嫌がる部署にも着く、よしや昇進させて、楽な椅子に坐らせてやろうと言われても、それは私の趣味では無いと断る、労力を売っているのだと考えると、とても失ったエネルギーを恢復するだけの

労賃ではない。不平不満をもらしても決して愉快にはならない。まあ無理にでも趣味にしておく事ですな。但し趣味には責任はありませんが、仕事の責任は持つ事です。一三夫さんが私にも短文の指名されたのは、多分郵便屋という私の職業から、年中無休の勤労者として、又雑誌社や皆様方に遅配で御迷惑をおかけしている郵便屋として、本当に働らいとるのかどうか解答の場所を与えて下さったのだと思います。組合と当局との交渉過程、組合の闘争戦術如何と言うような事は敢えて申しません。戦前の郵便物と従業員の比でゆけば現在五万人余の不足だと言う事であり、低賃銀でその不充分な人でさえ確保できない有様です。大体私達の書入れ時は、年末年始それに暑中であります。極寒極暑に大繁昌するのであります。その間は全然閑かと言うとそうでもなく、春は春、秋は秋で否年中無休で税務署の督促状などがあるわけです。しかしながら全然悪い面ばかりでもありません。かつて私は他の方々と共に北川春巣さんに誌上に紹介文を書いて戴だいた事がありますが、その中で私が一番愉快に感じたのは、木村水堂君より若いように書いて下さった事であります。事実は逆であります。思うに私は水堂君より若干早く奉職して以来、年賀状に追われて正月をした事がない。正月の前後半月や二十日は局で暮して居るようなものでこれでは年の取りようがない。栄養其他肉体方面ではガタガタギシギシしていても気持の上では青年の頃の正月でストップした儘であります。そこを春巣先生が若く見て下さったのでありましょう。御礼申し上げたかったのですが、恥かしいのとヅボラなのとで失礼してしまいました。若くなりたい人はどうか郵便局へ御勤め下さい。大西迷窓さんの

働らいていたら厄年すぎていた

であります。私達も何時迄も白い眼で見られて街中を走るのは嫌です。もっともっと新鮮な郵便物を皆様にお届けできる日の一日も早く来る様努力する心意です。あるいは夢であろうか。夢であってもよい人間夢なくして生きて行けるものではない。此れは芦花の言葉ですが、私達も勤労と勤労との間に川柳という夢があり、エネルギーの恢復があります。そしてそれが淀川句会であります。

働く喜び

児島 与呂志

市交通局現業員これが今の私の職名です。市電の運転手に成って拾年半、先の四百号記念句会での前田勇先生のお話の中に有った、職人と工員の名称の差の様なものだと思うが、私も初めから市電の運転手に成ろうと思ったのでは無かったけれど、いい職業を得て幸福だと思っている。

焼け跡の　冷めたき風に立
ちつくす　　豆秋

リュック一つを背にして復員した昭和二拾一年の夜、しみじみと先の句が私を現わして居る様に思えて何時も心の隅にある。天王寺駅の助役さんに頼んで止置車を戦友七八人と借り一夜を明かしたり、明くる日一日中尋ね廻って、母と嫂が着のみ着のままで生きていた二階借りの生活にとけ込めず、野良犬の様な買い出しの生活を一年余り、闇市で拾円のコーヒを飲んだりしても敗戦の為に失った痛手の大きさは一時逃れにしか過ぎなかった、フト乗った市電の車掌さんが中隊は違ったが顔見知りの中支当時の戦友だった、買い出しのみじめさは生活のゆとりの無い事心の豊さを缺くを考えていた時の光明とも思えた。彼に進められて電車々掌私が復員一年半後に得た楽しい職業だった。そして川柳の入門と指導して下さった同じ局内の淡舟さんと胡蝶さんを得、少し後春巣先生をも得た。

雰囲気が変ると云う事は仕事を楽しませる様で、その点私の仕事はお客さんが変るし、走って居る車道の車や人の行動に変化が多いので、心を楽しませられ張り切れる様に思える、楽しいたのしい仕事と云ってもやはりいい時ばかりでも無い事は一般職業通り人の花が赤く見える時もあるから、

若僧が二円のつり銭いらん
とぬかしたり　　与呂志

何んの職業を持つ人か此頃の若い人の中に居る、オッさんにやるわとでも云う様な態度で、此お金も何も私共の懐中に入るのでは無い、やはり過上金として交通局の収入である、電車に乗ると車掌にからむ客、降りる停留場へ来てから〃下りるで〃と声だけかけてぼちぼちと切符を探がす客、故意の様に私共を苦しめる、他のお客様に気の毒なので忙がすと〃えらそうに云うな客やぞ〃と市の公僕と云う名につっかかる、弱き者それは電車の現業員なりと思う時もあります。ラッシュ時に成る時間夏は私のぐるりを取り囲まれます、運転台に近い程進行中の風が強いからです、本人は交通の輻湊する軌道上の自動車に気を使い汗たらたら、止れば多勢の体温を背に受ける、冬に成るとトタンに敬遠されます、冬の透間風のつめたさを身を切られる如く、お客さんに嫌らわれて、

降りる客　いとのんのんと
続くなり　　豆秋

いいお客さんです、一つ位停留場前から切符を出し、定期券を用意し、ターミナル又繁華街で多くさんのお客さんの降りられる時は、本当に前の人を押さずにのんのんと云う言葉を其儘に私は感じます、私の運転したり又車掌（一週間に一度位やります）として仕事中、葭乃先生が一度乗って来られた事があります、他に繁雄さん月都さんも乗られた事を思い出します、私はとに角川柳ある故にたのしく、元気に勤労感謝の日を心から祝える自分を倖な奴だと思います。

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

汗また楽し

酒井 ひか平

「あんた面白そうに働いてはりまんな」と、よく云われる。他人が見ると、私が、さも面白くてたまらないように働いて居ると見えるらしい。

私が通勤の途上歩くと、他の人が会社まで半分も行った頃に、会社へ入って居る。

「そないせわしのう歩かいでもええやないか」ともいわれるが、これも性分で、普通に歩いて居ても、他人から見ると風のように歩いて居るらしい。

オリンピックマラソンの優勝者が、「練習よりも習慣、私は勤務の途上、自宅への往復を走るだけ

だ」と云ったといわれるが、その伝で行くと、私は四年後の東京大会では競歩の選手にでも出られるか判らない。

働くことも楽しいし、歩くことも私は好きである。

此の頃、オートメーションや企業合理化なんてものに身の細る思いをさせられる。

いくら強力者だって五百キロホイストには敵わない。

「勤労者階級の支持なくしては」なんて社会党の議員さんは云うけれど、勤労者の身を削られる思いを真に理解して呉れる対策なんて何処にあるのだろう。

組合運動だって、はかないものである。闘争に案外没外漢を決め込んで居る商人達だって、勤労者階級と云われる大衆の生活が豊かになれば損でない筈である。

しかし

お務めはマージャンパチンコして遅く　湖山

マージャンをする程事務所仕事せず　幸男

なんて仕事振りで月給を上げろ、ボーナスを出せなんか云ったって、会社は出さぬのが当り前である。

自分に与えられた仕事を一生懸命にやり抜く事が、働く者の義務である。要求はその後にある。

私は、ではどうしたら自分の仕事が楽しめるだろうかという方法を考えて見た。

その一つとして、働いて居るから健康だと思うことにして居る。

健康を得る為には摂生が必要である。マージャンもパチンコも止めてしまった。早く寝る。そして妻に起こされる前に起きる事にする。気持のいい空気を腹一ぱい吸い込む、少してれ臭い思いのするラジオ体操をやって見る。胸を張って会社への道を歩く、仕事だって体操の一部であると心得て居る。

昼食が美味い。カロリー本位の妻の弁当への感謝の気持もある。若手の野球には外野で球拾いをやってやる、私自身、十才も若返ったつもりだ。

職場の泣きごとをいくら並べたって、今更主任にも課長にもなれっこはないんだから、面白く、元気に、モーロクせずに仕事が一年でも長く出来れば上等である。

私の二世が、私の出来なかった分をやって呉れる。勿論、希望通りに育って呉れないかも判らないがそう願いたい。

誰にだってこんなことは判り切って居る。しかし、だから、この事が実行出来て居るだろうかという仲々むつかしい。

私が無理を承知でやって居る位いのものだと思う。だから或る人は「頭が変なんじゃないか」と見て居るし、私を奇人だと云う。

当り前の事を、自分が大事だからやって居るのでも、案外そう見て貰えないのだ。

勿論、十二貫すこしの体で学歴のない私が、人並みの事をして居た日にはクビである。

だが、そんな気持でやって居るうちに、何時とはなしに、私は変人と見て貰えるようになった。

妻が「あんたこの頃背広が似合いだしたワ」と云って呉れるし「君その歳になって一寸背が高うなったんと違うか」とも同僚は驚く。

又、女の子が「おじさんハツラツとしてはりますワ、」なんて嬉しいコトの一つも云って呉れる。

此れは思っても見なかった副産物であるが、肝臓が悪るくなるという、酒も極力ひかえ目にして、私は私なりに自分を大事にして居る。

だから勤労感謝の日を心からの喜びとして迎える者を一人自選が許るされるならば、私を選び出す事が出来るだろう。

私の勤労感謝の日

真鍋一瓢

少しオーバーな云い方かも知れないが、日曜日以外の休日のある一日に、意味ない一つの名目をつけた、勤労感謝の日が毎年十一月二十三日であると私は思う。他の休日もこの例に洩れないかも知れないが、マッカーサーの占領行政に押しまくられて、旧来の皇室中心の行事はやれなくなって、デッチ上げた休日であるならもう良い加減に、引っ込めてはどうだろうか。勤労感謝の日とは一体誰に感謝さす日だろうか、サラリーマンの月給只取り日をなくすまいとの名目なら、何か外に適当な名目はないものか。何だかオチョクラれているような、押し付けがましい勤労感謝なら勘弁して貰いたいものである。

且てのこの日は新嘗祭で、勿論皇室中心に五穀豊穣を祝福し、その年の新穀を天皇様に差上げる日だとかで時期としても頷けるし仮令我々庶民の食膳に新米は見えなかったとしても祭日の意義を把握するに苦るしむと云うような日ではなかったが、仮令名目であっても勤労感謝の日となる。意味が広いようで、市井の溝掃除にも大銀行の支店長さんにも適用される言葉であるとすれば、果して、街の清掃人夫や、日雇ニコヨンと云われる勤労者達が一様に感謝出来るであろうか。

どこまでもこの名目で押し通すのであれば全勤労者を楽しませる国家的娯楽行事でも考えて、オールと行かなくても、八、九十%までの勤労者が感激するようであれば、これは意義深い勤労感謝の日となろうが、焉状では零細所得の日給生活者にとっては、寧に迫った厳しい生活の上では此の上もない怨嗟の日に外ならないのではなかろうか。

何とかかとかの名目で庶民を苦るしめるのは、今日の日本行政の総ての行き方かも知れないが、祝祭旅行の名目で、庶民の懐を絞った税金を濫費する、市府会議員が現れたり、御手盛りで退職金の慰労金のと貴重な税金消費に巧みな名目をつけていたりと云う次第で、名目的な休日も致し方ないかも知れないが、感謝の日などを、分りもしない人の感情へまで立ち入ったような用語を使う。これを決めた役人の頭の程度は可成り疑わしいものである。時季的にならいっそ「逝く秋を惜しむ日」とでもすれば、いささか詩的センスもあり、昔のようなおセンチガールでも居たら、多小でも受けるのではないかと私は思う。

では私の勤労感謝は、勤労感謝の日を含む休日日曜日以外の転日である。

今日の餌も貰ろうたぞタイムレコードよ

小刻みに毎日毎日が感謝の日である、タイムレコーダーに自分のカードを押し込んでガチャリと押えれば、今日の退社時間が浮き上

会社 株式 (コ) 丸越

電気瓦斯器具
雑貨
洋装品
靴鞄
家具
呉服
婦人服
紳士服

良い安い買よい　十カ月払

月賦のデパート

大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇
電話 天 ㊀ 3957・3958
大阪市住吉区長居町三五
電話 住吉 ㊀ 4985・4986
大阪市東住吉区平野新町三丁目一
電話 東住吉 ㊀ 2110
大阪市都島区都島本通三丁目104
電話 堀川 ㊀ 7479
大阪市城東区榊生町四丁目二八
電話 大阪 ㊀ 1445
堺市熊野町東一丁一
電話 堺 2局 3587・1600

アベノ店
吉野店
鳥生店
平店
都店
蒲店
堺店

繪と川柳で表現する歴史（第10回）

戸田古方

(18) 聖徳太子

聖徳太子の時代は内憂外患ではじまりました。任那の日本府が亡んで、すっかり大陸の足がかりを失いました。

国内では氏族の争いがたえず、その最大のものは崇仏排仏の争いであり、勝った蘇我氏のわがままは目にあまるものがありました。

太子は国内のせいとんを第一と考え、十七条憲法を以てこれにあたられました。「枉直」とは「まがれるを正さん」ということでありまして、十七条憲法の中にあることばですが、太子は儒教の精神と仏教の精神を芯にして、人々をみちびかれたのでした。

太子には燃えるような理想がありました。それは天皇中心の統一国家をつくることであり、遣隋使の派遣も統一方式を彼に学ぼうとされたためでありました。

その理想は大化の改新と、大仏建立の日にはじめて、その形をとることが出来たのでした。大化の改新は政治的に中央集権が出来上ったのであり、大仏建立は仏教を国教とすることによって、全国の政治的統一と仏教がたくみにむすびつきました。和国の教主と仏教徒からあおがれる太子の理想の一応の出来上り、もう誰に遠慮も要らぬ、私一家の月末へプラスの金額を刻み込んだのである。

またその上に帰りにちょっと、ワンコップの味「背に柱前には美人懐ろに金」で飲む酒の味が一番良いと聞いているが、そんな邪魔臭い飲み方をせずとも、五臓六腑に泌み渉るこの味は又格別である。

アルコールいささかで胆斗の如し

勤労の後の安易感と自己満足の胃の腑に流れ込んだアルコール分は、多量を要しないで唯我独尊、意気揚々と帰宅出来る、これが勤労の醍醐味とでも云うか、所が調子を上げ過ぎるととんでもない事になって、

夜業したのもほんまかいな
と云われる日

と云うような事にでもなれば一巻の終りで翌日は二日酔のふらつく足を踏みしめて

馬車馬に似ていて戸籍筆頭者

となって勤労感謝へは程遠い自業自得、男と生れた悲運を身に泌みて感じ、

ともかくも送り出しときゃいい夫人

と少々卑怯なようだが、やるかたない忿満に送って出る家内の顔までが面憎くなって来るが、それも午前中で午後ともなれば、又又勤労感謝、一寸一ぱいと死ぬまで続けねばならない様だ。

大阪市民文化祭
第12回川柳大会

—わが不朽洞会員 どっさり市長賞獲得

会場 毎日新聞大阪本社講堂

昭和35年10月2日、せんば川柳社の当番で大阪市民文化祭の川柳大会が催された。

かわりやすい秋の空は曇天から晴天になり、百余名の川柳愛好家を集めて1時30分開会。パックのピラの文字はわが社の松江海里氏が書き、会の進行は番傘の大石文久氏がやっておられたようで各社の友情協力というのであろう。

社会教育課長山本氏の挨拶のあと、路郎主幹が関西短詩文学連盟の理事長として挨拶をされた。短詩界の交流によって、川柳向上を目指す柳人理事長の烈々の意気壮かんなるものがあった。

講演の前田勇先生は「大阪弁の喜劇性」をことばの学者として、本社四〇〇号記念川柳大会同様の好評を博した。

11時開場、12時30分席題6をしめ切る強行には、ちょっと新人には荷が重すぎたようであった。

わが石倉旅風氏の二年連続市長賞をはじめ、大坂形水、林夢虹、橘高薫風子、後藤海志五氏が堂々

りと見てよかろうと思います。

○

神罰もこわし仏の顔もよし
十人十答臣等唖然とし
法隆寺昔のままの柿がなり

(19) 大化改新

大きな理想をもちながら短命で聖徳太子がなくなられますと、蘇我氏のわがままは底知れず、中大兄皇子は鎌足らとともにクーデターを断行して、蘇我氏を亡してしまわれます。引つづいて大化の大宣言がなされますが、中大兄皇子は裏の力としてとどまり、叔父、孝徳天皇の名によって詔はだされたのでありました。

形だけの改新が行われても、旧時代の権力階級のなかにたまった不満はそう簡単に消えそうにも見えません。中心人物の中大兄皇子が攻撃の矢おもての、天皇の位につくわけにゆかなかったのもそのためでした。

小野妹子の第一回の遣隋使以来、大陸より学んだものを、日本の政治の上にうつしたのが大化改新です。よ程日本流にあらためはしたのですが、やっぱりぴったりしないところがあったのでしょう。

○

御沓がぬげて大化のはかりごと
おおみたからどっちにしても
搾取され

○

反対派の目をそらすために東北の蝦夷征伐をしたり、半島の争いに干渉したりしましたが、半島では大まけにまけてしまいました。

ロボット天皇の種がつきたところで、中大兄皇子はやむなく天皇の位につかれ、天智天皇となられますが、世の中はおさまっていたわけではありませんでした。

だから、天智天皇がなくなられると、すぐ申壬の乱がおこってくるのです。申壬の乱は反対派におされた天智天皇の弟でのちの天武天皇と天智天皇の皇子との争いです。

秀句の座を占めたことは特筆ものである。

兼題「呼び捨て」 堀口塊人選

よびすてにしたらうしろに立っていた　宮島天真

「こども」 中島生々庵選

それぞれの巣立ちおとんぼだけ残り　大坂形水

「旧友」 岸本水府選

旧友も二度目の妻をほめてくれ　谷口光穂

「自惚れ」 岡橘宣介選

うのぼれを女房だけは笑わない　木村草々

席題「我慢」 平井与三郎選

我慢もう出来ぬ扉の音となり　斉藤清幸

「世相」 西尾栞選

復雑な世相とオモチャ屋も思い　橘高薫風子

「魅力」 桑原狂雨選

気忙しい母親にする娘の魅力　石倉旅風選

「港」 川村好郎選

別れにもなれて港の女なり　林夢虹

「野心」 飾間杏花選

一とすじの心を野心とも見られ　後藤梅志

「ふるさと」 藤井玄武洞選

時を得た主義ふるさとに迎えられ　桑原狂雨

★ ★ ★ ★ ★

前田勇先生と酒田清子さんの対面

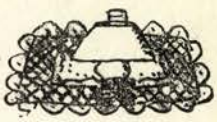
不朽洞会員酒田清子さんが、前田勇先生の名を本誌の広告で見たとき、高女時代に教わった美男子で若い先生をフト思い出したそうである。

「あの時の先生ではないか知ら」と思うと懐かしさがこみ上げて、四百号記念の大会当日、来賓室を訪ねたものである。

「オオ酒田清子さんか」と先生も清子さんをおぼえておられた。

二十何年ぶりの師弟の邂逅が、川柳によって結ばれていたという、美しい話を聞かされて何か心あたたまるものがあった。(F)

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区本町一丁目三番地
電話東(94)1745-5563番



読書週間にちなんで——

灯火親しむ秋

三人の本屋さんにご登場ねがつて、本屋から見た世相あれこれをアケスケに書いてもらつた。

＊編集局

騙された話

—一茶旅日記

長野文庫

聊か旧聞に属するが、私が古本屋を始めて五六年経った頃、もうそれが昭和何年であったかも忘れたが、とに角古本屋として一応の知識が出来、若い癖に小生意気に「初版だ、絶版だ、古文書だ」など古書通をふり廻し、本のことなら何でも知って居る様な顔をして居た時代のこと。或る日の夕方一人の紳士風の男がぶらりと店へ這入って来て「あなたがご主人さんですか」と私の若さをやや軽視したような口ぶりで尋ねた。その口ぶりが若い私にぐっと来たので少し反撥を感じて「お尋ねの主人は私なのですが、何の用ですか」と一国一城の主を気取って何も知らない癖に相手構わず空威張りをしたことは勿論である。

うっちゃりの手を心得えず押しまくりと云う形である。

相手の紳士の話を要約すると「実は私は尾道市で医者を開業して居る熊谷と云う者で生れは高知市外の中島なのだが、先日父が死亡したので帰郷して居て今、尾道へ帰る途中である。船の時間に間があるので待ち合わせ中、貴殿が古書通だとの話を承って尋ねて来た訳である。それは父の死亡後蔵の中を調べて見たところ夥だしい蔵書と軸物があったが、自分はこれを整理したいと思って居る。幸に貴殿の信用と有識を聞きその処分を一任したいと思って立寄った次第である」との意味を縷々開陳し、盛んに私の古書通を持ち上げたのである。

お世辞真に受けて財布をはたかされ

今ならそんな甘っちょろい口車に乗らないが何しろ若い頃のこと、すっかり相手の掌中にはまってしまった。

実はその二三ヵ月前、或る人の紹介で徳島県加茂町に隠居中の元脇町中学校長の蔵書を買いに行って儲けたことがあったので「いい鴨」とばかり、蔵書の買受けを約したのであった。そして持参の蔵書の一部分と云う品を見せて貰った。

それは国貞と署名のある風俗画八十五枚と旅日記と表記した小林一茶の日記帳であった。勿論私は国貞の絵を見る力はない。一茶の筆蹟すら碌々知らないのであるが、知らぬ存ぜぬとは云えない空威張りをして居たし、相手の口車のペースにまんまと乗って居るのでさも充分承知と云う虚勢を示した。

大体小林一茶は二度当地方へ来たことがあり簡単な記録は残って居る。一茶が初めて四国へ来たのは寛政六年で、その時、

冬の月いよいよ伊予の高嶺
かな

と石槌山を句にして居る。そして寛政七年一月十一日新居浜から中村を経て今治に来て俳人高田屋卯七を訪ねた。十二日波止浜に至り茫雀亭（現一茶亭）に宿泊したがそれ以外に大して史料は無い。

ところが熊谷医師持参の旅日記に依れば高田屋卯七を訪ねて徹宵俳談を試み、翌十二日は波止浜沖で船遊びをしたと書いてある。まさか正月十一日の寒さの中で船遊びをする酔狂人も居まいが、その時はそれすら不思議に思わなかったのだから愚かしい次第である。

とに角内心「こりゃ大した掘り出しものだ、大した史料だ」と自問自答しつつ、相手の様子をうかがうと紳士は悠然と煙草の輪をふかせて居る。

化かされて甘まそうに食う土団子

「値に依れば売ってもよい」と云う相手なので話は仕易い。交渉数分持参の分丈けを六十五円で取引きが成立した。当時の六十五円は先ず現在なら一万円であろうか。

更に近日同行して高知市に赴き残部の蔵書の整理を約束したのである。私はこの二点の売り込み先などを考え、又高知行きの場合の金融など考えながら船の時間がせまったから退去する相手の後ろ姿をまるで福の神のように拝んだものである。

紙数が無いから結末をつけるがこれは全部偽物であり、人物は仮空の詐欺漢であった。

つまり知ったかぶりの古本屋とか郷土史家などをだまして歩く一個の偽物販売人に過ぎなかったのである。

にせ物だから何時迄も家に有り

立読みの秋

—読書シーズン

金井文秋

読書のシーズンがやって来ると本屋の店先にも立読みの数がぼつぼつ増して来る。これを和やかな秋の風物詩だと評した人もあるそうだが、立読みだけでは本屋にと

ってあまり有難い話ではない。

立読みが多くなる事は買う客も多くなる事でもあるから、時には

客寄せの意味で立読みほっとかれ　月都

で、商売に役立たせる事もある。

立読みの義理は一冊買うて去に　阿茶

と云うのもなきにしもあらずである、新刊店の場合、立読みの対象になるのは、読む雑誌より見る雑誌が多い。映画誌、グラフ、スタイルブック、カメラ誌等である。

スタイルブック等も洋裁店の人なら短時間で見て買うて行くが、主婦となると仲々買い汚ない。自分で縫うて縫賃を助けようと云うのだから二百円以上もするのはちょっと手が出し難いのだろう。

さんざん見たあげく

立読みは附録あるかと聞いて去に　雄声

ないものを聞いて帰るのである。

カメラ誌のヌードやすれすれ雑誌の写真を見て独りでにやにやしている若いものが案外多い。昔なら書店にも出ていなかったし、思想も大分違っていた。性の知識を書いたものと云えば医学書に近い性典ぐらいのものだ。それでも立読みなどする者がなかった。解放的になったのか、頽廃的になったのか、今の学生などでも注意をしないと放さない。世の中も変ったものだ。

ヌード集次のお客も見るばかり

で、つい嫌やになるのである。

古本屋となると、本が汚れるという事にあまり神経を使わなくてよいので、見る方も、見られる方も気が楽である。傘を持っていても、にわか雨になると、ちょっと古本屋で小休止して行こうかと云う気になる。中には

立読みで思わぬ知識一つ増え　よし

などの拾いものもある。これくらいならよいのだが、

立読みも佳境に入って目が据り　一三夫

と、なるとつい我れを忘れてしまうものである。

立読みの間に止んで傘忘れと云う結果になってしまう。忘れ物と云えば傘が一番多いが、財布や市場籠、風呂の金だらいなどもある。眼鏡を忘れて取りに来なかったのはちょっと珍らしい。子供を抱いて来た奥さんなどは靴下や靴などを忘れて帰る。いやこれは落しものの方だが。

古本屋がいくら神経を使わないからと云っても、

立読みが突如ケタケタ笑い出し　晃

で、わざわざ認識させられると、実に「いやな感じ」である。

新刊、古書を問わず、長く本屋に居て買わずに帰るのはバツの悪いものらしい。それで思わしい本がないと云う意思表示をしたいらしい。

首ふって立読みそっと帰りける　晃

これなどなかなかユーモアがある。お邪魔しましたとか、スミマセンでしたとか言えば、本屋にも好感を与えるのだが、これを言うて帰る人はきわめて少い。

立読みも貸本屋となると様相がからりと変る。大部分が子供だからでもある。漫画を借りに来て思わず読みふけってしまう者、目移りがして仲々決断の付かない者、借る外に一冊でも余分に読んで行こうとするものなど、ほっておいたら一時間以上も帰らないものはざらにある。たえず顔を見分けて借るか借らないかを確めなければいけないのだから面倒な事であるあまりきつく言うと来なくなるしあまくするとすぐ増長する。立読みの仕方も、六年生以上になると知恵を働かせて巧妙にやる。

只読みのコツも覚える十二三

この期間が一年位つづくと、漫画を卒業してしまうものである。

読むものも変ってくるし勉強も忙しくなるのだろう。他の本もあまり借りに来なくなる。うるさいのはめったに買わないし借りもしない子供達で、追えども追えども蠅の如くである。時を与えず取り上げるのだが、しまいには憎まれ口を言うて帰るのも多い。

立読みの子にオッサンはけちくさい

こんな客ばかりなら貸本屋もまいってしまうのだが、やはりちょっと探してすぐに借りて帰る子供の方が多い。だからこそ

子供様々と貸本屋は思いと言う句も出てくるのである。

秋深む

西川晃

・読みもせぬくせに読書の秋ですな

燈火親しむの候と書き読書の秋と言うが、本当に本らしい本を読んでいる人は至って少いのではないか？知識階級と称せられる人達でさえ大方は週刊誌で間に合わせている時代だ。たまにいい本を読んでるなと思って感心してると、大学校授の書いたエロ随筆であったりする。然し〃秋やは物を思わする〃で、秋深む頃ともなると誰でも、何かしみじみと生甲斐を感じさせて呉れるような書物が読みたいなという気持だけは持つものらしい。

立読みの記録保持者がまた来てる

買って読む人の少い割には立読みの数は多い。一度立読み常習者の長時間記録をとって見ようと思って、或日、本人が得心のいくまで黙って読ませてみた。えんえん実に三時間。日本人は元来気短かな性質だそうだが、立読みをする人種は別らしい。

威風堂堂エロ本の立讀みす

立読みの中に元陸軍の将官ででもあったろうかと思われるような厳めしい髭紳士が突っていることがある。悠揚迫らぬ態度で、威風あたりをはらうの概があるのだが、遺憾ながら見ているのはヌード写真がいっぱい出てるエロ雑誌で、何とも奇妙な風景である。この人も趣味・読書と書く一人であろう。

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
武田薬品
リポコール
(12種の成分を配合)
20錠・50錠・100錠

立讀みが突如けたけた笑い出し

ひっきりなしに電車、自動車が通り、人の往来の激しい店頭で泰然自若、と立読みにふけっていた男が突如けたけた笑い出す。不意をつかれて私が仰天する。当人にとっては全くの三昧境であろうが、私には青天のヘキレキである。然しこんな客は憎めない。もし腹を立てたら私自身がみじめである。

首振って立讀みそっと帰りける

買う気があるんだがなあ。残念だなあ。というジェスチュアをする。ひやかしと見られたくない見栄かも知れぬ。首を振って本を置くと静かに去って行く。彼の後姿にも秋のわびしさがにじみ出ている。

エロ本と思たか句帖覗きこみ

耳のそばまで口を持って来て「なんぞええ本ないか」と聞くのは、必らず非売品のエロ本を探している客だ。「うちは、そんな本おいてまへん」と言っても信用しない。「無い筈があるかいな。奥に隠したあるやろ。絶対誰にも言わへんよってに。なあ、頼むわ、おっさん」とくる。少々腹が立って「無いものは出せまへんな」と素気なく突っぱねても、まだうるさくねばる。私は純日本人型の性格だからひつっこい奴には全く閉口する。黙って相手にせずにおくと「おっさんが、さっき見てた本なんや」と私の句帖まで覗きこむ。この種の人間には句帖までエロ本に見えるらしい。

万引と根気比らべも阿呆らしや

猫みたいに万引音も立てず消え

盗人の眼は横から見ても光っている。釜ヶ崎で十数年も古本屋をしていると、新米の刑事よりは敏感だ。〃貴様は盗人ではないか〃という顔を露骨にして見せるのだが近頃の万引はそれぐらいの事でへこたれない。怪しまれている事を知りながら虎視眈眈と隙をねらう。〃何くそ〃とこちらも頑張る。万引との根気比らべは身心を疲労させることおびただしい。他の客に本を包んで剰銭を渡していると、いつの間にか姿が消えている。勿論私の店では一番高い本が何冊かは減っている筈だ。これだけの根気と敏感さがあれば、心の持ち方一つで立派な人間になれるだろうにとつくづく思う。

詩がどうのこうのと店に尻むけて

交通の便がいいから私のところへは柳人や歌人がよく来る。亜鈍氏もちょいちょい寄られるが、氏は店に這入って来るやいなや忽ちにして文学の話になり詩の話になり、口角泡を飛ばして私を説破せずんば止まずの勢で熱弁をふるわれる。そうなると私も店などかまっては居られない。店に尻むけて必死の反抗をこころみる。立読みも万引もびっくりしたような顔で私達を見ているが、不思議とこんな時に滅多に本を盗られる事はない。

エロ雑誌売って生きてるのが俺さ

膝入れるだけの天地で老いゆくか

エロ雑誌を売ってそれで生きているというのは如何にもいまいましいが、今の本屋からエロ雑誌をとりのけてしまうと殆んどが食っていけないだろう。強ち私の店だけ

大仙陵を拜して川柳を憶う

—会社の窓から—

八木摩天郎

私の会社は、大仙中町にある。そもそも大仙町の名のおこりは、仁徳御陵が、大仙陵と言うているので、それに因んでつけた町名である。会社の窓から遙かに御陵の森が見える。歩いても、さほど遠いところではないので、会社のつれづれ、よく歩を運ぶことがある。周囲実に二十五丁十間、総面積十三万九百、我国山陵中の最大なるばかりでなく、世界に其比を見ない。誠に大山起伏して松樹鬱蒼たる大仙陵の名にふさわしい御陵である。私の祖父が、村長であったので村民を代表して、濯漑用水に、嘆願して二重堀を三重堀に官許を得た恩出の御陵でもある。

話はかわるが、波多野兼五郎著「梟の目より」に依ると、亜歴山大帝時代の希臘に、世界七驚異の称があった。それは何れも、希臘を中心として東はバビロン、西は埃及までの間にある人工的造営物の驚異に価するものを数えあげたのだった。即ち埃及のピラミッド バビロンの架空園、ハリカルナッソスの大墳墓、オリンピヤの神像、ロードスの巨人像、バビロンの城壁及びアレキサンドリアの灯明台と言ったようなものであったが、後世誰やらが別に世界の七驚異を案出した。それは、一、羅馬のコロセァム、二、アレキサンドリアの墜寶、三、支那の万里の長城、四、英国の先史的石団、五、ピザの斜塔、六、南京の磁塔、七、君府の聖メフィヤ寺院で、何れも人工的造営物の驚異すべきものを挙げたのである。今、我国で希臘の七驚異に倣って、人工的造営物の優秀なものを数えあげて日本七驚異と称し得べきものを求むると、一、日光廟、二、東大寺の大仏、三、法隆寺の壁画、四、仁徳天皇の御陵、五、大阪城、六、名古屋城の鯱、七、太宰府の水城の七種であらねばならぬと書かれてある。それほどに驚異に価する御陵である。

私はいつも、この御陵のほとりを逍遙するとき、

謹んで拜せば御陵ただ蒼しの路郎先生の句が浮かんでくる。

それと同時に、私が市役所に勤務していた当時、俳人山本梅史君が、編さんした「堺市案内記」に依ると、

太古に於ける文字の有無については、古今拾遺、伴信友の仮名字源等によると、之を無しとなし、神代口訣史徴解題記、神字日文弁等は之を有りと主張し、諸説区々で定まらない、或は対談身振結縄を以て用を弁じ、別に確定した視覚上の符号がなかった。そうして世に伝うる神代文字なるものは、後世人士の捏造したものだという説もある。然るに、先年諸陵寮に

ては仁徳帝陵を調査した砌り発掘した石棺の蓋の裏面に象形文字を彫刻せるを発見した。これは畏いことであるが、本邦では未だ嘗って其例を見ない珍らしい発見であって、我国の上古に固有文字ありや否やに就ての好参考資料である。と書かれてあるのも思い出すのである。

世界最古の法律である「ハンラビ法典」も、象型文字に依って後世に伝えた。

仁徳天皇の御陵は、仁徳天皇の御在世の砌り築造された寿陵であって、遙かに会社から仁徳御陵の森が見えて、私は太古の人々の先人の偉業と、その人の姿を髣髴シフト眼に浮かぶのである。

私はここに於て思う。今は文字と云うものがあり、辞書があり、印刷がある。太古の先人達が、人工造営物として、象型文字として石に刻して、後世に何らかを残さんとする努力を思わねばならない。先人が後人に教え、人の人に伝える意思表示は文字の媒介によって、画によって、文章に依って芸術作品に依って伝えるべきであるのは勿論である。

「川柳雑誌」も、回を重ねて、茲に四〇〇号となった。路郎先生の御手許の大正十三年二月の創刊号には

「現代人の思想にぴったりと触れた詩と云えば川柳の外にはない。我等は此の川柳に依って人世を的確に批評して行きたいと思っている。」と書かれ、第三号に「――川柳は短歌の如く貴族的でなく、俳句の如く隠遁的でない。人間味のぴちぴちとしたところを躍動させる短詩型としては、我が川柳あるのみである。我等は此の川柳に依って後人と語らんとする歓びをもっているものである。」と書かれてある。右の二文は共に、いずれも金玉の文字であり、本誌の扉に記された言葉である。

第二号には、柳界に一大センセイションを起した有名なる一文は、浮世絵の北斉を例にひいて、自己の芸術に真剣なる事と、自己の修養と努力とを説き、後世に遺し得る一句の力作をなせ。「一句を遺せ」と言々句々火の如き力強さをもって書かれ、今なお「一句を遺せ」「いのちある句を創れ」の川雑のシンボルは我々川雑のみならず、多くの柳人に呼びかけている。

会社の、つれづれ仁徳御陵を遙かに拝して、先人の偉業を偲び、旁ら、後人と息する川柳に親しむ身の幸福と、父母に感謝して、壁間に、掲げた、私の拙なき字、拙なき句、

うれしくも大仙陵の見える土地

と、口ずさんで、会社の窓から眺めて筆を執っている次第である。

子供の読経

直原七面山

旧盆の日、勤めから帰って夕食を済ませ、二階に上って是非明日までにと云って頼まれた或る機関紙の原稿を書いていたところ、隣室の床の上に祭ってある仏様の前で、一人娘の誠子（六年生）がいとも真面目そうに、〃南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏〃と唱え始めたので、六年生ともならば子供も殊勝なものだなと感心しつつ、ペンを擱いて読経の声に耳を傾けていたところが、読経はとんでもない方向に発展してしまいました。

〃南無阿弥陀仏ブドウが欲しい、南無阿弥陀仏ブドウが欲しい〃

ここでおごそかに鐘の音が〃チーン〃

〃南無阿弥陀仏ようかんが欲しい、南無阿弥陀仏ようかんが欲しい〃〃南無阿弥陀仏ブドウ、ブドウ、南無阿弥陀仏ようかんようかん〃〃チーン、チーン〃と鐘の音全く恐れ入ったお経になってしまいました。

他の果物は余り好まないのにこの娘はブドウと来たら目が無いのです。

無論ようかんも好物中の好物なのです。

〃とんだお経でさぞかしおじいちゃんを初め御先祖様も大声を張り上げてお笑いになったことでしょう。〃そう思いながら私は再び原稿紙に向ってペンを取りました。

★★★

柳人親子

★★★

不朽洞会員の最年少者高津徹也氏は、本社句会でよく天位をとる有望な人で本年も不朽洞賞に輝いている。

この青春作家に紡毛（ぼうも）という厳父がおられるが、この柳人親子、いつも仲よく句会へ熱心に出席されるが、どうやら息子さんのほうが先輩格であるらしい。

不朽洞賞をとられた時、紡毛氏に、

「おめでとう」と、徹也氏のお祝いを申し上げたところ、

「川柳では仇敵同士です」と、〃せがれ小癪な〃という顔をされていた。それでもこのパパとてもうれしそうであった。

柳人親子といえば加川大然、靖朗氏のもう一組みがある。一度本社句会へご出席ねがいたいものである。

（一三夫）

に限らず、エロ雑誌、エロ小説が一番売れる。とにかく現代はセックスの時代だ。大学教授でもはだか放談を書いて稼ぐ時代なんだと自分に言い聞かせて見るが、そんな事で私の自尊心をごまかすことはできない。檻のような狭い場所に終日坐ってエロ雑誌を売りながら老いてゆくことが意味なき虚妄の生活のように思われて、やるせない気持になる。ひろびろとした蒼空の下にねころんで、ゆっくりと本を読んで見たい。人生について考えてみたい。

秋は私をも、いささか感傷家にしたようだ。

入門講座

研究題「塵」

清水白柳

昨年の十一月号発表の古穿氏の研究題に塵というのがあったのを、発表後に気がついたのですが、昨年も今回も同じ作家で出句されている方があるので作句にも困られたことであろうと思います。併しこうした事はよくあるので着想の巾を拡げる一つのレッスンとして研究してゆきたいものです。塵と埃と芥はどこで違うのかと迷ったのですが、それぞれの句について考えて見たいと思います。

1塵一つない神苑で逢びきし　S

2塵一つない里の家母ひとり　酔夢

3塵一つ落ちて苔寺よく目立ち　隆史

4塵一つ止めぬ座敷に肩が凝り　柳宏子

1の句は下五文字に表現上の不足を感じました、句意は判るのですが頂けないものを拾って居ります、2の句はひとり暮しのひっそりした情景を描いていますので頂きました。3の句は苔寺が生きている句であります、4は下五文字にうがちを感じます、次の句の

応接間の塵へ奥さんをほぼ察し　秋月

は雄然とした応接がうかがえて句としては面白いのですが、やや下五文字に雅俗の不足を感じました。

さもきたなそうにかんしょやみ塵つまみ　生蓋

塵そっと拾い女中の座をさがり　静水

かんしょやみの句は、さもきたなそうにと凡漫な言葉を使ってあるので句が弱くなってしまいましたが、塵そっと拾いの句は着想は誠にいいと思います、ただ少し気になるのは女中の・であります、これは女中はではないでしょうか。

塵一字の揮毫に墨を磨れ筆を取れ　H

上五の塵一字が塵でなければならないという必然性がないように思われました。つまり動く句ということですが、次の句の

塵はたく父の秘蔵の琵琶が鳴り　保夫

の句の秘蔵の琵琶は、琵琶でなくてもよいように思われるでしょうが、この場合は矢張り琵琶である方が父の秘蔵ということが生きてくると感じられます、塵箱の句には

1しまったと塵箱もう一度さがして見　R

2塵箱に主婦のぜいたく捨てられる　S

3塵箱をひっくり返す夫のヒス　B

4ゴミ箱の底にへばりついた硬貨　静観堂

5塵箱に捨ててはいて書いて未だ解けず　粉渕

1は余りにも単純な内容しか持っていないので失敗です、2はぜいたくなものを捨てたのか、ぜいたくを皮肉ったのか、あいまいな点があります、3はヒスを起してひっくり返すのが塵箱でなくてもいいのではないかとも思われます、4の句の硬貨は恐らく一円のアルミ貨であろうと思われますが佳い処を見つけられて居ります、5の下五文字の未だ解けずという措辞に若々しさを感じました。

転室へ塵はきれいに掃いて行き　I

退院へ塵もホコリも掃き清め　S

薬包紙いつかは塵にしてしまい　朝太

水病い位置も気になる塵の箱　粉渕

前の二句は描写が平淡すぎます、薬包紙の句はこの外にもありましたが、この句の、いつかわという言葉に救われたのです、水病いの句は神経質を描き出していますが余りいい句とは言えません。

立読みへかえれとばかり塵払う　I

目が合って本屋はあらぬ方はらい　弘村

前の句は温かみのない句ですが後の句には人間味を感じさせられます、句はこんな風に詠みたいと思って居ります。

夜行列車ああ塵箱の中のよう　蘭

軽いタッチでよく描き出されています。

特急通過で集めた塵が舞い　朝太

これは車内でなく通過駅の風景をとらえて居られますが、特急通過で・というでの一字が無い方がよいのではないでしょうか、でがあると句が説明調とでも言いますか平淡な感じになるように思います。

恐ろしい砂塵を巻いてダンプカー　生蓋

走る兇器といわれるダンプを詠んでいますがそれだけに終っているようです。

1文字板の塵とれ時計動き出し　T

2自動車のチリが気になる正倉院　K

3国宝の塵へ学者も気を使い　保夫

1の場合は埃ではないかと思います、句意も腕巻時計が動くようになったというだけでは句になりません、2は砂埃りですから塵と

續 川柳書架 (3)

定本 岸本水府句集
(岸本水府著)

★著者の「序」から——
番率五十年記念事業の一つとして、私の句集をまとめて出して頂くことになりました。自選して見なおして、今さらのように、句業の貧しさを感じましたが、これが私の精一ぱいですから致し方ありません。もっともっと勉強します。
著者

★目次の概要を挙げると、
母百句。初心時代。番率を創刊して。社会進出時代。本格川柳道を称えて。戦中篇。終戦直後篇。立直り篇。川柳小説。第四運動へ。

★昭和三十三年一月一日発行。三五一頁、定価四〇〇円。発行所大阪市北区木幡町四。番率川柳社

★本書で著者作風の全貌が判る。柳誌「番率」を主宰。

川柳 江戸花街風俗
(阿達義雄著)

は言えないのではないでしょうか塵と埃の限界は知りませんが、自動車でも砂塵とも言いますから塵でもいいのでしょうがこの句では深いものを持って居りませんので、せんさくする程でもないようです、3の句も埃の方がぴったりくるように思われました。

朝日射し塵の躍動今日も生き　酔夢

肺活力弱く神経質の塵　保夫

雑布をすすげばこんなにチリも浮き　静水

太陽が光らす空気中の塵は古句の中にも見ることが出来ますが、塵の躍動といった表現は佳いと思いましたが今日も生きは蛇足の感じであります、自分が生きているということであれば句の生命を失ってしまうでしょう。肺活力の句は佳句といえます、雑布の句は、着想の佳さにひかれましたが表現に内容はどの佳さがないのが残念に思われます。

紅葉も落ちれば塵として焼かれ　豊年

落葉焼く風情も川柳家の目にはこんな風に見えるのです。

観光地塵の名所と言われそう　秋月

塵の名所とはよく焦点をつかんで居ります。

遠足の土産は袋に入れた塵　朝太

児童の遠足に引卒の先生の平常のしつけを思わせる佳句で、旅のエチケット川柳としても選に入りそうです。

先生はひらわず塵を指して過ぎ　柳瓢子

この句は校庭から廊下に落ちている塵なのですが、当番の子があわてている様子まで描写されていて佳い句であります。

晴れの日にそなえてレターの塵箱に入る　美舟

結婚式もせまって来たので、恋人からのレターを整理したのでしょうが、晴れの日にそなえて詠まれているので女と解釈しますと、前の愛人からのレターを捨てることになりますが、男の場合ですと、晴れの日にそなえてという字句に、こだわりを感じます。

酒飲めば塵があろうがあるまいが　H

ちらばったところでお茶をのんでくれ　愛鳩

前の句は酒のみの一種の状態を詠んだものですが深味を感じないのですが、後の句は一応句として出来て居るのですけれ共、下五文字にややあいまいな点のあるのが少し気になります。

俗塵をさけた住居で落付かず　弘村

静けさも過ぎるとこうした気分になるものです、人間性をうがった句です。

電気掃除機大きな塵は拾われる　豊年

家庭電化の盲点をついている面白い句です。

塵掃き集めたままで妻はいず　峻艸

ホーキとチリトリを持ったままで、そこらで立話でもしているカッポー着姿の妻をよく詠まれています。

チリトリを持って答える朝の声　弘村

前の句の続きを詠んでいるようで面白いと思いました。

車券ハラハラ金の亡者へ背をむける　一鶴

ハラハラという描写はヒラヒラではないかとも思ったのですが、塵の題詠にここまで突込んだ句を詠まれましたのには敬服させられました。

塵溜へ西瓜ひょろひょろ秋を伸び　柳瓢子

古方氏選評の中に、塵捨て場一葉可愛く延びている　万女　があります、この句の西瓜に川柳味を感じさせられました。

屋根看板塵山積の総本家　八九寸

看板のうらで茄子の花が咲き豆秋　の句を思い出させる句ですがこの句は句全体で塵のありかを説明しているに過ぎないようで非常に弱い句になっています。

塵ばかり作って工作はかどらず　周甫

すらりとした表現で程よく皮肉味を感じさせられます、表現によって成功している句です。

気が急くと隅々の塵四捨五入　豊年

下五の言葉によって成功している句です、ユーモアを含んだ作句法で生き生きとしたものを感じさせる佳句であります。

最後に塵でない塵の句ですが、叱っても掃いても塵が出る役所　静観堂

叩けばホコリの出る身体という昔の言葉がありますが、役所と汚職はつきものですから着想が古いというのが難点です。

大阪の塵であっても夢を持ち　永香

人間の塵をよんでいるのですが、屑でもよいのではないかと思いました。併し作者の意志で塵の方がピッタリくるのであればそれでいいわけなのですが、そこが難かしい処です。

塵に花子供銀行に大豆賞　辰始

塵に花というのは少し飛躍しすぎて難解になるおそれがあります。塵も積れば山となるという諺の通りに、沢山貯金の出来た子供銀行が表彰されたのを、花と詠まれたのでしょうが消化しきれていないのが目につきます。

なお諺をそのまま使った句もありましたが、それだけに終っている句ばかりでしたので取り上げませんでした。以上で終りますが、出句数についてのお尋ねがありましたので、申上げますが今迄は制限してありませんでしたので一句送って来れる方から二十句程も出句される方もあって取捨に困りましたので成るべく五句から十句迄位いにして頂くと有難いと思って居ります、研究題のことですから制限しないのが一番よいのですが、発表の紙面のこともありますので御協力をお願い致します。

次回　研究題「糊」（のり）
〆切　十一月十五日
発表　昭和36年一月号
投句先　大阪府南河内郡丹上
四〇四　清水白柳

★本書の凡例の一節を抜く。

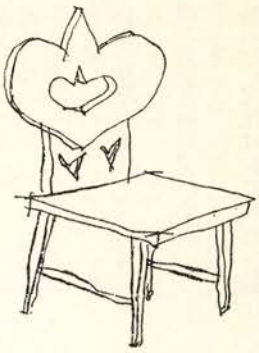
本書の第一部は三浦屋高尾関係の句約七百を物語風に並べて、事件の展開をさせながら川柳語、特に花街関係のそれを解説し、一方江戸庶民が高尾に関する俗説を中心にして、封建制度下の権力者たる大名を如何に観察し、冷笑し、揶揄し、又之に対し如何なる反撥を示したかということを見てゆこうとしたものである。程度から言えば第一部は本書の入門篇に当るものである。高尾に関する句は既に西原柳雨氏によって三百九十五句、森田鷗東氏によって二百五十一句、今井卯木氏によって九十四句の分類略解が発表されておるが、三氏共にその出典を示されなかった。本書は右諸書に多大の恩恵を蒙って出来たものであるが、本書に掲げた過半数の句は右諸氏の著には無いものであり、物語の展開上の必要から、右先輩の書より其儘引用した約十句以外は、本書に於て、初めて出典個処を明示されたものである。（以下略）

★目次は第一部、川柳三浦屋高尾物語。第二部、扇屋と花扇。第三部、格式と揚代。附録、古川柳試験問題等。

★昭和二十四年十一月五日発行。二六四頁、定価百六十円、地方定価百七十円。発行所東京都千代田区神田淡路町二ノ一三東洋館。

★著者は新潟学芸大学教授。古川柳研究家として令名がある。

一路集



寝台

武部香林選

お医者さんの卵ベッドをとり囲み　若菜
療養のあせりベッドの位置も変え　美音子
快復期ベッドの下の洋酒瓶　蓑流
寝台はきらい帳場で念を押し　恵二朗
寝台で寐たいと病気羨やまれ　朝太
寝台に十年全快するでなく　古心
寝台へ明治の母は寝つかれず　花美
関取りのベッドに困る寝台車　山椒坊
陳列のベッドマネキンよくねむり　光福
薄給も社用で乗った寝台車　竜昭
日曜大工きしむ寝台出来上り　光郎
寝台は予算に遠い百貨店　蛙水
退院日寝台名残り惜しく見る　不村
退院のベッドの上は荷を並べ　和三郎
置いて見てベッドかさばるものと知り　生萱
寝台にありて畳を恋しがり　初甫
ルンペンは夜のベンチをベッドにし　井蛙
心中の片割れベッドぎごちなく　豊年
寝台も薄々癌と知っており　実男
退院の近い寝台いつも空　一鶴
寝台へ手すりが欲しい快復期　宗太郎
寝台の下から附添い首を出し　藤波
お偉ら方迎えて寝台かしこまり　繁太郎
寝台に腰をおろして見舞客　十九平
寝台の長さへ余る足を曲げ　幽谷
名月に寝台の向変えさせる　圭井堂
寝台の谷間で附添よく眠り　井蛙
起きて来ぬベッドへボーイ不安がり　さぎす
パジャマを買えば寝台欲しうなり　実男
寝台車車掌の声を下にきき　代壮男
ステテコが弁当を呼ぶ寝台車　忠三
青春をギプスベッドですりつぶし　どんたく
大金を持つ寝台車寝もやらず　旭峯
寝台の悲しき日なり逝きしひと　万女
寝台車勿体なくもねむられず　圭水
寝台の固さに独りだと思い　ひか平
宿直へ椅子寝台に早替り　清人
古ぼけた寝台歴史の中にあり　竜蔵
こうなって寝台だけが知る秘密　旭峯
寝台車社長の上に寝る俺ぞ　鵜汀
赤玉だがと寝台起きてくる　八九寸
寝台車車掌うやうやしく起し　文庫
新婚の仲をさいてる寝台車　光福

佳

人

寝台へ寄れる平生からの仲　文庫
地
寝台を転々として内科外科　一鶴
天
寝台へ寄るなと愛の眼が叱り　さぎす
軸
寝台をようやく下り窓遠くおもえり　香林

靴

黒川紫香選

男性を蹴とばす型の靴はやり　瑞歩
運動靴を持って田舎へ夏休み　万女
真直ぐに我が家へ帰える靴の音　祥月
社長より次席の靴がよく光り　定月
特売の靴大きすぎ小さ過ぎ　宗太郎
生活の疲れを靴の裏に見せ　実男
はきなれた靴破れても捨てられず　青園
あるだけの靴履いて来る女秘書　笑太
逆転のチャンスへ靴のひもをしめ　清人
赤い靴女の夢のはてしなく　花美
靴見れば職業までがすぐわかり　秀峰
気が引ける靴女中の手を借りず　ひか平
往診の医師スリッパの様な靴　どんたく
千鳥足自分の靴の紐を踏み　幽谷
磨き台磨きたい靴乗って来ず　光郎
靴踏んで踏んでダンスを教えられ　竜昭
銀世界バタヤの靴が道をつけ　光福
手も足も出ない靴だけ見て帰えり　隆史
靴が鳴るリズムもうれし退院日　一鶴
靴の底チュウインガムがへばりつき　涼人
帰えらないつもりの靴を出ししぶり　鵜汀
一生を賭けた地下足袋鉱山へ捨て　たもつ
新品の皮靴畳の上で履き　竜蔵
靴磨く気にもなった回復期　五月
足の癖聞いて靴屋は鋲を打ち　峻艸
靴磨きついでに裏打ちしろと云い　忠三
てれ臭く長靴夕焼空を行く　兼治郎
酔うてきた靴玄関をしめ出され　井蛙
壇上へ行く代読の靴が鳴り　昌男
靴屋さんの自信が足をつっこませ　伊津志
陰干しの靴に鳴いてる秋の虫　徹也
式場で靴キュッキュッと派手な音　庸佑
靴だけが遺品となって帰って来　雄声
五月雨へ今朝も湿った靴をはき　不村
下足番身内の靴は別に置き　十九平
常連の靴ちらばったままあがり　和友
一ぺんは畳の上ではいて見る　むじな
むつまじく靴も揃えて新家庭　美音子

輝やく巨歩 (3)

—創刊号から四百号まで

★　★

昭和十一年

川柳指導講座　川上三太郎氏からバトンを塚越迷亭氏へ。

本社は有保証の新聞紙法の適用のもとに掲載内容の拡大化を計り、川柳の社会化に一歩を進める。三月

本社事務所を廃止　六月

路郎主幹川柳職業人を宣言　川柳雑誌は主幹の個人経営となる。七月

川柳人協会創立。七月

本誌発行日を八月号から毎月十五日に変更。

川柳名句評釈　八月号から連載、路郎主幹執筆。

柳誌要目欄九月号から新設。

路郎主幹川柳協会に関する東京懇談会開催のため上京。九月十九日

路郎主幹松本へ。九月二十一日

本誌再び無保証新聞紙法に拠る刊行に戻る。十月

路郎主幹廃川支部創立十周年記念川柳大会へ出席。

昭和十二年

本社新春句会　一月九日大阪朝日新聞社三階大広間で開催。

不朽洞会員初会合　二月七日

玉手山汐の宮雨中吟行　四月二十五日

路郎主幹山雨楼を帯同、全国川柳家交歓大会（四月十八日名古屋）へ出席。

ハイヒール一番ビリを母走り　孝風
物売りの度胆を抜いた太い靴の音　代仕男
石畳団体らしい靴の音　代仕男
新入社靴光らせて光らせて　惠二朗
山家から来たなと思う靴の泥　古心
佳
妻の出す靴其の通り履いて来　保夫
妻の靴横にあるから磨いとき　初甫
会いに行く靴は自分で磨いて出　山椒坊
停年に近い夫の靴を拭く　紡毛
また娘靴をだまって買って来る　生薑
人
口笛でデイトする靴磨かれる　弘道
地
共稼ぎ靴はてんでに磨いて出　旭峯
天
親子とも汚れた靴を気にかけず　蓑流
軸
急変へ靴ぬぎっぱなしした　紫香
人

内助

田中烏雀選

膝枕良妻の労かえり見ず　周甫
栄転に内助の功という噂　蘭
膳線を出さねばならぬ左前　繁太郎
よき内助この温顔に仕上げたり　可住
生活の設計妻の智恵に敗け　祥月
内助の智恵が光った御栄転　雪美
栄転の陰の内助も見送られ　蜻蛉
内助の妻はめ人の世話も出来　秀夫
名優の芸を助ける馬の脚　山椒坊
夫いま闘う太鼓遠く聞く　粉州
妻病んで内助の苦労やっと知り　万女
一豊の妻見習えと愚痴を言う　瑞歩
名市長女房役が蔭にあり　市郎
名なせば内助も一緒に褒めて呉れ　朝太
内助の功よすぎてうだつ上らない　酔夢
新築へ内助をほめる事ばかり　壮
鶏産んだ数を控えている内助　南牛史
内助利き過ぎて夫が懶け出し　鵜汀
大臣も内助の功を如才なし　秀峰
病身の夫を援く手内職　旭峯
内助の功主の手腕にしてゆかし　代仕男
内助する妻あり会社遅刻せず　竜蔵
停年へ無事に達した妻の労　幽谷
皮肉めき女給に褒められたる内助　保夫
一周忌妻の内助のことに触れ　蓑流
借金の言分けいつも女房がし　茶楽
立志伝内助の功も書いてあり　どんたく
祝賀宴内助の功は小さく坐し　美音子
膳線で姑へ義理を立てておく　忠三
へそくりをばらせば内助とむき直り　伊津志
内助とは親もとへ妻借りにゆき　孝風
ひかえ目に語らぬ内助奥ゆかし　庸佑
さからわぬ事も内助の一つにて　圭太
しみじみと妻に感謝をする日あり　卯之助
内助の功云ってお尻に敷いている　鮎子
内助もう株の上下へ気を配り　不村
みをつくし鳴っても内助ミシン踏む　一鶴
経済をモットウとする市場籠　初甫
一生をくたびれきっている内助　和友
内助の功空しく後家と云う日日を　紡毛
倦怠期内助の功も一休み　清人
店多忙記帳に電話妻の役　隆史
駐在の妻へも下りた金一封　光福
雑草の生命力に似た内助　光子
共稼ぎ遅い内助へ茶を沸し　和三郎
褒められる内助男の生返事　同
帳尻の赤字は妻にまかせとき　裕邦
闘病の支えは妻の強い意志　同
女大臣内助の夫ほめている　峻艸
皆勤へ内助の功も言うてくれ　雄声
内助の功女遊びをプツリ止め　古心
口下手は内助の方へ廻しとき　笑太
発展の蔭に内助がやせ細り　圭井堂
持ち直す社運に妻の戦があり　実男
実家へは妻に契約させにやり　むじな
自序伝は内助の功にふれていず　生薑
電化器具内助の功を減点す　同
妻の腕鵜匠のようにさばくなり　惠二朗
家計簿は夫に見せず平和です　同
日限のある裁縫に長話し　定月
前掛けをとって金策に出る内助　徹也
男一匹内助にたよる床に病み　井蛙
鏡から内助の功の出た昔　兼治郎
カロリーを満たす内助の質通い　光郎
勤続の其の半分は妻の功　藤波
端境期内助の妻のサロンパス　十九平
表彰に内助の妻はおじぎだけ　蛙太
税務署も内助認めた決定書　宗太郎
お父ちゃん寝さしてからの針仕事　ひか平
内助的保険段々職業化　文庫
立志伝糟糠小さく小さくいる　惠二朗
エプロンで内助の功は撮される　愛鳩
法人になって内助の常務室　圭井堂
言わずだけ言わして内助釘をさし　豊年
奥さんにめんじて説諭だけで済み　涼人
しまい風呂濯ぎを月に干す内助　八九寸
へそくりを千株にした内助の功　惠二朗
内助フト手鍋の頃を恋しがり　圭井堂
内助の功二号の処置もまかされる　生薑
定年が妻の内助にたよりきり　たけお
一豊の妻には遠い妻へ愚痴　孝風
人
銀行へも税務署へも行く内助　圭井堂
地
質屋から内助の功へ賀状が来　弘道
天
内助にも助太刀の母いてくれる　花乃子
軸
巣を守る妻あり翼伸す鷲　烏雀

路郎主幹名古屋支部創立記念句会（六月二十日長円寺書院）へ出席。

武玉川新研究号　十月十五日発行。

有恒川柳会生る　十月十六日

本社事務所新設　十月二十五日大阪市西区土佐堀筑前橋電停前昭和ビル内に。

川柳路郎講座開講　十一月二十日松坂倶楽部。

川柳人協会特集号　十二月十五日発行

同清週間師走川柳大会　十二月三日大阪朝日新聞社三階大広間で開催。（以後省略）

昭和十三年

十五周年を迎えた川柳雑誌は型を菊倍判とし紙質を改良してデビュー。定価据置。

鴈治郎追慕川柳会　二月十九日誓得寺で開催。来賓に中村芳子、林敏夫、高田天野の諸氏。

電気科学館見学句会　三月二十三日四ツ橋の市立電気科学館五階で開催。

創刊十五周年記念特集号　五月十五日発刊。

グライダー見学川柳会　七月二十四日盾津陸軍飛行場で開催。

創立十五周年の記念出版として路郎主幹著「新川柳評釈」発行。（九月）

路郎主幹九月十八日正午神戸第一突堤から黒竜丸に乗船、**北支蒙疆**の旅へ。

戦死柳友慰霊祭　九月二十一日誓得寺で開催、川柳人協会主催。

路郎主幹十月二十一日帰日。

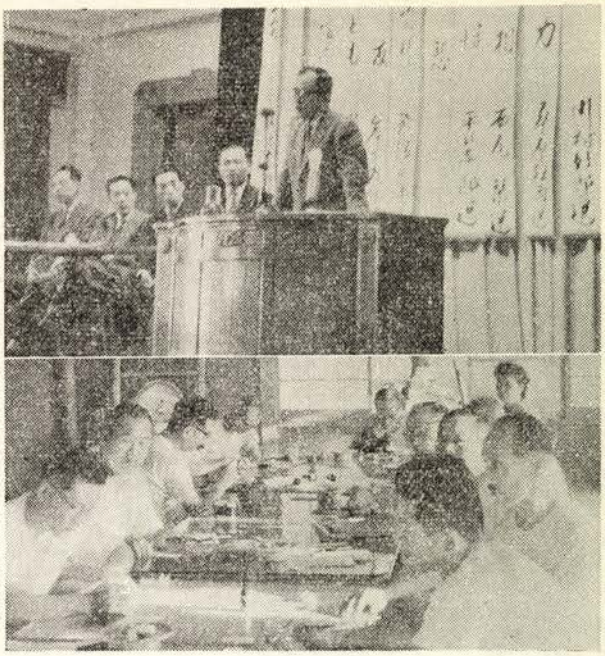
昭和十四年

本誌再び有保証新聞紙法の刊行により掲載内容の拡大を計る。

社会ページ欄新設　世相の批判と警告を論及。

（担当　橘高黛風子）

柳界展望



写真説明―上は大阪市民文化祭川柳大会に我社の中島生々庵氏が毎日新聞社講堂で兼題を披講するところ。下は高ヶ辻川柳会が大和竜田で催された足立春雄氏の榊目歓迎句会。正面が路郎師、一人おいて左が春雄氏。

句会

▼本社十一月句会は七日（月）午後六時から日本橋北詰東入る大阪観光ホテルで開催、秋の夜長のひと時を作句で送るよう柳友誘い合わせて多数出席されたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）は十月十八日（火）午後七時半から南区三休橋南詰中島生々庵居で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は十月二十一日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪逓信病院川柳会は十月二十二日（土）午後二時から五階会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は十月二十七日（木）午後六時から難波の親和クラブで開催。只上路郎主宰出席。▼川雑岡山支部主催の岡山鉄道倶楽部文化部秋季川柳大会は十月八日に本社の北川春巣・冨岡淡舟両氏を迎えて、岡鉄クラブで開催。▼ひろしま川柳会第一例会は十月一日午後六時から広島駅二階会議室で開催。▼川雑米子支部松露句会は十月十六日午後一時から、川雑明和病院支部のすゝむ・舟遊・満秋・弦月・薫風子の諸氏を迎えて米子公会堂和室で開催。▼川雑鳥取支部句会は十月十五日午後六時から、川雑明和病院支部員参加の上、智頭橋畔リーチ画廊で開催。▼堺市文化祭協賛堺市民川柳大会は十一月十三日（日）午後一時から堺市大小路堺労働会館で開催、兼題、横着、巾着、到着、着物、終着駅。▼市民文化祭参加第十一回岸和田市民川柳大会は十月二十三日（日）十二時半から宮本町会館で開催。▼川柳文化祭第二十二回京浜川柳大会（東京都）は十一月三日正午から番町小学校講堂で開催兼題、筋・勝負・ひとまわり・求婚・打ち込む・寸前・偶然・がめつい。▼第十回市民文化祭協賛第五回富田林市民川柳大会は十一月五日（土）午後一時から富田林高校会館で開催。▼豊中市民文化祭第三回川柳大会は十一月六日（日）午後一時から豊中市立中央公民館で開催、兼題白と赤・懲・二人・麓・普及。▼西宮市民文化祭川柳大会は十一月六日（日）午後一時から今津山中町西宮教育文化会館で開催、兼題、朝・就職・代議士・割烹着・美人。▼方正先生追悼句会が大阪逓信病院烏ケ辻川柳会の主催で十一月二十六日午後二時から大和の当麻寺で営まれる。兼題「名園」路郎先生選「毒舌」春雄選「耳」ハナ子選「思い出」草右選。投句を歓迎されている。

柳誌

▼「川柳りんご」発刊、「あけぼの」を主体に、うきよ吟社、花園川柳会などが合流、戦前の「りんご」と改題の上再出発したもの。弘前市山道町一七弘前川柳社発行。

消息

▼北川春巣氏（大阪市）は淡舟氏と岡鉄文化部秋季川柳大会に出席、久しぶりに香林氏と歓談された由。▼松江梅里氏（大阪市）は十月十三日から友人の令嬢の結婚式のため上京。▼大森娯句楽氏（岡山県）は十月一日から開設される日生信用金庫吉永支店の店舗改装などに忙殺されていられる由。「横へいな金融マンで親しまれ」▼中島紫痴郎氏（長野県）の句碑建立が来春八十の賀寿を迎えられるに当り、長野県川柳団・句碑建立委員会の主唱で計画されている。句碑は来春三月下旬湯田中温泉中島家庭前に建てられる予定で目下基金を募集されている。一口二百円、〆切十一月末、送り先は長野県中野市中町金井有為郎方奥しなの川柳社。▼須崎豆秋氏（大阪市）は大野病院へ入院加療中のところ十月二十日に退院された。およろこび申しあげます。▼若本多久志氏（西宮市）は十月十日、日産本社の会議で熱海へ。料理のまずいサービスの悪い温泉なのに人で一ぱい。消費生活が先走ることに一考させられました。「俗悪の群にまじって熱海の灯」▼高須唖三味氏（東京都）は鞍馬氏出京只来、迷亭、鞍馬、唖三味の三人会を持ち侘月唖三味居で鼎談会を持って居られる由。▼高田抱逸氏（大牟田市）の宅に

若本多久志著　麻生路郎序

川柳　親ごころ子心

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。巨匠路郎先生の柳人三百余名、集句二千余句を登載された「名園」路郎先生選「毒舌」春雄選「耳」ハナ子選「思い出」草右選。投句を歓迎されている。

柳誌

▼「川柳りんご」発刊、「あけぼの」を主体に、うきよ吟社、花園川柳会などが合流、戦前の「りんご」と改題の上再出発したもの。弘前市山道町一七弘前川柳社発行。

消息

▼北川春巣氏（大阪市）は淡舟氏と岡鉄文化部秋季川柳大会に出席、久しぶりに香林氏と歓談された由。▼松江梅里氏（大阪市）は十月十三日から友人の令嬢の結婚式のため上京。▼大森娯句楽氏（岡山県）は十月一日から開設される日生信用金庫吉永支店の店舗改装などに忙殺されていられる由。「横へいな金融マンで親しまれ」▼中島紫痴郎氏（長野県）の句碑建立が来春八十の賀寿を迎えられるに当り、長野県川柳団・句碑建立委員会の主唱で計画されている。句碑は来春三月下旬湯田中温泉中島家庭前に建てられる予定で目下基金を募集されている。一口二百円、〆切十一月末、送り先は長野県中野市中町金井有為郎方奥しなの川柳社。▼須崎豆秋氏（大阪市）は大野病院へ入院加療中のところ十月二十日に退院された。およろこび申しあげます。▼若本多久志氏（西宮市）は十月十日、日産本社の会議で熱海へ。料理のまずいサービスの悪い温泉なのに人で一ぱい。消費生活が先走ることに一考させられました。「俗悪の群にまじって熱海の灯」▼高須唖三味氏（東京都）は鞍馬氏出京只来、迷亭、鞍馬、唖三味の三人会を持ち侘月唖三味居で鼎談会を持って居られる由。▼高田抱逸氏（大牟田市）の宅に

価 150円
送費24円

川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇
大阪市住吉区万代西五ノ二五

別項記載通り電話開通したが、「電話来て見知らぬ奴も借りに来る」の句信を寄せられた。▼前川左文字氏（兵庫県）は長らく静養をして居られたが病気全快、十月一日から出勤されている。▼内海敬太氏（奈良市）は高一の学生たちで川柳野獣会を結成された。敬太氏は路郎門の川柳人内海直三医博の令息。▼藤村梨花さん（大阪市）は十月二十日午後八時二十二分京都発の列車で南九州一円の七泊八日の修学旅行に付添い出発された。▼石田沐天氏（大阪市）から四百号記念大会で先生に久方振りでお会い出来嬉しく存じました。本夕は毎日柳壇を拝見しましたが、相変らずの簡明直截の名批評振りにますます先生の御健在を思いおります。」との便りに接した。▼川雑明和病院支部の河相すゝむ、樋口舟遊、菱田満秋、本城弦月、橘高薫風子の諸氏と辻川和子さんの六名は、十月十五日から三日間、鳥取砂丘、出雲大社、皆生温泉、大山廻遊の旅を楽しまれ、鳥取句会、米子句会に出席された、各地の柳人と交歓された。▼工藤甲吉氏（青森市）は十月十日義宮様の十和田湖行きにあやかって十和田湖に遊ばれ「十和田湖の色伝説が生きて来る」の句信を寄せられた。▼直原七面山氏（岡山県）は十月五日岡山地方貯金局講堂での全官公レク岡山地区第二回川柳大会に出席「川柳作家の喜びと悲み」と題して約一時間講演された。▼速水真珠洞氏（福岡市）は十月十日霧島山脈一帯に遊ばれ、その名称の通り山々は霧の活動の激しいこと、一瞬後には雲上の人になっていますと。

慶弔

▼若林草右医博（大阪逓信病院内科医長）は十月二十三日の日本電信電話公社記念日に勤続三十年で総裁から表彰せられ（不朽洞会員・烏ケ辻川柳会員）小沢史葉氏は病室インタホーン改良考案で院長から表彰せられた。およろこび申上げる。（不朽洞会員・烏ケ辻川柳会員）▼友淵貴山氏（大阪府）は九月五日令孫出生、ゆかさんと命名された。▼尾崎芳正氏（大阪市）は胃癌のため大阪逓信病院に入院加療中、十月十一日午後四時十三分に亡くなられた。告別式は十九日午後二時から四天王寺本坊で大阪逓信病院葬で執行された。本社から路郎主幹、生々庵、湧三琴、俊（春巣夫人）、梅里、小松園、白柳、好郎、梅志、すゝむ、宏子、草右、青雄、竹荘、愛論、薫風子らが参列焼香した。

町名変更

▼長野文庫氏（今治市）の町名が左の通り変更になった。港町八丁目

転居

▼清水白柳氏は大阪府南河内郡美原町丹上四〇四へ転居。

電話開通

▼高田抱逸氏（大牟田市）の自宅に電話が開通した。大牟田局八四四七番。（薫）

不朽洞会から

▼常任理事会——九月廿四日（土）午後七時から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。出席者生々庵・梅里・栞・文蝶・古方・木客・好郎・潮花・紫香・恒明・薫風子・多久志。

一、「川柳雑誌」四〇〇号祝賀記念川柳大会に対する反省と慰労

一、会計報告其他　九時散会（多）

飛・燕・往・來

★野尻南海氏（ノールローズパーク一社宛）より

拝啓長らく御無沙汰しましたが先生御夫妻には益々御健勝の由、今回はまた誌寿四〇〇号記念祝賀大会を催されたことを川雑誌によって拝見遙にお喜び申上げます。毎月の川雑誌を繰り返し読みながら作句に精進致して居りますが一進一退で進歩のないのを恥しく思っております。八月号の足立医博の「羽田を発って」の第三信はやはり身近かなシカゴ市の記事だけに興味深く読ませていただきました。斯うした日本からの柳人を迎える事は遠地に同じ趣味に生きる私共にとっては大変よろこばしい事なのですが、まだ一度もそうした機会に恵まれないのを残念に思って居ります。今春ふとしたチャンスからハツイの築山快夢起氏と文通を交わすことになり時々に「ツイロー柳誌」を頂いて居りますが貴社の支部として活躍を続けて居られる様子を知らせて頂いて居ります。

（以下略）

すばらしい
着心地
蝶矢
シャツ
CHOYA
SHIRT CO. LTD

不朽の洞人々

三和自動車工業にて（柳市）

思案する顔へ

サクラの手が先きに

（梅里）

緑日の夜店をひやかすことを好き、想のない植木をつかまされたり、詰将棋五目並べに負けてみたり、手品の種あかし、煙草の輪投げ、とりわけ易者の説明を聞くのが好き。

「人を哀れみ品もよく芸はあれども高振りもせず　取越苦労遠慮勝ち危ぶみすぎて迷う憶病」と云うのが未年、だと説く。私はその未の年の明治四十年五月十九日生。

金泥集

選乃葭生麻　　課題「やり手」

恐縮をしながらやり手ぬけ目なし　きさ子
百坪を建ててジャンバーまだ稼ぎ　同
やり手またまた本店へ引き抜かれ　同
おだやかにやり手要所をぐっとしめ　阿茶
レギュラーへやり手の母がまきに来る　同
奥さんはやり手選挙区まかせとき　同
御養子のやり手すぎるを不安がり　小石
問い合せ母がやり手でまとまらず　同
家中がやり手の嫁に牛耳られ　同
やり手だと云われ仕事に手が抜けず　周甫
今度来た嫁はやり手だ任しとき　同
金あれば鬼に金棒と云うやり手　一栄
胡麻すって課長へやり手加才なし　同
やり手だとほめられたのに何故ひがむ　若葉
プロポーズへ返事をのばすやり手の娘　同
社交術たけてやり手にしてしまい　陽子
左前やり手の妻に支えられ　同
やり手やとおだてて役をおしつける　清子
女手で家業の巾を又広げ　同
自御共に許すやり手の預金帳　都詩子
七転び転んだままでないやり手　同
不景気もどこ吹く風というやり手　とも子
西に東に支店をもっているやり手　同
姑がやり手と聞いて娘はやれず　たつよ
あまりにも母がやり手で嫁が来ず　女
男にも勝るやり手と噂され　小菊
オシメ干す夫は妻に飼育され　ちあき
やり手だと陰口多い後家通し　酔夢
女王のようにボーイフレンド酷き使い　美喜
姉さんのやり手へ弟かげ薄し　奈良子
男にもかなわぬやり手に縁がなし　白美
やり手とは二号三号おくことか　カネ女
こま鼠のようにやりての妻動く　美音子
やり手だと母もそばから口を添え　徳子
男手をとられてからの母やり手　春栄

次回題「餅」〆切十一月末日

入院つれづれ記

西村梨里

私は今帝王切開の手術をして五日目である。上の子供のとき、子癇を起してすんでにあの世へ行く処を足立先生に助けて貰って今日に及んでいる。そのときには夜中御病気中の先生にも御迷惑をかけ、家族のものにも大分心配をかけたけれども、本人は御便所へ行って倒れたまま意識不明で気がついたときは手術も済み病院で寝ていた。同じ死ぬならお産で死ぬのが一番楽でいいなと思った位だからその間の記憶は全々ない。今度は何でも世間並のお産でと思ったが、矢張り切る方がよいと云われ切ることに決心したが、初めから知っていて切ると云うのもあまりいい気持のものではない。太田良子さんに「大ていの人は普通のお産をしはるのにね」と云うと「大ていの人ってあんた、九十九パーセントまでは普通に生まれるのに後の一パーセントに入るとは情けないね」と云われた。然し帝王切開も近頃では決してめずらしいことではない。私の知人でも切開した人もあるし、一般にも書物などで誰でも知っているのだが、まだ河内の田舎じゃ御近所にこんな奥さんは見当らない。田圃で腹痛が起ってあわてて帰って家の敷居をまたぐのが間に合わないような安産がざらにある。大きなお腹をして平気で自転車を乗り廻していたり、どうやら我々とは縁が遠い。だから家のものが近所に内証にしている。お腹を切って子供を出すなんて、どんな顔をした人種かと思われそうだからしい。

○

医学の進歩は目覚ましい。私等の知っている範囲だけでも昔想像も及ばなかったような進歩をとげている。死んだ人の目玉を生きている人につかったり、肺の外科手術だとか、心臓でさえも手術出来るし、尚これの人工のものも出来ているとかきく。それに子供を生むのは大昔から十カ月かかると云うのが、私らの素人考えに合わないような気がする。胎児を早く成熟させて、九カ月、八カ月とだんだん早く生ませる法等出来そうに思うのだが。野菜や果物だってだんだん改良され、種なし西瓜が出来たり、また早期収穫と云うことも出来ている。人間の子供だって近頃は新生児の標準目方も増えているのだから、もっと早く生ませることも考えられるのじゃないかと思う。四キロ以上もある子供も二キロいくらかの子供も同じように、やはりキッチリ十カ月しないと下へ下って来ないのだからむしろ不思議な気がする。

○

入院して来た日にガラス張りの新生児室をのぞくと、沢山の赤ちゃんが手や首を振ってオギアーオギアーと泣いている。赤ちゃんも一斉に泣くとすさまじいものだ。捨て猫がミャオーミャオーと連呼式に泣くのと似ている。看護婦さんが次々とおしめを替えたり、授乳時間になると、それぞれの母親の処へ子供を配給したり、その前後には赤ちゃんの目方をかけて、母乳の呑み足りないものにはミルクを与えたり、中々大変な仕事である。彼女達はこまめにきびきびと働いている。計量器の上へ次々と両方の手に一人ずつ赤ちゃんを摑んで乗せてゆくのを見ていると市場で何かを計っているようである。それでも授乳時間に連れて来てくれるときには、ちゃんと大事そうに抱いて来て「はい、大きい坊や、だんだん可愛くなって」とか何とかお世辞の一つも云って行く。やはり伝統的な大和なでしこである。

ベッドから空の高さを感じる日
ほめ言葉ただ大きな子大きな子

天地物壇

いのちある句を創れ

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 十月句会（大阪市）

10月7日 午後6時

会 場 ―― 大阪観光ホテル

暑さが長かったせいか、十月に入っても爽秋という感じがしないようだ。

気分なら天下一品という大阪観光ホテルの大広間だけに、柳趣とみに上がり、ホッとわが家へ帰ったなごやかさだ。

開会に先き立って生々庵副主幹から、四〇〇号記念祝賀川柳大会が盛大に厳粛に、成功裡におわったことは、川雑家族の和と力のたまものであることを述べられた。

川村好郎氏の柳話（本誌参照）がおわると、足立春雄医博のアメリカみやげ、16ミリの総天然映画が氏の解説で一時間余、居ながらにさながら海外旅行気分を満喫させていただいた。

「足立作品」というタイトルや、その一コマ一コマの字幕に氏の川柳があるのも柳人医博らしく、しかもその風景にマッチする音楽が録音され、まったく堂々たるものである。カメラの位置や移動撮影など、いうなればグランプリ。

32年10月句会で同じ逓信病院の尾崎方正医博の欧米みやげからちょうど三年目の十月句会である。シーズンにふさわしいデラックス旅行だった。

兼、席題の披講がおわって、路郎主幹が「テーブル」の披講をされる前、四〇〇号記念の九月号が好評だったことをよろこばれ、お元気な声で披講をはじめられた。静かな会場でその一句一句に耳をかたむけるところ、やはり秋である。

最後にのこった一枚の句箋、その一瞬、なみいる柳人が固唾をのめば、主幹もすこしマをおく名演出。結果は不二田一三夫氏が十月の不朽洞賞楯をにぎる。

会場を出ると道頓堀の夜景だ。会場横の川面はネオンがいっぱい。

地方の柳人諸氏は、さぞうらやましく思われることであろう。（F）

出席者―路郎・圭井堂・柳志・静馬・薫風子・三司・紡毛・水客・すゝむ・大丘子・舟遊・生々庵・敏明・梅里・文秋・瑞歩・いさむ・紫香・南宗・水京・庸佑・堰子・繁雄・一栄・清子・一三夫・梅志・春雄・史葉・某人・徹也・一瓢・柳宏子・正一・牧人・好郎・高史・多久志・古方・満秋・旅風・潮花・いわを・阿茶・小松園・宏子・葭乃

兼題「テーブル」 麻生路郎選

ご馳走はないがテーブル笑い合い 失名
咳まぜて披露の卓を司会する 紡毛
テーブルが一つ私が社長です 満潮
テーブルの陰で割勘ソット出し 井平
テーブルスピーチ苦労人だと思わせる 多久志
テーブルを一家で囲む灯がともり 潮花
テーブルに誰が挿したか愛の花 狂二
テーブルの隅で祝辞を述べるはめ 三司
テーブルに両足揚げたままハロー すゝむ
真中のテーブルで飲む大ジョッキ 祥男
テーブルの煙草失敬してかえり 一鶴
子の勉強止めさせ夕餉の卓が出来 弘村
鯉料理まではテーブルよく回り 瑞歩
喋るなとテーブルの下でこっかれる 蘭
テーブルは順序不同と言う若さ 博一
テーブルをはさめば労使対立す 夢虹
テーブルの空くのが待てぬ子沢山 圭井堂
テーブルで食うお刺身の粉山葵 夢虹
おとなえばテーブル一つ〝けの店 圭井堂
テーブルスピーチ不肖不肖がまだしゃべり 一三夫
テーブルの端はみみヤムシャ食うばかり 多久志
弁爽やか卓上の水顧みず 八九寸
客筋が違いテーブル掛もかえ 一瓢
テーブルをはさんで腹の子の話 満潮
テーブルマナーどうあろうともぎつちょなり 一三夫

兼題「貯 金」 正本水客選

マネくその貯金引き出す相談し 失名
子の貯金コッコッ貯める頼母しさ 梅志
旧姓のままにして置く貯金帳 柳志
寝る前に学校の貯金を見せに来る 舟遊
共稼ぎやっぱり貯金出来ぬまま 一栄
貯めて貯めて貯めて我が道をゆく 生々庵
貯金して此の娘も尻に敷くつもり 堰子
お隣りを真似て見たいは貯金だけ 正一
貯金出来かかると医者にすぐとられ 一三夫
男もうこりごりですと貯め続け 堰子
貯金よりどうやら月賦族らしく 古方
あしたまで箱に入れとく子の貯金 旅風
秋は嫁く仕度へ貯金惜しまない 潮花
貯金してるらしい子供によけいやり 多久志
妻と旅に出るための貯金をしましょうか 古方
がめつう貯めて遺産へ泣きに行き 一鶴
十円の貯金通帳に利子がつき 敏明
若さ未だ貯金をする気はないと言う 祥男
気がひける程出し入れのある貯金 三司
パトロンに貯金していることがばれ いさむ
出し入れのはげしい貯金帳で無事 水客

兼題「非常口」 菊沢小松園選

非常口開いただけで済んだ事故 八九寸
非常口平素はかとも口にせず 繁太郎
非常口せまく建築許可おりず 奈良子
非常口追い出すように映画はね 柳志
ややこしいとこについている非常口 すゝむ
非常口出てから自分を意識する 一栄
非常口どこか事件のにおいする すゝむ
非常口今日も無事なり水を撒き 梅里
ちょはちょはの入りで静かな非常口 牧人
申訳けのように非常口と貼り 柳宏子
非常口こんな所へ吐き出され 梅志
苦労性非常口をば先ず覗き 与呂志
太陽がまともに沈む非常口 水客
非常口を先ずきいておく泊り客 阿茶
非常口大掃除だけに使われる 水京
持ダネは非常口から出してやり 柳志
非常口錠も扉もさびたまま 好郎
非常口あける心がつかなんだ 一栄
非常口犬が用足すだけでよく 正一
非常口役に立たない慌てよう 清子
非常口女の方が先になり いわを
鍵あける人がまだ来ぬ非常口 南宗
非常口非常の際は忘れられ 一三夫
非常口あけないさきに火が回り 梅里
ベビー靴片足おちてた非常口 梅里
うろがきて鍵がわからぬ非常口 一三夫
非常口生命尊きものと知り 敏明
恋してる娘が非常口知っていた 夢虹
逃げる気はないがありゃ非常口 正一
非常口無いやないかと焼けてから どんたく
非常口乗り越えられぬ程に酔い 堰子
矢印のとこの非常口錆び付いて 小松園

兼題「わが家」 戸田古方選

人の波ひいて月下に家なき子 八九寸
借金がまだまだ残っていてわが家 阿茶
抹茶一ぷくせまいわが家の庭もよし 梅志
夕食もてれこてれこわが家無事 好郎
あけすけにわが家の暮し綴り方 三司
病床でわが家の狭さ意識する 紫香
わが家の一大事若い母が出来 水京

わが家が建って亭主を惚れ直し　紡毛
この辺がわが家であった塀堂筋　堰子
重なって寝てもわが家の足が伸び　敏明
酔眼へしかと映ったわが家の灯　奈良子
わが家は父祖伝来の養子筋　梅里
病人があってわが家の灯があかし　水客
ある日ふとわが家も老けたなと思い　某人
二階借りこんなわが家に気がつかれ　一三夫
わが家になれば気になる風が吹き　柳志
ふりきって帰ればわが家戸が締り　宏子
秋風と月がはいって来るわが家　潮花
物売りも空巣も来ないわが家なり　梅里
気がつけばここはわが家の床の中　どんたく
四季のあるわが家に母のたたずまい　舟遊
妻に子に嫁にわが家の笑い声　すゝむ
悪人の居ないわが家で臍を出し　梅志
わが家を目ざす足なりちびていず　古方

席題「旅先き」　足立春雄選

旅先きで手形を落す湯につかり　梅里
旅先きの開放感や厚ぶとん　徹也
旅先きの事とて女房用捨せず　多久志
旅の下駄妻にはすまん土を踏み　柳志
旅先きは夫だ独身でおし通し　清子
旅先きの浮気は桐の間まで進み　徹也
旅先きの夫の手紙やさしすぎ　好郎
旅先きでくつろいで来る子沢山　阿茶
バリーから葉書近所へ見せ歩き　静馬
旅先きの写真女房をちと妬かせ　正一
旅先きで日本はせまい人に逢い　文秋
旅先きで飼育亭主は人心地　阿茶
旅先きへ定時にうちから電話が来　静馬
旅先きで判った母のありがたさ　満秋
旅先きで童心にふれこけし買う　文秋
旅先きの話はすこし嘘も混ぜ　旅風
旅先きに電話がとどき父となり　舟遊
旅先きへ社用のツナに追っかれ　史葉
旅先きで証拠の絵葉書送っとき　庸佑
旅先きで賑やかすぎる婦人会　紫香
旅先きで寄り道をした事がばれ　いわを
旅先きで雨の有難をしってくる　旅風
旅先きの気安さ記者に利用され　正一
旅先きで昔新地の妓に出合い　三司
旅先きで大阪弁の連れが出来　牧人
旅先でつまらぬ芸を覚えたり　瑞歩
借金の苦面旅先き落ち付けず　いさむ
旅便り妻にも殿と他人めき　三司
旅先きのことでと無心ことわられ　梅里
妃殿下の名で旅先きの宿で痩せ　一瓢
旅先きですます無沙汰の筆をとり　すゝむ
旅先きでさえもこせこせ言う夫　圭井堂
下駄の緒がゆるく旅先き月が出る　某人
連れてくれやよかったのにと旅の宿　瑞歩
元旦を旅先きでする味気なさ　梅里
旅先きの夫婦気取りが板につき　牧人
旅先きの法螺が閣議を覆えし　圭井堂
旅先きで小出しに送る原稿紙　一三夫
旅先きへギョットとするような子の手紙　春雄

席題「本心」　西いわを選

本心を打ち明け弱点つかまれる　一三夫
本心を隠し前身をも隠し　南宗
諦めて次男に店を継がす腹　圭井堂
ここからが本心というペンしぶる　水客
本心を知られたくない煙草の火　旅風
本心を言えと半端な酒を酌ぎ　水客
本心を聞きに市電に乗ってゆく　某人
酔うてましたと本心をまだかくし　潮花
本心を打ち明けられて気が変わり　清子
本心をちらちらさせる手をつかい　旅風
本心をこんなとこまで来て話し　古方
本心を明かせばその後寄り付かず　小松園
本心を聞けばやっぱり惚れている　南宗
本心を互いに秘した目の動き　紡毛
本心と別なお世辞を言うつらさ　清子
本心はやっぱり金が目当てなり　繁雄
本心を易者見抜いたように言う　三司
一合の酒が本心喋らせる　春雄
別れ道女は本心まだ言わず　舟遊
月かげり本心という手を握る　徹也
二次会へ来てから本心打ちあける　紫香
本心が物欲しそうな顔にする　すゝむ
本心と別に癒すと言うお医者　一瓢
本心を知らす舞台はにじりより　一三夫
うっかりと本音を吐いて逃げられる　静馬
本心を捨てに渚の砂を踏む　潮花
本心を聞いているのにまだだまし　南宗
本心をうっかりしゃべりかつがれる　いわを

席題「長話」　吉田圭井堂選

手荷物を置いて話はまだ続き　南宗
かんじんなことを忘れた長話　小松園
話もうやめともいえずあくびする　舟遊
長話いつの間にやら雨になり　すゝむ
女同士時計見ながらながばなし　阿茶
長話まだ続いてる寺がえり　清子
長話司会者立ったり座ったり　好郎
降りそうな空を見上げて長話　一三夫
座布団を折ってしもうて長話　紫香
ああでもないこうでもないとまだ喋り　庸佑
結論はとうに出ている長話　多久志
長話お茶いれ替えていれ替えて　牧人
長話相手の欠伸見て悟り　大丘子
すき焼が煮えつまってる長話　いさむ
ネクタイを少しゆるめた長話　某人
宿の旅年増女中の長話　春雄
犬猫小鳥妾宅の長話　史葉
長話もう保険屋のペースなり　徹也
要件を切り出す迄の長話　春雄
くしゃみしてやっと別れる長話　南宗
講師まだ来ず挨拶まだつづけ　好郎
長話明治大正昭和まで　瑞歩
子に飽をしゃぶらせといて長話　柳志
東北弁と大阪弁の長話　史葉
おごられたのろけ話の長いこと　一三夫
手をひいた子にせかれてる長話　庸佑
栗焼いて話題の尽きぬ夜長なり　牧人
しびれ切らして何聞いたやら長話　一瓢
長話猫の毛なみにまで及び　三司
長話まだ商談に触れてこず　好郎

本社句会　**全出席者**（十月現在）

多久志・柳宏子・満秋・薫風子・紫香・一三夫・舟遊・文秋・静馬・阿茶・庸佑・圭井堂・すゝむ・旅風・三司・徹也・宏子・虔乃

不朽洞賞受賞者

栗・いわを・柳志・菁風・保奚・南宗・徹也・潮花・一三夫

天位受賞者

⑥一三夫④阿茶・牧人③夢虹②菁風・徹也・三司・潮花・梅志・南宗・梅里①栗・永断・与呂志・好郎・和楽・静馬・良子・奈良子・いわを・紫香・狂二・すゝむ・柳志・多久志・舟遊・晃・淡舟・正一・保奚・日満・水客・敏明・旅風・文秋・井平・梨花・高史・庸佑・満秋・玲人・柳宏子・春巣・恒明・どんたく・史風・新子・美恵子・万楽・亜鈍・いさむ・堰子

お人よしひとりにされて長話　静馬
記者連がいら立つ別室の長話　生々庵
長話とぎれすかさず席を立ち　文秋
長話　褌の芯から冷えて来る　潮花
長話のろけと愚痴と棚卸し　梅里
長話又ライターを貸して呉れ　柳志
又年令の事に戻った長話　某人
時計ばかり見てる相手へ長話　多久志
明日の日が有るとは知らぬ長話　敏明
長話一ぺん受話器もち変える　柳志
長話覚悟を決めた座りよう　旅風
長話時計止まっていてあわて　南宗
三度目のお茶でほっとく長話　正一
長話何しに来たか忘れとり　満秋
長話してても居てほしいひと　潮花
ええかげんにしろと揉めてる赤電話　梅里

川雑 淀川支部句会（大阪市）

木村水堂報

低姿勢家庭にまでは持ち込めず　三十郎
口止めをしてから話に実がはいり　赤舟
口止めに飲ませた酔いがみなしやべり　一鶴
その口に鍵を掛けやと念押され　灯子
口止めをしてもせんてもだやに洩れ　陽子
口止めの札を手ずり読んで見る　句念坊
口止めをされた幼児の眼が示し　三舟
口止めをされて苦しい顔となり　さぎす
肩こらぬ用にでかける替ズボン　水堂
替ズボン去年の恋の砂こぼれ　清生
のんだくれ昔の清い恋おもう　義雄
のんだくれ笑えば笑うたと怒り　東洋男
自動車もポリも恐れぬのんだくれ　幽谷
宿命の子も負わされるのんだくれ　若菜
のんだくれタンカを切って喋てしまい　尨村
交番で子を思い出すのんだくれ　香林

川雑 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

銀行員他人の金に疲れ果て　満潮
四階に住んで足からくたびれる　白柳
紋付も俺もすっかり草臥れる　晃
殿方はご遠慮下さい下着ショウ　玲人
男性を口惜しがらせた日の試合　言也
赤旗の要る日がやって来た不幸　凡路
ハッパする鉱山赤旗に歌がなし　唯義
雪男の謎ヒマラヤはまだ閉し　生薑
土壇場へ来て怪物が顔を出し　利男
怪童の噂角力が買いにくる　良
怪物を払う鍬杖ウッと鳴り　太路
飲む話みな文無しとはショック　すゝむ
少年のショック帰らぬ伝書鳩　角風
ショックですお医者はいとも平気　三舟
あん膵器の軽いショックを言うてかし　牧人
お見合の不首尾のショックママの方　恭治郎
ショックから笑い忘れた人となり　旅風
かびくさい二階療利の高いこと　清人
あのおっちゃんかびのはえそうなかお　慎太郎
きれい好きかびの句を探し出し　竜昭
かび生えた糊でクイズの切手はる　粉洲
アカ族をもつに鉢巻とはおかし　海志

川雑 阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

ダッコちゃん黒のブームに乗った顔　文秋
ダッコちゃん抱いてさっさとシャンペンなし　義介
石運ぶ古代ローマは蟻に似る　生薑
白蟻に飛鳥文化があわてたり　一三夫
墓石の大きな蟻をいたわりぬ　白柳
手を組んでハンドバッグもリズミカル　美智子
何もかも躍る若さのリズム感　すゝむ
欲清はリズムで踊るハイヒール　亜純
カラコロのリズムが残る浄善寺　生薑
口笛と合う自転車を焙むリズム　薫風子
滅亡へ駆りたてて行くリズム聴く　晃
あやふやな態度を妻は見逃さず　光福
思った程あやふやでない世間　楚行
あやふやな気持で選う臨時工　小松園
どさくさへあやふやで云うてとなられる　奈良子
この人はあやふや犬の瞳はたしか　三窓
鯉の群落葉の波紋へ寄ってくる　山椒坊
親蛙子蛙波紋亟白く　若芽
フルシチョフ月へ拡がる波紋投げ　形水
波紋大きく逃がしたかとはもう釣れず　堰子
もみけすに余り波紋が大きすぎ　庸佑

川雑 玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

案内状とにかく出しておきまほか　凡九郎
気安さは案内なしに上って来　清子
サーカスのドル箱病気して慌て　春草
ドル箱の猿を背中に村を行く　義介
膝折って苦情聞いてる里の親　一栄
膝詰めで否応なしに押切られ　柳宏子
へらずロたたく一人に皆無口　清
へらずロ病床にいて達者なり　守信
へらず口の一言胸に突き刺さり　六竜子
へらず口言い合う中でうまが合い　水京
団欒の中に親子のへらずロ　文秋
負けたのがはっきりしてへらずロ　白柳
へらず口言わにゃ本当によい男　正一

川雑 ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

死ぬる迄嫁に杓子がまかされず　斧平
慾のない奴だと軽く扱われ　平八郎
死にたいと言うて矢張り薬のみ　万里歩
あの世まで極楽浄土と慾を言う　泉水
表彰杯勿体ないが祭酒です　揮山
食慾で行こう性慾錠をかけ　暁舟
慾言えば労資協調ストはせず　周防
慾張ってためても持ってゆかれまい　東津子
移民の手あれて表彰はめてくれ　旋風
慾張るは五輪大会旅費をため　玉屋
表彰式代理を送る新仏　紅渓
家族みな個人会社の慾がつき　銀水
煩悩の慾払えども払えども　エス子
悟っても娑婆の世渡り慾ばかり　萩路
請縁りがあるので姑を大切にし　内海
詐欺漢のわなにかかった慾の皮　弦月
表彰に乙が抜かれて甲が落ち　紅茶
食慾はまだ極楽に程遠し　浅太
あれもかと表彰状が頂しかめ　風草
表彰をされて周囲の眼がきつい　快夢起
慾を言えば背丈がほしい十センチ　峯円
贅沢な慾に聞手は腹を立て　須磨子
強慾の遺言石碑は要らぬぞよ　柳葉

川雑 西宮支部句会（西宮市）

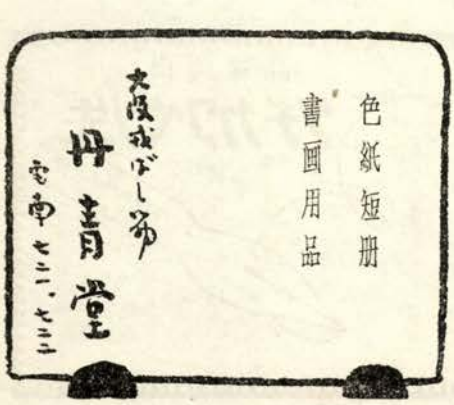
若本多久志報

幽霊に出るはどうらみごと並べ　生薑
エロ本に出ている女性の心理学　敬太
貸す心理借りる心理の首の位置　和三郎
兄もまた父と同じこと叱り　満秋
姑の心理を里の母に聞き　寿栄
浴衣着て窮屈そうに歩き出し　鮎子
幽霊が幽霊におびえるアルバイト　啓子
老いて子に従い流れにさからわず　弦月
三割を引いて浴衣地少し派手　三舟
浴衣がけやからと近所をさがしに出　舟遊
打者の心理うまく攪んだストレート　すゝむ
灯籠は流れ念仏だけ残り　一ン十
新らばかり着ている兄が文句云い　静馬
野球終る流れる雲はすでに秋　牧人
心理とは別に女体の不可解な　多久志

川雑 備前支部句会（岡山県）

永松東岸報

政治的解決をする酒になり　胡風
台風が政治の貧困さを笑い　真奇
母ちゃんが毒見をしてる夏の飯　芳月
お祖父ちゃんが毒見をすると先に喰べ　竜泉
就職もきまり虫の音心地よし　明良
新聞も読みづらくなり流行語　草二
流行語一ぺん言うて忘れられ　輝次
左利きとは知らなんだ嫁が来る　久米雄
虫の音も聞えずつんぼは窓をしめ　秋月
人妻に見えぬ若さをほめて飲み　幸仙
人妻の過去にはふれず窓をあけ　流風
調理台毒見のようにチョイと舐め　万女
客の前毒見しますと他人めき　三六



好物の酢の物お毒見程盛られ　美音子
子の薬毒見のつもり飲んで見せ　輝次
流行語使えばとしを尋ねられ　博
東京の家でもやはり雨が洩り　あやめ
河豚料理毒見はしたとすすめられ　一声
学連の休暇流行語をしゃべり　美舟
風鈴と虫の音があり僕の夜　東岸
虫の音を夜なべの友に針仕事　木仙
パチンコへ体をねじった左利き　正州
虫の音をとめて恋人来る気配　基司

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）　直原七面山報

人工衛星が見えて踊りの輪が崩れ　只世
宋っ子をお孫さんかと失礼な　喜楽
あせるなと教えて呉れた千切れ雲　ちとせ
仲人もあいそつかした娘の希望　賤女
窓ガラス自分の猫背見て歩き　竜児
ままごとのように子のない夫婦住み　美沙
吹く風も陽ざしも秋の色になり　山茶花
瀬戸黒を愛でて小雨の小半日　すみ子
台風は無かったように蟬が鳴く　ごん太
かたくなな心にしみる秋の風　天童
何一つ不服も云わぬ子の寝顔　秀宝
鈴虫に波止場の恋の影が消え　房子
百薬の長と云われる酒に死に　生蓋
ぼろかすに馴れたか女房太りだし　周甫
追憶を払い払うて今日に生き　酔天
警棒が一足さがるのんだくれ　天仁坊
台風に連絡船も一休み　静湖
朝顔が頼った竹に赤とんぼ　柳谷
君が代を教える教師にある迷い　信心
信心が迷い初めて家も売り　杏
俺の子もやはり持つた意地っ張り　漠太
意地悪を婦人会長に祭り上げ　武蔵
意地張ってそうた女房が鼻につき　宰子
カンナ屑燃す手に秋の陽がかげり　七面山

川雑　**広島支部句会**（広島県）

父親の悩みを知ったひとり言　方川
会葬のうしろの方は雑談し　二三夫
見栄を張る自慢が近所を敵にする　上利
会葬へ成功した子だけが抜け　美文
腹いせを蒲団の中でひとり言　大名
生前の人徳意外な会葬者　浄真
天才と自慢した子がぐれはじめ　昌幸
ひとり言ですとはなめた受け答え　一荷
良妻と自慢してみる恐妻家　洋児
会葬に代議士連は名をつらね　吐川
会葬の友の若さがまた泣かせ　越舟

川雑　**京都支部句会**（京都市）　田中烏雀報

ダイヤピカリ黒手袋の目をとおり　つる子
言葉過ぎた四五日ゝ黒い距離と后る　司郎
眼蓋を閉じたらそこに黒い世界がある　喜由
思いやる母は寝返りばかり打つ　幸男
思いやりを自嘲の鼻が受けっけず　礫
金そのものが図星である争議　正夫
図星ですだまってひげを剃っている　ゆきら
図星ざされて惚れてェへんと云う　烏雀
鍋のもの煮えて孤児なる名を消せず　藻介
すき焼を煮え話らして女客　和三郎
ニカワ煮る匂いの中の女絵師　紫蘭
豆を煮る上手な妻の立話し　晴芽
星蹴ら明日の天気へ気をもませ　美佐緒

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）　野村咏平報

友情は勝った選手の先に泣き　光郎
社交の下手な選手で埋もれる　魯木
特売デー予算忘れて使い込み　花江
使い込んでからずぶとき取りもどし　酔羊
使い込み僅な金も噂され　美代
使い込みみんな女の故にする　味平

川雑　**松江支部句会**（松江市）　梶谷冬生報

絶景の場所でドライブ車止め　祥月
死の影が見晴らし台へまで続き　晟人
見晴らしがよくていつもの旅館へ来る　叮紅
几帳面な性格だった父を恋い　章道
几帳面すぎて世間を狭く生き　妖人
変人と云われるほどの几帳面　好江
家中の笑いの中に子の手真似　孤呂二
状況の変化を手真似で教えられ　冬生

川雑　**篠山支部句会**（兵庫県）　酒井ひか平報

選り抜きの選手ローマへ勢揃い　凡石
忘れたい人がネクタイ選ってくれ　青峰
大阪で選って来たのに隣りも着　美千代
一服をすればまた出る底力　泰子
一服の合間をかりて西瓜割る　孝風
一服をキチキチ機械になり下がり　可住
お出かけのおしゃれ主人のぐちが飛び　初穂
六十になってネクタイ気にし出し　みのる
デモの娘と見えぬ和服がよく似合い　澄世
おしゃれする楽しみを母も知り　ひか平
人ひとり愛する為におしゃれして　享子

川雑　**宇部支部句会**（宇部市）　津秋六花報

筋書を違え客席ヤジになり　天作
筋書を読んで一役買って出る　佐吉
皆様に謀ると筋書出来ている　山峰
コロッケがのどにつかえた不意の客　竜山
コロッケも下手な女房で口達者　豊年
コロッケ屋男世帯へ一つまけ　六花
邪心など捨てと教祖にある邪心　実男
飲め飲めと邪心あるのがついてくれ　粋歩
曇りなき鏡邪心をあわてさせ　万年青
落ちぶれていても邪心のない青ち　千粒
電車区の無事故を担う竹ばしご　弘道
はしご乗り冨士を逆さに出初式　良馬

川雑　**米子支部句会**（米子市）　小西雄々報

割勘が五円のつりをゆずり合い　一机
夏痩せ案じる母のような人　天邪鬼
冷戦に家裁の方があてられる　無閑
手をにぎる二人へ気付かぬ映画館　鶴丸
金よりも時間を告げて座をはずし　一保
病んでから保険の掛金惜しがらず　精耕
出せるだけ出して女のニューモード　詩郎
デモ隊に加わり東京見て帰り　幸子
子が病んで賽銭のいる日が続き　明甫
斜陽族もって頭痛に鉢巻きし　ユリ子
高校の軟派が今は名医なり　三舟
早打ちの花火の数を子等かぞえ　福女
天高く山の彼方の人想う　康女
鼻唄で二人で帰る盆おどり　枯石
解散は近し減税すると言う　雄々
税務署のサービス納期の再通知　千種
サービスが良いはず婿に迎えられ　不二郎
サービスが過ぎて主人に睨まれる　酔魚
サービスの良い子が先に暇を取り　文鳥

川雑　**名古屋支部句会**（名古屋市）　野田一念報

理髪屋で禿へ香水かけてくれ　渡辺三乗
押売りは押売らしい面かまえ　夢丸円
押売も家には妻子待っていた　隨円
押売が押売せぬとおどしとり　明一水
押売の様に募金の羽根をおき　瑞雲
残る子を案じ親は株を買い　千代春
おぼろげにブックに残る青春記　越島
残るほど仕入れて見たいダッコチャン　中野
旧友はハッピ姿の火事見舞　お見舞を出して返しを待っている　千明
見舞待つ心のすみにあの人を　清流
手ぶらでは行けぬ見舞は遠慮する　一念

雑川

高知支部句会（高知市）

大西迷窓報

雨の日は忘れて遁る滝しぶき　雀酔
いたずらに相手本気に怒って来　句念坊
いたずらっ子昼寝で保母さん息をつき　千代
いたずらにしてはと折れた花を抱き　あき子
いたずらは母が居るからしています　かつみ
叱られる程のいたずら面白く　利雄
いたずらがしてみたくなる程の美しさ　省吉
夏の陽が痛い洗濯物を干し　康裕
石けんの多量が姑の気に入らず　千佐子
夜すすぎに行くと彼氏に知らせとき　呑洋
女房の洗濯ごとに愚痴を聞き　蟠蛇
しまい風呂洗濯もして母であり　とし
今日も又洗濯物がひるがえり　百日紅
洗濯をするには惜しい上天気　博理
安堂へばあちゃん洗濯引き受ける　利子
忘れものしたよにとんぼ又とまる　俊一郎
寺裏のとんぼも寂しそうに舞い　迷窓

杏林川柳会（大阪市）

生々庵居

手放しの涙へ主治医立てもせず　阿茶
手放しで泣ける妹がうらやまし　一伸
手ばなしでほめられ仏こそばがり　生々庵
しきたりを離れの祖母に聴きにゆき　珊枝郎
しきたりが十九の娘を家出させ　太希志

歩いても歩いても峠近寄らず　瑞川
どう歩いて来たかも知らず二人連　玉青
伴へは本音も吐けず伏せておき　一哲
高びしゃで癇癪持ちは本音吐き　馥乃

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

組立ハウス寝台セットも入れて見せ　宏子
一人旅遊び友達が出来て居り　竹志
ご自慢の高台水のない日照り　草右
炎天に糸瓜も萎えて陽が透り　没食子
炎天のローマに上る日章旗　夏生
ペラホンヲ聞きたし炎天の列に入り　史葉
うたたねのビシビシうつて猫の耳　風船堂
前歴を云うてひとな売りに来る　兎風
前歴が隠せず残る顔面の傷　よしを
前歴はどうあろうとも好きは好き　竹荘
前歴を秘めて議長の椅子に座し　幸男
前歴が判って敬遠され初め　春雄
コマーシャル女狙ったしゃべりよう　春巣
コマーシャル汐時ちゃんと心得る　愛論
コマーシャルうちのテレビも写ってる　蕗児
挨拶の中にもコマーシャルのぎき　没食子

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

内幕を知られながらもこの強気　柳波
内幕のその内幕を女将知り　亀心
得意先だとお腹の虫に云いきかせ　理休
チケットは文鎮代りの釣をのせ　留鈍
おおような様で釣銭チャンと取り　狂史

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

音もなく夜行の車掌通り過ぎ　鳥荘
夜行から夜行でかえる若さ持ち　宏子
週刊誌そのままおいて夜行降り　みなぎき
年寄を夜行で送り眠られず　光治
夜行列車の時刻も刑事知って居り　圭水
夜行の旅あたら絶景寝て過り　雄声

ウィスキーがあるさと夜行の窓をしめ　路郎

帝化川柳会（大阪市）

谷沢好祐報

母ちゃんの小言年中無休です　孝夫
小言もう馬耳東風の馬券買い　風柳
病気よりましだ明日から叱るまい　晴暉
伝説の水のいわれをバスガイド　蒼芒
水ききんざあます族も馬穴さげ　耕山
水加減未だに出来ぬ新世帯　雄水
降って水照っても水になやまされ　好祐
水の音まな板の音朝の母　京一楼
電化してなお駅長のウォルサム　九柴
惨劇の部屋で生きている古時計　雅堂

明和川柳研究会（西宮市）

桶口舟遊報

生活の空間に壺一つ置かれ　晃
窓閉めて暗き想いを壺といる　すゝむ
壺を撫でながら蘊蓄かたむける　菁風
日旺の子と蛸壺をあげにゆく　千尋
花枯れて壺は素顔をとり戻し　新子
寝返ってみても興奮おさまらず　弦月
寝返りの足へ畳がこころよし　杏花
留守頼む隣も留守になる旗日　大丘子
留守勝ちにつりお隣も不如意らし　梅志
人生はドラマとちょっかいさんも云う　泰
申し出た輸血の主の細いこと　正司
兄弟の血が兄さんへ加勢する　舟遊
焼き継ぎの皿は十人前の底　黙平
鯛網の宿大皿で鯛が出る　牧人
魚河岸の指が動いて値が出来る　十悟
白魚の指薄倖の君なりし　夢虹
迷うた目の恋文ペンがよく走り　三舟
恋文の何かひと言書き忘れ　薫風子
恋文を黙って渡す母の勘　旅風

たけるべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

縁談へ先祖の墓がものを云い　喜楽
泥酔の財布妓のひざへおち　賤女
咳一つなきまま遁夜の席がふけ　只世
目盛まで飲ます薬は骨が折れ　ちとせ
総立ちの目が追うている大飛球　素古平
自家用車の方がゆずった細い道　山彦子
世渡りの下手な見本を兄がみせ　秀波
炊飯器の目盛り違えてするかゆ　香雪
腹当のままで飛び出た孫を追い　美舟

倉吉川柳句会（倉吉市）

大前鳴恍報

浸おった母の遺物の見本帳　柄露
落ちぶれて社会の隅に小さく生き　流水
隅っこの意見は痛いことを言う　法泉子
会場の隅でさんざん野次が飛び　布堂
常連が今夜も来てるバーの隅　佳鳴
隅っこに下戸しょんぼりと一人いる　溪泉
録音に涙の声も入れてとり　天邪鬼
ふる里をきかれみなし児涙ぐみ　武夫
ハンカチで目頭おさえて借りていに　幸子
高島田母の涙に顔をふせ　鶴子
意見より涙の方が身に応え　一保
退院の挨拶涙先きに立ち　千代美
娘の涙やさしく母は膝に吸い　菊水
あきらめて居ても涙をさそう月　素瓢

酌よし　千日前大劇裏　TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下　TEL(77)〇一四七
梅里の店
大萬
★大万川柳（第百十七回）を募る
兼題「味」　路郎先生選
締切・十一月十五日　五句以内
発表・十一月廿一日　（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ一〇　大万川柳会宛

路郎メモ

★樺美智子が殺されたと云っては大騒ぎをし、浅沼稻次郎が刺殺されたと云ってはゴッタ返えすばかり。何んたる醜態そやと云いたい。次は君だよと云われたら蒼い顔をするくせに、不幸は他人の上にのみ来るものだと思っているから、よって来る根源を絶やそうとはしないのである。

★一女性の死も、一党首の死も、来るべきものが来ただけである。遺族には同情にたえないが、本人等は遺族の意志に反してその死を甘受しているのだ。殊更になげいているのは第三者でしかない。それだけにそうした惨事は直ぐに忘られてしまい、次のギセイ者を迎えては、又また大騒ぎをし、ゴッタ返えしを繰りかえすことであろう。バカバカしい話だ。昔、朝日新聞の「天声人語」を書いていた釈瓢斉は詳しくは考うべしと云ったが、一女性、一党首の死に対して、首相以下右へならえでもっともっと考える必要があろう。

★明日は衆院が解散するというから、又次の選良を選ぶことになるが、真に民主政治をのぞむのなら選悪を選ばぬことである。この際「ほとぼりがさめたつもりの立候補」というようなスネにキズ持つ候補者なんかはテンで相手にせぬことである。

★首相の云う所得倍増論などは、数字のマジックに過ぎない。所得が倍になっても支出が倍にならない保証はない。むしろ貧富の差が甚しくなって、一般大衆が苦しむことになろう。首相というものは自民党の首相や財界の首相でなく、庶民の首相、我れ等の首相であって欲しい。

☆今のところ、私は私自身の周囲の貧乏や病魔や、暴力を最少限度に排撃して川柳の中に安住している。そんな話を聴きたい人にはつとめて時間を割きたいと思っている。

★淀川句会・11日（金）六時、題忘れる・胃袋・ジャズ、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★宇部句会・6日（日）一時半、題、ハネムーン・改装・連続・鋏、所宇部市営バス沖ノ山終点前興炭労会議室。★かがみ句会・2日（木）夜、違反・才能・奇蹟・中止・自由、所、池田古心居。★玉造句会10日（木）七時、題、下火・メモ・約束、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★昭和研究句会、13日（日）一時、題、並木・病み上り・夜長、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★倉敷句会・5日（土）六時、題、評判・誘う・顔色・料理・他人、所、水島弥生町四ノ三一椙原一善居。★阿倍野句会・16日（木）六時、題、公約・鰻け・紅一点、所、旭町二丁目金塚会館、★南海電鉄句会・17日（木）六時、無事故・解散・傾上げ、所、難波親和クラブ。★西宮句会・18日（金）六時、題、疲れ・抜く・地図、所、阪神西宮駅北出口スグ市立労働会館。★にしなり句会・20日（日）六時、題、音・血圧・甲斐性、所、玉出新町遥一ノ一一後藤梅志居。★弓削句会・月末〆切、題、足跡・雑詠二十句以内、所、岡山県久米郡久米南町下弓削四五四直原七面山居。★京都句会・16日（木）夕、題、枯木・置忘れ・幸せ、所、四条縄手仲源寺。★米子句会・13日（日）一時、題、鳥・世論・借用、所、米子市公会堂和室。

柳人交歓年賀廣告を募る

新年号へあなたの年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月七日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

★秋も深まった。お互いに深思し、一句でもいのちある句を残そうではないか。（路郎）

★十一月の会　★川雑支部

東野大八著

流風 人間横丁

価二百五十円 送費三二円 B6型

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。随処に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★出版予定日・昭和三十五年十一月中旬・五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★ご送金は川柳雑誌社振替口座七五〇五〇番をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

高鷲亜鈍著

詩川柳考

B6型函入　定価三百八十円　送費三二円

▼著者は曽て創生期ごろの超現実主義者であったがその詩論は詩人の民衆的立場を要請した／今は柳界にあって庶民の詩人的自覚を促す／ここに川柳雑誌社が誇る現代川柳批評家として世に送る／凡そ前向作家を自負する柳俳人絶対必読の書

★出版予定日・昭和三十五年十一月中旬・五〇〇部限定版につき御申込は早く。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

川柳雑誌社

発行所　大阪市住吉局区内 万代西5丁目25

振替口座大阪75050

電話 大阪 ㊥ 6081

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

11月号発売中　130円（〒12円）

特集
新らしく許可になった食品添加物
イノシン酸ダ…ー ビー開幕
ぶどう糖の利用とその将来
海外酪農界の動向

◇

ぶどう糖工業の問題点
新添加物について
容器硝子の性質
米国の包装機業界の近況

◇海外情報　◇特許告知板
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・酒類・添加物

大阪市北区本幅町5 5 4 電(34)5231—4　食品と科学社　振替 大阪6702番

麻生路郎著

好評噴々

好川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。

この著者は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。

句の方より実はその鑑賞の方がなかなかうがっていて、一段に読ませる魅力がある。

価二五〇円　送料三二円　B6版　二五〇余頁

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
電話 大阪 (691) 六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

あなたの句帖が出来ました

★路郎好みたけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。

名柳家への贈答に、句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊五五円（送料八円）
十冊五百円（送料四円）

川柳雑誌社

printed in Japan

B判五号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十五年第十一号

定価　七〇円（送料四円）

昭和三十五年十月廿五日印刷
昭和三十五年十一月一日発行

（禁転載）

半カ年　四四四円
一カ年　八四〇円

編輯兼発行人　麻生幸二郎
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区西万代西五丁目二五番地
電話 大阪 (691) 六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

募集

課題吟募集

居心地（十句）　菊沢小椋園選
屋上（十句）　正本水客選
復職（十句）　国弘平林選

傾り（十句）　上井文輝選
上（十句）　水谷竹荘選
変孫（十句）　石川侃流洞選
足音（十句）

毎号募集

近作柳樽（毎月廿日）　麻生路郎選
川柳塔（毎月十日）　北川春東選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月十五日締切）　麻生路郎選

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の俳吟を募る。

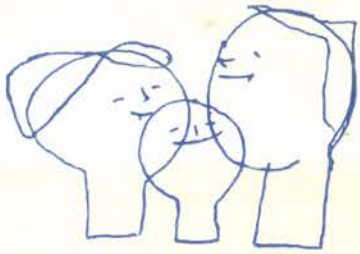
▼▼「評論吟」は誰でも投句が出来る。

▼▼「川柳塔」の投句は本社同会員に限る。

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和卅五年十一月一日 発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人 麻生路郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地 電話（六〇八八）
振替口座大阪七五〇五〇番 定価七十円（送料四円）

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位綜合ビタミン・ミネラル剤
ポポン-S
20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円

シオノギ
塩野義製薬株式会社

一家そろつてホーライ党

廣東料理
蓬莱
大阪なんば・TEL ㊸ 551－2

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。
送価 二五〇円 三二〇円
取次所 川柳雑誌社
至文堂
東京都新宿区払方町27 振替東京29507

南紀州が呼んでいる
白浜温泉
デイーゼル準急第2「きのくに」号
なんば発 毎日 12.30
全座席指定制 白浜口まで 620円
7日前から なんば 堺 岸和田の各駅日本交通公社 南海交通社 発売
週末準急「くろしお」号
なんば発 土曜ごと 12.55
南紀直通新宮行夜行列車
なんば発 毎日 21.55
座席券 7日前からなんば駅で発売
お問合せ(63)1151

南海電車